

372.1
Sa322n



2

0042451-000

372.1-Sa322n

二十六大藩の藩学と士風

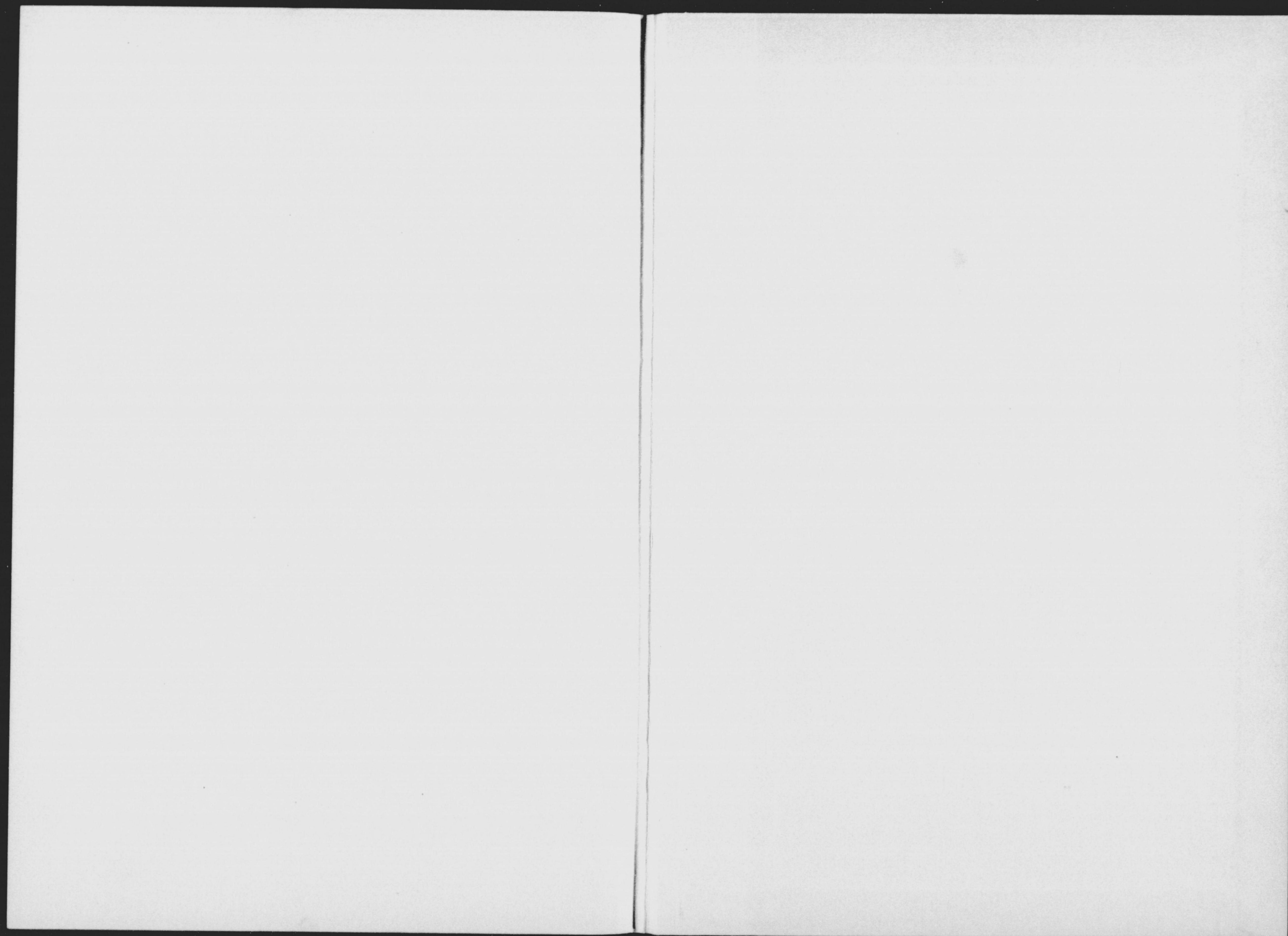
斎藤恵太郎・著

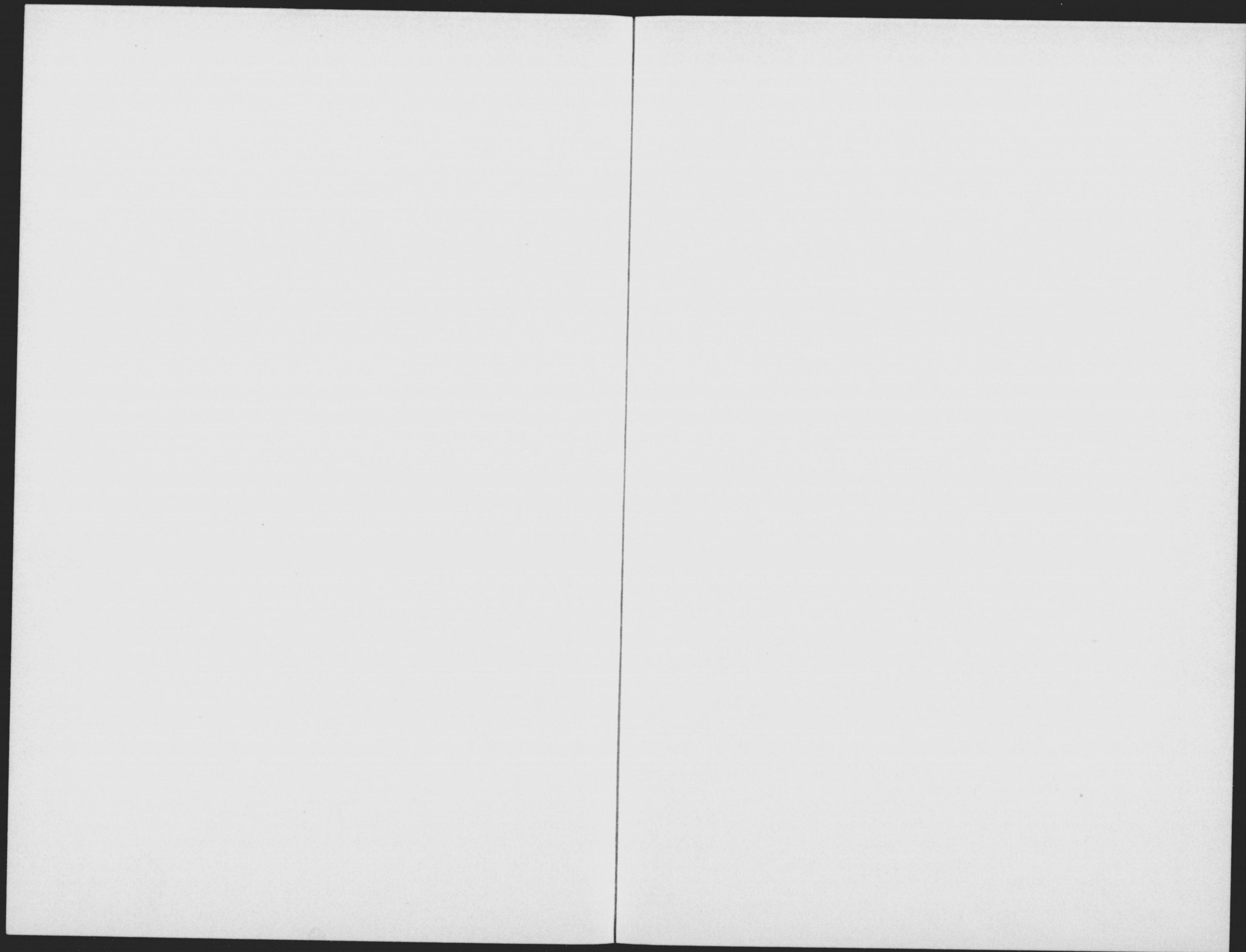
全国書房

1944

AHC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。





斗 6K 41

372.1Sa322m

一般資

372.1
Sa322n



278883

序

大日本帝國は、現在今、怨敵米英を敵手として、これを打倒撃滅すべく、一億一心、眞剣な戦争を戦つてゐる。著者のこの書は、この深刻苛烈な戦争の眞最中に執筆せられ、印刷せられ、發行されるものである。

かかるさ中において、書を著すために、時間を費やし精魂を盡すといふことは、何か等閑に過ぎるやうな心地がしないでもない。しかし私がそれを押切つて、斷然この書の著述を決心したことは、著者としてここに、多少信ずるところあるがためである。

我我は絶対にこの戦争に勝抜く。この必ず勝つといふ強い信念の大きな基調をなしてゐるものは何か、それは忠勇武烈、一死君國に報じて毫も悔いがないといふその精神が、ひとり残らず、國民の胸腔に蔚蒸し、燃えさかつてゐるといふことを知つてゐるに由るものである。今、その一とう崇高で一とう炯明な證しとなるものは、現にこの戦争を戦つてゐる我らの日本兵である。日本兵の強さである。日本兵のこの強さは、何物に由來するかと云ふと、すなはち忠勇武烈、一死君國に報じて、毫も悔いがないといふ精神に由るものである。我らはこの精神を言葉の上に括約して具象的に言ひ現

序

一

すのに、常にこれを大和魂といつてゐる。

大和魂——君國のために、死を捧げて毫も悔いがないといふ精神は、一たいどこに胚胎してどこから生れ來つたか。それはこの國に、神と人との格が區別され、君と臣との分が確立された時からのもので、要するに三千年の培養を經、研磨を受け、不退轉の信念にまで到達した崇高至上の顯現であつて、これぞ我我日本人のみが保有しあるものである。さればかかる試練と理趣の中に活き通してきた日本精神の檢討的立證は、これを筆舌の業としては容易に成し得べきものではない。それは却つて普通平凡な日本人が、ある必須の機會において、端的に發現するある行爲の方が、この崇高至大な大精神を正しく説明して餘りあることを、我我に啓示し得るものである。

よつて我我は、ある機會さへあれば、この大精神の因りて胚胎し、因りて生れ來れる根本を了解できるであらうが、更に別にまた適當な資材さへあれば、これを通じて必ずその精神の息吹に觸れ得るであらうとも考へられる。しかも私のこの著書は、わづかにその資材を提供したに過ぎぬものである。すなはち庶幾くばこの書が含藏蘊蓄してゐる内容の事實が、幸ひにさういふ意味への合致性があり、少しでも讀者の心に益するところがあり得たら、それは著者私の幸福である。

武に換へて文教政治を布いた徳川幕府の中世以後、列侯の各藩は競うて藩學を開創し、人材を育成

し、もつて士風の涵養、陶冶に力めたが、ここにも我我の殉君殉國の精神が、二三百年培はれ、研ぎあげられてゐる。この精神の熱と力が、今現に米英撃滅の戰爭を戦つてゐる日本兵の魂に、何らの關はりも持つてゐないとはむろん云へないことである。否、持つてゐないどころか、この尊といふ傳統を有つ大精神があればこそ、我我は必ず勝つにきまつてゐるのである。私はこの著述の筆を執りながら、日本兵が世界のあらゆる國の兵隊に比して、最強最勝である由縁は、繋りてここにあるのだと幾たびも幾たびも思ひ返し、思ひ返したことである。

昭和十八年初冬、ブーゲンビル島航空戦大捷の報を聞く、後三日、
籠落の山茶、初めて花をつくるの時。

著者記

引用書目概略

茲に掲げた引用書は、本書内容の各藩藩地である現在の二十六大都市における各図書館について、借覽した郷土資料の書籍及び他の郷土文獻と、更に著者の書齋における必要書等であるが、なほ多くの書目を遺漏してゐることを附加へておく。

薩摩奇談舊記集	薩藩舊傳集	薩摩士風考	西藩儒林傳
郷學沿革及先賢事蹟	薩藩家庭教育	薩藩の教育と財制	薩政中少年養成
健兒社物語	造士館沿革概要	大内文學と島津文學	薩藩士風沿革
薩摩風土	薩摩義士録	殉難志士祭典録	三州遺芳
薩藩師家傳統記	武士道批判記	鹿兒島武士踊歌	鹿兒島郷土史大系
薩摩古板書考	鹿兒島縣史	鹿兒島市史	福岡市史
福岡縣史稿	福岡藩諸家記録	福岡藩隨聞録	増益黒田家臣傳
黒田家老土物語	極秘	士鑑物語	福岡藩儒林傳
舊佐賀藩弘道館記念記	熊本市史	葉隠聞書	筑紫史談
御當家秘書	仇討と心中	久留米市誌	久留米小史
佛前老人筆記	鳥根縣史要	近代正說碎玉話	防長近世史談
佛藩邸考	用谷餐史	佛前家中先祖覺	公秘録

備前	温古雜記	吉備物語	佛前臣譜
嘉政傳聞録	丸山の記	藩中別録	思出草原稿
載古録	寸箴の塵	榻要録	備陽記拔萃
雜錄	岡山人物傳	秘蹟記	池田家老臣記
岡山縣人物傳	備前秘録	志士遺蹟	土居の四ツ塚
備藩集義録	備前秘録	仰止録	諸家の傳
徳島集誌	徳島郷土史	徳島藩庚午事變談	徳島縣史
武門練曉抄	高松市史	讃岐府史	讃岐通史
松平藩雜錄	松平藩記	高松夢物語	伊豫史精義
松山叢談	岡平藩記	舊藩叢話	伏見事件
香川縣史	土佐遺聞録	高知縣史要	土佐人物傳
井伊家正諫記	井伊家美談拾遺	擬作七賢祠堂記	嚴正人物傳
御家中家並帳	古城御山往昔唱	滋賀縣史	美濃會誌
美濃雜事記	美濃國諸舊記	大垣城主歴代記	美濃會誌
郷土史談	淡海録	彦根藩士六十七人追放	松居不及翁覺書
濃飛文教史	維新前後の福井藩	秋陽隨筆	しるべ草
葉庵筆話	懷舊集	追懷帖	深山木
舊城下景觀	越前まんざい	南城雜話	冬夜雜話
賊徒一件考	越見夜話	越藩遺事録	續片聲記

引用書目概略

荒子組告諭
屋漏堂雜記
加越能三州奇談
加賀藩史稿
加賀國老八家錄
金澤深秘錄
古老舊聞
白山殿傳
前田慶次殿傳
長尾信開錄
越中史料
足輕と佐藤兵右衛門
伊達武徳遺聞錄
野中の清水
伊東節翁古談
老人傳聞記
馬笑隨筆
南部藩古來留技集
岩手武道型解話

越賀雜記
隱秘錄
下學老談
本多家義士傳
起居錄下書
郷史談叢
近藤忠之丞仇討一件
昔日北華錄
夜足輕備廿一段話
古今雜話錄
仙臺諸集錄
伊達四代記
紅禍雜記
大名仙臺武士鑑
福島縣史
南部諸士由緒記
開老遺事
舊南部藩學制沿革考

大野木仲三郎建白書
福井縣史
加賀の家
葛谷昌興日記拔萃
求舊奇談
國事昌披問答
三州不思議書
武家耳底記
老人物語
富山市史
金澤舊記
他見無用錄
仙臺市史
福井玄老文の寫
伊達名臣記事
電報翁夜話
內史畧
備忘錄
津市文教史要

小川幸三郎遺忠錄
懷慧夜話
加賀藩勤王者遺難
金澤の武家と町家
金澤市紀要
古老紀談
集古雜話
一開見雜錄
加賀藩經武館紀要
越中郷土史
青木新兵衛傳
伊達鑑
仙臺風俗史
林翁筆記
燈前新話
雙鶴萬歲錄
南部藩教育小史
盛岡郷土史談會誌
見聞集

愛知縣儒者傳
江戸尾州へ浪人者來候事
尾張武人物語
近世見聞雜事錄
轉寢榮花の夢
毀譽相半書
秘記六種
藩中與力由緒書
和歌山史要
兵法秘術要義
漏蓋筆記
窓下集話
異說まぢ
其日影草
異書難波戰記
極秘申上候
戸次流劍記
彰考館總裁畧傳
國書解題

名古屋藩學校
赤心秘書
見聞雜記
見聞雜著
見聞雜記
牧野武邊爭論
堀田狀由來記
父母狀由來記
紀州文化研究
南紀土俗資料
御治世年表
雨の伽
竹館遺事
提醒紀談
慷慨家列傳
耕漁餘滴
柏木兵衛上表
日本教育史資料
大日本人名辭書

名古屋市史
尾張出生士林錄
大垣史料
往來一札
贈餘雜著
所開錄
松島石窓雜記
しのぶの露
南紀土姓舊事錄
舊和歌山藩士族に告ぐ
眞雄雜集
宴遊日記
英公事蹟
一叟爐邊話
殘年備忘
嚴秘錄
御役談
大百科事典
舊藩と新人物

名古屋文學史
尾張徳川十六代間事蹟
地士帶刀人劍術組合
四季草
紀侯言行錄
竹窓閑話
木國武士留魂錄
紀開集
南紀名臣傳畧
詰所及大砲一件
談古書餘
秘笈日錄
擊劍叢話
見聞書
一言書
武風沿革論
維新回顧と水戸の功績
近世儒林編年志
彼舍漫筆

引用書目概略

引用書目概略	八			
楓軒日録	弘道館記	頁	日本文庫史	水戸老人話
望雲手冊	甲子夜話	日本文庫史	日本南蠻史	日本南蠻史
日本近世教育史	日本經濟大典	近世政治史	藩精	藩精
秘籍大名文庫	近世德育史傳	藩論譜	日本南蠻史	日本南蠻史
日本大年表				
(他數十種)				

目次

鹿兒島藩(造士館).....	三
鹿兒島藩學の有する、多彩極まる歴史的存在	
熊本藩(時習館).....	四七
三名城の一——熊本城下に培はれた肥後藩の士風	
久留米藩(明善堂).....	八一
儒學の陶冶を受けた筑後士風の勃興	
佐賀藩(弘道館).....	一〇七
小説巷話に富む藩歴、揖睦佳談中の君臣	
福岡藩(脩猷館).....	一四一
長政に『家訓』あり、益軒に『家道訓』あり	
長州藩(明倫館).....	一七七
八、百五十年の研精、文教と士魂の交流	

松江藩(明教館)……………二〇五
 馬において士精神を構成した雲州の松平
 廣島藩(修業堂)……………二三五
 藤原惺窩、石川丈山に淵源した文教の流れ
 岡山藩(稽古所)……………二六五
 血に發し學に興る、烏城城下の文武精神
 徳島藩(學問所)……………二九七
 國資豊かに育くまれた阿波の學問と侍士氣質
 松山藩(明教館)……………三七七
 文武垂範の藩主、諫争憚からざる藩臣
 高松藩(講道館)……………三五二
 水戸の血脈と思想を傳統した高松の松平
 高知藩(致道館)……………三七七
 識に徹する士道精神と、南陲に發揚した文教の餘彩

紀伊徳川家(學習館)……………四〇五
 柑橘花く處、紀國の文芳とその武薰と
 津藩(有造館)……………四三二
 名督學の連續と傑儒奇儒に富んだ津の國校
 尾張徳川家(明倫堂)……………四六一
 藩祖義直の精神を繼承した教學の感化力
 大垣藩(敬教堂)……………四八七
 儒にして武風を存した大垣城城下の文教
 彦根藩(弘道館)……………五二七
 文武對立の中に渦を描く櫻田門外の兇變
 加賀藩(明倫堂)……………五四五
 北陸における文化藝術の淵叢金澤の精華
 福井藩(明道館)……………五七三
 『奉思錄』をもつて起る越前家の精神氣魄

富山藩(廣徳館).....五九

教學と士精神を振肅した無比の嚴令

會津藩(日新館).....六七

文と武、有無相通ずる會津士魂の根元

米澤藩(興讓館).....六四

剛將景勝の武勇と賢君鷹山の文教

仙臺藩(養賢堂).....六七

自給一萬二千石、學館中興の大業績

南部藩(明義堂).....七〇

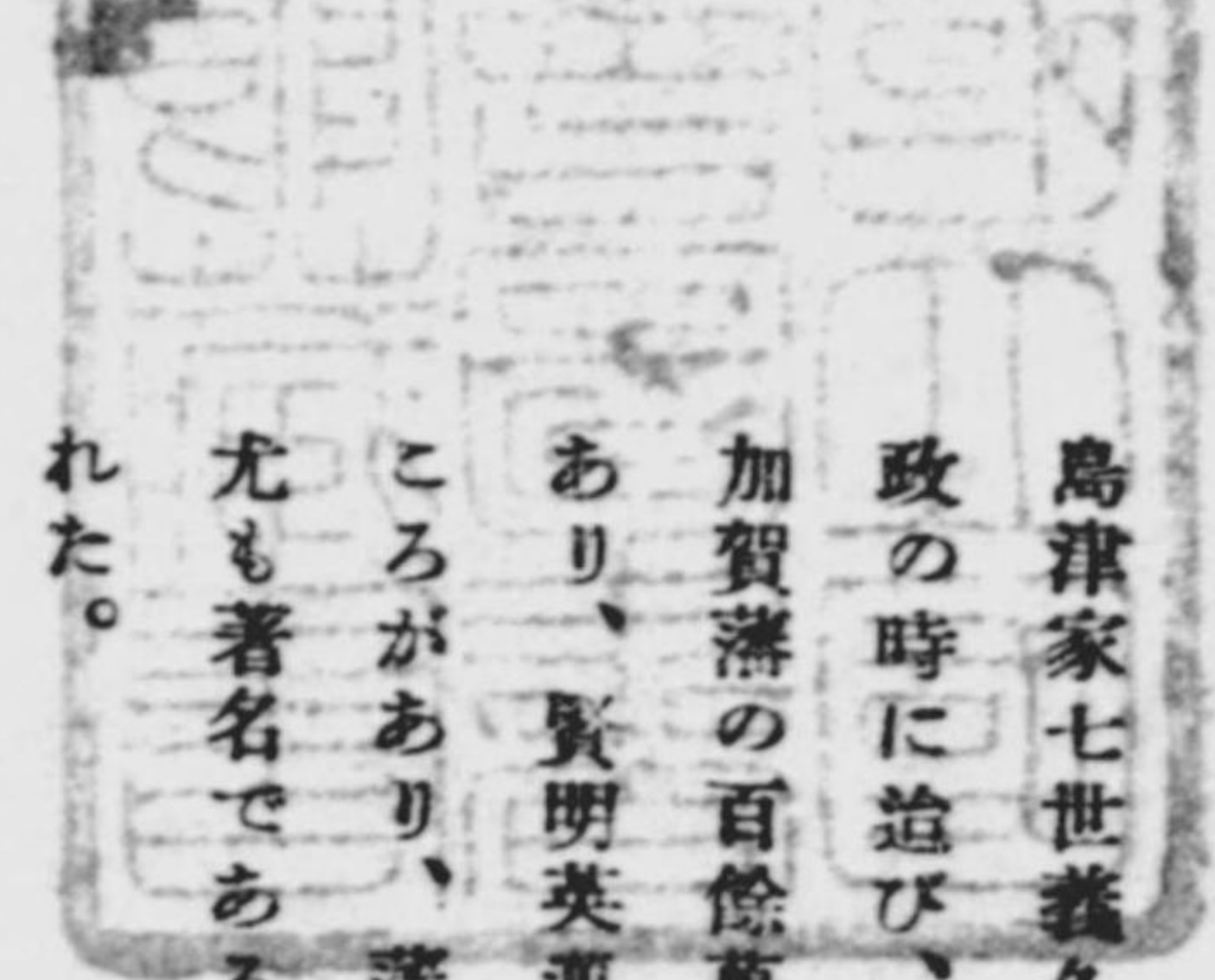
列藩中最古の學舎、盛岡の文武稽古所

水戸徳川家(弘道館).....七七

忠孝無二・文武不岐・學問事業不殊其効。

二十六藩の藩學と士風

鹿 兒 島 藩



島津家七世義久、九州の諸豪族を征服してここに居る。子孫連綿、徳川氏幕政の時に及び、以來七十七萬石の食邑を保つた。いはゆる三百諸侯中、實に加賀藩の百餘萬石に次ぐの大祿である。幕末嘉永、安政にいたりて島津齊彬あり、賢明英邁の君公で、夙に尊王の大志を抱き、皇謨恢宏のために盡すところがあり、藩人からも明治の功臣を夥しく輩出せしめた。西郷、大久保ら尤も著名である。明治に入りて版籍を奉還し、次で華族に列し公爵を授けられた。

鹿兒島藩學の有する、多彩極まる歴史的存在

—鹿兒島藩學造士館—

重豪、齊彬二公の異學觀

島津家二十八代の當主齊彬小字邦丸、通稱三郎、贈從一位薩摩守、安政五年歿、年五十、後照國大明神と尊崇祭祀され別格官幣社に列す。は極めて聰明達識な君公で、當時稀有の英主として國內に取沙汰せられた傑物であるが、その世子としての期間が非常に長く、嘉永四年、實に年四十二にして初めて封を襲いで鹿兒島藩主に直つたのであつた。齊彬はその世子時代に、學問奨勵の趣旨に基づいた計畫の下に、薩摩府學藏版として『大學』『中庸』『論語』『孟子』等全部十冊を山崎闇齋點で刊行した。一たいこの時代は、なほ異學（幕府の朱子學に對する他派の學問）禁制の眼がなほ嚴しく光つてゐた頃のことであるから、點だけのことはあるが、闇齋の名においてすることは遠慮すべきが當然なのだけでも、放膽にして豁達な齊彬はそんなことには頓着なくこれを決行したところ、やはりこの人らしい果斷さが見られるのである。

鹿兒島藩の藩學造士館は、齊彬の前代重豪小字久方、通稱又三郎、從三位左近衛中將薩摩守、天保四年歿、年八十九。が安永二年に開創したものである。この重豪もまた近世における鹿兒島藩の藩主としては、殊に屈指するに足るところの傑出した一人であつて、その行業について多くの功績を遺してゐるし、文教のことに關しては特にそれが擧げられるけれども、件の異學といふ點についてはひどくこれを毛嫌ひして、その詮索と排除とに随分腐心したものとてである。すなはち藩學の聖廟、講堂が竣工した時に、重豪がまづ何よりも憂ひたのは、藩の子弟が過つて異學といふ邪徑に踏みこみはしないかといふことであつたらしい。そこで彼は早速腹心の儒臣と協議を遂げ、數條の學規を制定してこれを學館内に掲げ、同時に學生一統嚴にこれを服膺すべき旨を申渡した。そのうちの二箇條に次のごときものがある。

一、講書は四書、五經、小學、近思錄等の書を用ゐ、註解は程朱の説を主とし、濫りに異説を雜へ論ず可らず。

一、讀書は經傳より歴史百家の書に至る可し。尤も不正の書を読む可らず。

これに就て見ると、これは必ずしも學生に對してのみその用意を訓示してゐるのではなく、併せてその教導の任に當つてゐる督學教授以下のものに對しても、同時に訓諭してゐる様子である。重豪はそれほど異學の排除については深重な心遣ひをしてゐたが、彼は更にその翌安永三年にも『異學の毒を密かにその腹中に蓄へ、正學の面を被れる儒臣あり。この面従心非の者を改悛せしめんが爲に——』といふ

趣旨から、次のごとき諭告を發した。

去年聖堂創建の意趣は、人々承知の前に候。いづれ學問は究理より段々智識を開發致事に候へば、程朱の學より外他なく候。然る處、間には、偽學之者も有之由相聞え、然る可らず候。たとへ表面程朱之學を講じ候ても、心中に實に尊崇の心得なく候ては、聖堂の祿を受け、孔孟程朱の祭祀に預候心底、却て聖賢を戲弄致すも同然にて、其罪莫大に候。之に依て講釋人は勿論、其外入學之徒、實に程朱の正學を相崇め、一切異説を交ふ可らず候——云々。

齊彬は弱年時代、重豪の感化薰陶を享くるところ多く、また生涯この祖父の遺風を仰慕してもゐたが、學問の事については、正學異學の區別をそれ程堅苦しくは考へてゐなかつた。安政中彼が發令したこれに關する達し書の中に、次の一節がはつきりと書かれてゐる。

——學問も折衷學、水戸風にならぬ様との氣遣も有之哉に候得共、之は不可然候。何學風にても立入て研究候へば、朱子學の優れたる處も、分明可致事に候——

これを見ても齊彬其人の、世間的な物情事態に拘泥しない豁如たる氣象が窺ひ知られるではないか。因みに云ふ、重豪のいはゆる面従心非と目した儒臣は果して誰を指したのであらう。或ひは當時の聖堂奉行であり、後藩學の教授になつた山本秋水名正誼、字子和、通稱傳藏、號秋水、又小醉翁、文化五年歿、年七十五。のことではあるまいかとも思はれる。秋水は山田君豹號月の門を出たもので、最も左傳に精しく、左傳傳藏と呼ばれた儒臣で

ある。君豹は室鳩巢に學び、また餘熊耳にも就いた。熊耳は物徂徠の駿園派の文詩人で、最も李于鱗を悦び、その體を爲ぶことにおいては當時國內比なしといはれたものである。しかしながら君豹は生涯鳩巢の説を堅持して、熊耳から受けた異端の鋒芒は決して露はすことをしなかつたと云はれてゐたさうだが、重豪はその君豹の門を出た秋水を心底から信じ切ることが出来なかつたものかも知れぬ。當時秋水は君公に侍讀してゐたが、かつて侍臣から、更にその世子への侍讀をもこれを兼ねしむべく、しばしば進言するところがあつたけれども、重豪は容易にこれを許さなかつたといふ點から推測しても、彼の學問については絶対純粹の信用をおいてゐなかつたのではないかと疑はれる。しかもこの秋水の儒臣としての地位は極めて優越であり堅固であつた證據としては、彼が後年、藩の不祥事であつた「近思錄崩れ」後章に記述する。に際會し、不幸その政争の具となりて辭職し、空しく悶死を遂げるにいたつたまでの間に、

次代齊宣の當時、赤崎海門

名貞幹、字彦齡、通稱源助、薩摩の人、文化中歿、年六十五。

の後を襲うて更に二度目の教授に直つてゐる。

この事から推量してみても、君公は彼の學問を不純であると考へながら、なほこれを遠ざけることを能くせぬのみか、當人は後年まで依然として藩の學柄を握つてゐたことが明らかに知られるのである。けれども、君公が常にその腹中に藏してゐたかうした觀念の仄めきは、彼秋水の氣持の上にも、不言不語の間に自然と傳つてゐたのかも知れぬ。それかあらぬか、件の秋水が執筆した當時の『本府學宮講堂記』といふ一文を讀んでみると、そこに一脈の苦しい自慰的な辯疏みたいな辭句が織り交ぜられてゐる。曰

く(原漢文)

——故に後の經術を習ふ者、唯だ程朱之説を主として、これを善しとなせり。本府諸生の四書と詩とを讀む者朱子を用ゐ、易には程子朱子を用ゐ、春秋には葵氏を用ゐ、孔には陳氏を用ゐ、又小學近思錄等の書を用ゐ、以てその講論に資す。童習白紛、また他説あるを知らず。固すでに篤く程朱の説る信ずるが爲なり。

これをもつて見ても彼は純粹の朱子學者にはなり切れてゐなかつたことを推すべきである。

薩摩文教の淵源

薩摩における文教は、五山文學派の僧桂庵玄樹が入薩して、ここに初めて朱子學を唱道したに發端したもので、士風の淳化がそれから始められたものであるといふ。桂庵玄樹は周防山口の人、五山の一たる南禪寺の惟肖得巖に學び、後應仁元年足利義政の遣明使節の一員として、正使天與清啓と俱に明に渡り、時の憲宗皇帝に謁見し、且つ朝野の學士文人と交りを訂し、親しく當時の燦然たる文物に接觸しつつ、七年の長き支那各地を淹査流遊し、その間彼は殊に朱熹の新註を精讀研磨して、文明五年に無事歸朝した。次で應仁の兵亂に遭うて京師に居たたまらず、やがてこれを避けて遠く九州に下り、つひに鹿兒島に留錫したのである。かくてこの地に在ること實に三十年、この間彼が薩摩の文教開發に致した力

は極めて大であつた。されば鹿兒島における朱學の開祖はこの桂庵玄樹であると同時に、またこの地における有ゆる文藝の源流をなしたのも彼であつたやうである。

文明十年、彼は島津家十一代の當主である忠昌通稱又三郎、修理亮、陸奥守、永正五年歿、年四十六。に知られ、その招聘に應じて

入薩し、兵馬倥傯の間に儒學を提唱することになつたが、その門弟の中には伊地知重貞、佐佐木永春、

眞木某のごとき豪の者がゐた。伊地知重貞は島津家の老臣であり、佐佐木永春、眞木某は異色ある人物

であつたといはれる。すなはち伊地知は桂庵に勧めてその『大學章句』を上梓せしめた人であり、一説に、こ

は桂庵これを伊地知に謀つたのであるといふ。佐佐木は桂庵に依りて渡明の方便を獲ようといふ、當時としてはかなり大膽な悲願

を抱いて來り投じたものであつた。同人は果してその志望を達し得たか否かは今明らかでないけれども、

眞木某は後、島津家の外交文書を取扱ふ職役に就き、つひに琉球、朝鮮に渡航往復したといふ説がある。

しかしこれとても渡明し得たか如何は分明しない。

桂庵の朱子の『大學章句』は、いふまでもなく彼の新註であり、文明十三年の出版で、その奥書に『文

明龍集辛丑夏六月左衛門尉平氏伊地知重貞命工鏤梓於薩州鹿兒島』とある。これすなはち我邦における

朱子新註最初の刊本であつて、世に『文明版大學』又は『伊地知本』と稱せられるものであり、この文明

となり、後延徳四年再刊、これを延徳版大學といふ。且つ薩州における最古版の書典とされてゐる。尤もこの外に僧虎關の『聚分酌略』

なるものがあつて、右と同じ年の文明十三年に薩州出水郡の和泉莊から開版になつた一書がある。され

ばこの二書は、果してどちらが先に發刊されたものか今明らかでないといふが、いづれにしても鹿兒島における最古版と稱することができる。

右の記文中に註記した『延徳版大學』は、伊地知重貞の裔孫であり、安政中藩の記録奉行であつた同

姓季安に傳はつたが、季安は『漢學紀原』を著はして、鹿兒島における桂庵の儒學唱道の顛末を闡明し、

さらにこれに秘藏の『延徳版大學』と桂庵の畫像畫僧秋月等觀の筆と傳へらるるものであらう。秋月は薩人、初めを

添へて江戸の佐藤一齋に贈り、切に桂庵の碑銘を懇請した。佐藤一齋は、當時林大學頭述齋を補佐し、かねて林門の學頭に任じてゐた。これにより

て一齋初めて桂庵の事實を知り、深くこれに感動して、手づから右の『延徳版大學』を鈔寫して更にこ

れを大學頭林述齋に呈したが、述齋またこれを稀觀とし、これによりて又又さらに一本を影寫して學館

に收めた。なほ一齋が鈔寫の書後に左の文を題してゐる。

文明中有桂庵禪師者、崇信宋學。當時薩人伊地知左衛門尉、受學於禪師、始榮大學章句。寔

本邦刻新註之嚆矢也。歷年已久。再刻亦爲牽觀。曩者伊地知季安偶獲此本、介人寄示之余。

余又轉示司祭。林公奇之。命而摹贖收於學館。今還原本。因並及此。傳之永珍襲云。

天保辛丑天開月下澣 江都 佐藤坦手識

その他薩摩に縁故のある古刊本として、有馬純彦氏島津家編纂員の『薩摩古版書考』に據ると次の數種がある。

『孔子聖蹟圖』二冊、文之手筆本。寛永中鹿兒島で上木開版されたもの。文之名は玄昌、南浦と稱ぶ。

俗姓湯淺氏、日向の産であり、島津義久、家久の侍讀となり、後薩摩大龍寺を開創すといふ。

『家法和點』一冊、桂庵點の書である。この書は桂庵が朱學の由來と四書の讀法を説くため、特に門人に示したものである。これは桂庵の學脈を傳へた僧如竹が、江戸で上木したものといふ。

『南浦文集』三冊、文之の文集である。この版本は三種あつて、一は寛永二年版、如竹の編刊に成るものらしい。二は寛永六年版。三は慶安二年版で、これは寛永六年版の再刻であるが、外に寫本の六冊物があり、島津家の所藏といふ。

『四書集註』十冊、文之點である。如竹が寛永二年江戸で開版したもので、これは四書の註解としては最古のものであり、これより以後、四書は海内に普ねく讀まれることになつた。

『周易傳義』八冊、文之點。同じく如竹が寛永四年に江戸で刊行したものであるといふ。

薩州における文教の勃興は、前に述べたやうに概ね桂庵以後に屬するものではあるけれども、すでにその當時虎關の『聚分詁略』のごときものが、同じ薩摩の地において開版刊行されてゐる事實があるのであり、殊に本書が彝倫道德を旨とした經義本でなく、その題款から推しても、教學が稍や成熟した後を享けて初めて發生するといふ順序にある文藝の書、または文藝の參考書であると思はれることは、極めて注意に値するものである。

桂庵は『書蔡傳』の講義を得意とし、且つ『周易』に和訓を施して人に授けたといふ説もある。易の

本義は民用を濟ひ足はすにあり、且つ王侯君子、人の主たるものの精神を修潔するの道について切實なる意義をもつものであるから、當時鹿兒島のごとき武國にありては、これらの業績がよくその國是に合致したであらうことは想像に難くない。桂庵すでにかくのごとくであつたが、その前後薩摩には禪僧がかなり多く輩出し、中にも仲翁守邦は足利學校に經史を講じ、九華禪師は同校七世の校首であつたなど、文教との契縁まことに淺からざるものがあり、後の藩主忠良のごときもこの影響を受けて、儒佛渾融の治教を布いたほどである。

この忠良には、後代まで教化の經典と稱せられた『伊呂波歌』といふものがある。今、彼の道念の一端を窺ふ資料として、その初めの"い"と終りの"す"の二首だけをここに節して見ると、實に次のごときものである。

いにしへの道をきいても唱へてもわか行ひにせずはかひなし

すこしきをたれりもしれ満ぬれば月もほとなく十六夜のそら

忠良はなかなかの歌道の上手であり、且つまた極めて儒學を好んだ。されば代代のかういふ人たちの希望が積り積りて、つひに後代藩校造士館といふ實を結ぶにいたつたと見るべきものである。

この忠良は風流の趣味をも深く解してゐたが、決して文弱の人ではなかつた。造士館を作りあげた重豪は氣象群を抜いた英邁な人であつたけれど、後漸やく文に過ぎて、その禍ひを免かれなかつた恨みが

あつたが、忠良は重豪ほど、時勢に對する推挽力もつてゐなかつたけれど、學問に誤まられもしなかつたし、その時代の士風もかなり緊張してゐた。彼の左右に侍してゐた小姓某が、ある日庭掃除をしながら、砥草を折りて懷ろに入れたのを物陰から見つてゐた忠良は、ややありて一首の歌を書いてその小姓に示した。

世の中に針とるものは棒をとる一と草とれはと草とるなり

その小姓は即座に腹一文字に掻ッ切つて死んだ。君公は小姓を殺さうと思つて歌を詠んだのではないが、小姓はそれを深く愧ぢて、死をもつて君公に謝したのである。この一話は、當時の士風がそこまで潔よく張り切つてゐたといふ一つの證しとはなり得るであらう。

重豪の隠居とその餘威

藩校造士館の開設は安永二年、時の藩主島津重豪の創むるところである。造士館は水戸の弘道館、熊本の時習館、津の有造館、會津の日新館、仙臺の養賢堂、山口の明倫館などと俱に、有ゆる藩校中屈指のものであり、極めて有名な藩學である。藩主重豪は、幕末諸侯中の英主と謳はれた齊彬の先代で、風格豪邁であり、氣識飽まで明敏、殊に儒教を尊崇して士風の恢宏を圖り、舊を捨てて新に移るに躊躇するところのない君公であつたが、時恰かも藩の財用がすでに餘ほど苦しい境地に陥つてゐて、家臣ど

もの中には、造士館の開設についていろいろと陰評定などが持上つて居り、普通の常識からはなかなかもつて學校の設立などは考へられない時節であつたのである。そこで重立つた家臣から内内君公に註言を入れて、一時その創設案を覆へし、事を延期せしめようとしたが、豪氣豁達な重豪はそれを押切つて、無理から學校建設の本懐を達してしまつたのである。これについて藩士某の手記した次のごとき記録が今にのこつてゐる。

——初め場所知れず。そのうち家士讚良五助、醍醐院五兵衛の屋敷、比志島要人の屋しきを當てしも、反別と場處の加減にて話つかず。引料も六十貫目の物入かたがた中止にて、つひに只今のところ（火避場）にきまる。但し外の處も御吟味中、いまだ場處不定のうちより材木集め、櫻島には小山田より秘藏の材木集まり、上品の木ども、すでに御用心のため先年集まりてあり——
淨岸院様御弔ひ、物入り銀二百五十貫といへども、まづ三百貫ならん。諸士よりも寄付仰付、上下町にも中山王、島津因幡、同筑後、種子島藏人にも手傳仰付、當分日々千人以上人夫にて大ふしん也。大工三百七十八人、かれこれ外六百人、土は聖堂七尺引あげ、櫻島より六七十人にていて參る。

これはかなり憶測や獨斷の多かりさうな記録であるけれども、とにかくこれによりて察するに、重豪がその豁達奔放な氣象にまかせて、多少我意を揮つてやり遂げた形跡のあるらしいことだけは否定出來

ない。されば重豪といふ藩君は、とにかくいろいろの行業行績をのこした人物だけに、後代の人人には一とかど傑出した藩主として仰がれてゐるけれども、當時にありては却つて一種の暴君と見做されてゐたのであらう。其頃紀州家九代の主徳川治貞は世に所謂名君の稱を得た人であるが、重豪の自儘な行績は一に徳川將軍家と姻戚關係あるを笠に被ての所爲であるとなして、事毎に重豪の行動を抑制する手段に出でた。元より薩摩は勢威權力において無双のものがあつたけれども、相手が何分御三家筆頭の紀州なので、重豪にはこれが何よりも苦手であつたらしい。當時江戸の賣藥行商人は『日本香桂子、癩と痞に妙ぢや』と觸れあるいてゐるのを、何處の物數寄か知らぬが、それをもちつて『日本後見使、さつま押へに妙ぢや』と謠はしめたことが一時評判であつたさうである。事實重豪は種々のやり過ぎが嵩じたため、藩の財政の運用や處理について失錯がなかつたとは云へないし、それが一つの原因をなして、中途四十三の若さで隠退の已むない身になつたのは、萬致方もないことであつた。

重豪は曾てその世子時代かに、すでに日本將來の歐化を想像して“文明は西より來る”といつて、夙く長崎で和蘭船に乗り試み、西歐の文化事業や學事についてよく注意研究してゐたといふが、さういふ氣概のある文化人であつたから、薩人の粗野な習俗を撓めようとして、頻りに都會驕奢の風を故國鹿兒島に移すことに努めたものであるといはれる。重豪は安永二年江戸から鹿兒島に歸つて、早速次のごとき布達を出してゐるのは、その確證として擧げられる。『御治世年表』による。

一、言語、行跡、髮形等之儀相直し候様可致。

一、御國許温泉へ他國人參候儀不苦候。

一、諸事指南に、女にても他國より參候儀不苦候。

一、花火、船遊等致候儀不苦候。

これによりて見るも、重豪その人の眼には、如何に郷國の國振りが野卑粗陋に映じてゐたかが察せられるであらう。もしこの心事をもつて『眞英雄集』なる郷土の物の本に載するところの、島津家遠祖義弘の、

——惟新公兼々御意候に、京談を使ひ他國の風を似せ申す時節に成候ば、薩州は弱く可成候。他國を似せぬうち計は、薩州は多人數の中にありても、國物と知れるがよし。今の様ならばやがて京談はやり、身なりまでも他國者の様に可成候。とり立大名のうはそなへを見てよしと思ひ、かふした所我國の風は、日にまし疎く成、心他國に馳せ、尤我國は蟬のぬけがらの様に成行く所より、國表は大身小身者まで、困窮に成立ものじやと御意候。

に對照して見るならば、彼とこれとは、まるで反對な見方、考方をしてゐたことに驚かれるであらう。しかも重豪が右の布達を發令して九年目の安永十一年にいたりて、つひに次のごとき布達を出し、士風の低調墮落を喰ひ止め、俗習の頽廢を支へようと焦り出してゐることが指摘される。

——今度繁榮方被_二相立_一、芝居或は茶屋等相立、他國男女に不限入込候様に令_二免許_一候處、相違候て、頃日武士之風儀懦弱に流、不宜所行有之候由被_二聞召_一候間、右之通無之、恭謹之風儀に相成、質朴に相守候様に被_二仰渡_一。

これは正しく前布達の藥の利過ぎであつて、重豪も有司も、これには今さら、その繻縫と拾收に狼狽したであらうことが想像出来る。さればこれに因縁して、當時藩中において種種の出來事があつた。すなはちその一つは、君側において起つた新進派と守舊黨との嫉視葛藤である。守舊黨は古來の士風を頑固に堅持しようとする一派であり、他は江戸や京上方の風習を學ばんとする一派であつた。その新進派の士江藤某といふ一人が、ある時着用した火事羽織は、全く江戸風を摸したもので、猩猩緋と稱ばれる貴重な織物を用ゐて製したものであつたが、それを見た守舊黨の佐野某は、これを一喝してあまつさへその面に唾を吐きかけたことから、端なく刃傷沙汰にわたり、佐野は江藤に手傷を負はした上、その猩猩緋の火事装束を剝ぎとりてこれを泥溝に叩きこんだ上、同志三浦兼馬といふ者の邸に駆けこんで身を躲した。ところが、手傷を負はされた江藤は、甚だ折悪しくも造士館の事務に參與する士人であつたのと、その火事装束は、彼が江戸勤務中に間接ながら藩公より頂戴したもの、すなはちこれは元藩公が着用されたこともあるといふ一物であつたが故に、これを知つた藩主重豪は大いに嚇怒し、速急兇犯を召捕れと嚴命を發したので、この騒動は一層深刻な意味をもつこととなつた。そこで藩の役向から、三浦に

對して直ちに佐野を引渡すべきことを通達したけれども、三浦は頑としてこれに應じない。殊に家中には幾ばくかの加擔人も出てきて三浦を支援し、いざとなれば刀にかけてもこれを庇はうといふ氣息を示し、また反對黨の新進派一派は、君命を眞向に駭して彼らの不當を鳴し、これまた容易ならぬ行動に出づべき模様であつたが、結局三浦側は、つひに飽くまで佐野を隠し切れないことを自覺して、密かにこれを國外に送り出さうとしたが果さず、佐野は捕はれて斬られ、同志の一人某が三浦の首級を擧げた上、これに事情上述一札といふ書面を添へて、その菩提所の卵塔場で腹搔き切つて死んだ。しかし君公重豪の怒り容易に解けぬため、事件はこれにてもなほ納らず、つひに守舊黨の數名は右に連座して除籍、罷免などの沙汰に處せられ、やつと拾收がついたのであつた。

當時の世情は、かかる騷擾を醸し出すべく、薩摩士風が濫蒸し切つてゐたのであるし、殊に重豪の爲した種種の經營が追追と多岐に亘つた結果、窮迫してゐた藩の財政がここにいよいよ失調するにいたり、一面學問の保護も過重に過ぎた嫌ひがあるといふので、次で合傳流の兵學家徳田邕興なるものが蹶起し、藩主排斥の烽火を擧げたのを切っかけに、耐へ耐へてゐた守舊黨の面々の反對運動が爆發したのであつた。しかも遮二無二、一氣にこれを叩きつけてしまふといふ手段に出たら、如何なる大騷動を惹き起すやも計られぬ羽目にまで立到つたので、さすがの重豪もとうとうここに退引隱居するの已むない運命に辿り着いたのであつた。

徳田龜興は鹿兒島の産、兵學を京都の須藤一柳に學び、これより先鹿兒島に歸りて、その當時藩が採用してゐた武田流兵學を徹底的に駁撃し、その著『韜略餘論』に次のごとく述べ立てた。

當今の軍學は、精神を棄てて形式に流れ、以て國家の廢亡を俟つものなり。其誤を正し、惑を啓くこと、先づ徳田龜興より始まる。

彼の抱負は、實にかくのごとく肝太なものであつた。彼のかうした武田流兵學への挑戦は、むろん造士館における武學教師らに大きな刺撃を與へたが、藩の子弟中にはまた却りて徳田の合傳流に奔るもの少なからず、彼の門戸が漸次に氣息の強大を致すにつれて、徳田は自家合傳流の隆興はまづ敵の牙城たる藩學武道部を粉碎するにありと決意したのか、躬から藩校に臨んで一場の講演を試みようとして猛烈な運動をおこし『武田流は排撃せず、單だ合傳流の要旨を説く』といふ約束で造士館に臨んだが、彼是有司との右の約束を無視して『戦ひを爲す必ず敵がある。兵を談ずるまた敵なくしては適はない』と説破して、劈頭から盛んに武田流兵學の非なる所以を強調指摘したのみでなく、果ては藩政にまで亘りてこれを批議したので、忽ち藩主重豪の嚇怒に觸れ、捕へられて大島に流謫された。これは安永五年のことであり、在島實に十二年、天明七年漸やく赦されて鹿兒島に歸り、以後引續いて合傳流を唱道し、更に數種の著述などをして、文化元年五十八歳で歿したが、徳田と相前後して久保七兵衛之英があり、『御家兵法純粹見聞秘記』なる一書を出して、武田流を駁撃すると同時に、また筆鋒を藩校や藩事に轉

じ、造士館教授山本秋水を『この輩少しく詩文を作る』と嘲けりて、その迂儒振りをヨキ卸し、進んで藩の國老有司輩の無能を罵りて、

——御家老職の儀は、國の風俗を正直強大にして米穀を爲三充滿に有る也。是御家老職の躰也。此躰を得たる御家老は、島津中務久貫限にて絶て無之と云へり。今は太守公の御意に叶ふを第一に致し、風俗之善惡は國家の興廢之基也と云ふ事を不知して、本朝第一の古き風を改めて新風を用ゐ、毛を吹て人の非を求め、咎を云付て權威を取を第一とするを、御家老職と覺えたる迄也。間には表忠臣と見えて、裏は御家老の罪人も有之也。況んや於其下之役人をや。不足論處也。

と突込んでゐる。かくのごとくして、彼らのかうした運動が、さしも強大であつた重豪の地位に動搖を與へ、つひに彼をして引退隱居せしむるの素因を作つたことは素晴しい働であつたといへよう。しかしこの隱居重豪の偉さは、その後なほその藩政や人事の上に振ひ、毫も屈撓の色を見せなかつたのは、彼の持つてゐた潜勢力が如何に大きなものであつたかを想像しうるに足るであらう。

重豪の隱居後、齊宣が藩主に直つた。時に造士館の教授は赤崎海門であつた。海門は山田君豹の門であり、また肥後の藪孤山にも就て、かんかんの朱子學者であり『程朱之道は孔孟之道、孔孟之道は堯舜之道』を極り文句のごとく唱へてゐたといふ人躰の儒者であつたが、この人が逝いてからその後繼に適當な人物がなかつたものか、初代の教授であつた左傳傳藏の山本秋水が再出して教授となつた。ところ

が文化四年、樺山主税、秩父太郎の二士が藩の老臣の列に加へられたといふ一事があり、この秩父太郎は多少文學のある人物で、かねて同志と近思錄などを講じてゐたが、私かに造士館の學風について不平を抱いてもゐたし、他に藩政に關する野心もあつて、一日學館に向いて助教橋口權藏なるものに近思錄を講ぜしめ、その講義振りが切實を缺くものであるとてこれを言責し、これ偏へに教授の不行届によるものであると面罵したから、教授秋水はこれを憤慨して直ちに職を辭して籠居し、ここにまた新たな紛騒を捲き起してしまつた。かくして秋水は間もなく死んだが、世間では専らこれを憤死であるといふ風評した。ここにおいて樺山と秩父の二人はいよいよ威力を振ひ、藩政の改革に乗り出すまでになつたのであるが、重豪大いにこれを憤ほり、私かに旨を藩主齊宣に下して、この二人の職を褫奪した上切腹を命じ、その黨八十餘人を捕へてみな黜罰に處してしまつた。時人これを「近思錄崩れ」と稱して、重豪の餘威の強大であるのに舌を揮うたといふことである。

藩の財用と造士館

鹿兒島は七十七萬石の大大藩であるが、しかも早くから財用の窮乏に苦しんでゐた。そこへ更に窮苦の重石が壓し重つて神身兩面から一藩の精血を飽まで絞りあげてしまつたのは、寶曆における濃美地方の治水工事に關する悲劇である。これは木曾、長良、揖斐三大川の治水事業であつて、薩藩に課せられ

た幕命の難工事であつたのである。この工事のために鹿兒島藩の被つた損失といふものは實に莫大なるので、資財と人材とにおいて想像以上のものであり、藩は後年に及ぶまで、久しい間殆んど癒すことのできない創痍を受けたのであつた。藩の財政状態は、ある記録によると、すでにこの當時において早くも六十七萬兩の借財があつたといふ。そこへもつてきてこの難工事の幕命である。この工事は最初、寶曆四年二月に着工したのであるが、豫想外の難工事であり、約一千名の家士を動員し、數千名の工夫を使役してやつと翌五年の五月に竣工した。この一年有餘の間における費用は、遙かに豫算を超過して、残る借財が五十萬兩と註せられた。だか、被害はそれのみにとどまらず、難工事中における種種の事情から、その責任を引いて自殺し果てたもの工事奉行平田靱負以下家士五十名にのぼつたといはれる。

この事件は、永い間藩の存在に祟り通して、後年にいたるまでいろいろの禍ひを引出してゐる。右の工事による借財五十萬兩に、在來の六十七萬兩を合して都合百十七萬兩——さて、藩はこの莫大もない借財を、今後如何にして返済するか、これが死生岐るところの大問題である。時にこの事に關してひよつこり生れた案が、すなはち二十年賦返還といふことであつた。案はともかくこれに纏まつたが、その勘定でゆくと、全部返還皆済になるまでには、利子その他を計上して實に二百七十萬兩といふ巨額となるのであつた。しかしとにかく、それだけの額が後來二十年間に割當てられて、鹿兒島藩の財用が他方に向つて容赦なく流れ出てゆくことだけは確かであることが分つた時には、藩主も藩臣たちも、身の

毛を竦立てて眼を瞑つてしまつた。

ところが實際は、その後幾年経つても藩の借財は減ることなしに、却つて追々と不祥の山の嵩だけが高くなつてゆき、つひに五百萬兩といふ大借財の巨山を築きあげてしまひ、それが天保度になると、もはや二進も三進もゆかない羽目に陥り、このままでは七十七萬石の乾物が出来あがらうといふ境地にまで辿り着いた。時にまた、ひよつこり生れ出たのが調所笑左衛門の調所改革案である。この案は一時の急場をうまく突破しえたといふ點では、極めて大なる効果を奏したが、何分その手段が險道によつたものであつたから、後日惡性の副作用が発生して、これがためまた相當の憂をのこし、一種のお家騒動を醸し出すに至つたものである。そこでその調所案といふのは何うかといふと、右の五百萬兩の借財を、驚く勿れ二百五十年賦として返済するといふにあるのだつた。二百五十年は夢のごとき立案だが、この調所笑左衛門なるものは、身分は寧ろ軽いものであつたけれども、頗る材幹奇智ある巧人であつた。彼は當時非常にうまい手段でもつて債權者たちからその證文を取上げたのである。そしてその證文を火中に投じて、何んのことはないぼやぼやとみな燃して灰にしてしまつた。この事が分ると債權者は沸いた。いづれも憤慨して嚴重に藩に掛合つたが、それは調所のやつた仕事であつて藩では何も知らないといふハネつけてしまふ。無論調所は最初から考へがあつてやつた仕事であるから、何のかのと云ひ抜けて取合はない。かうなると債權者は止むを得ないから、連名の訴狀を認めて幕府當局へ上訴に及んだが、どつこ

い調所はそこに抜目のある人物ではなかつた。これも或る記録にのこつてゐる事であるが、彼は最初からこの事あるを豫想して、すでに早くもその方角へ手を廻し、かくあるべき、禍を未然に防ぐの手段に出てゐた——それはつまり、十萬兩といふ大金をその方面の急所急所へ間配つてゐて、疾くに堅固な防禦線を張つてゐたことである。かくて要するに債權者たちの上訴代表者連は、手を束ねてあつてなく江戸を引あげて歸つていつた。

藩校造士館は、要するにかういふ藩の窮乏中に生れ出たものであり、しかも重豪以後歴代の藩主たちは、父祖以來の財用不如意の中で、よくこれを保持經營することに骨を折つてゐる。藩校創立當時の組織その他について見ると、まづ學校最高の地位に學校奉行があり、學問補導の最高地位には教授一人があつたが、山本秋水がこの兩役を兼務した。次に學頭があつて長崎鐵之丞をもつてこれに充てたが、鐵之丞は後現職を免じて助教に直つた。助教十五人、訓導、都講各十五人、句讀頭取一人、句讀師十五人、他に補助役十五人——これだけの教師があつて生徒に授けたのであるが、今假りに藩校設立當時から明治初年に及ぶ教授の姓名を記して見ると次の通りである。

山本秋水 赤崎海門 橋口權藏 黒田嘉右衛門 松元仙藏 市來源右衛門 山田十助 山之内作次
郎 得能彦左衛門 平川喜兵衛(學頭)

すなはち明治に入りて、造士館教授の名目が取消され、新たに「學頭」といふ稱呼に改められたことが分るのである。

最初造士館への入學は、八歳より二十一二歳までと定められ『御趣旨の主意、不_レ取失_レ様、屹度入學致させ、學業を勵み可申候段、被_レ仰出_レ候事——』といふ布達の文面で家中藩士に告諭を發せられたのであり、同時に外城居住の士分の子弟、陪臣、農商にも及ぼし、これは末席または別室において聽講せしめることとした。またその當時館内に次の貼出しを掲げて、學生、聽講生の行儀について告諭するところがあつた。

言語容貞の儀については、兼て仰渡さるる趣も有之事に候。入學之子供は格別仰付らるる儀にて、脇々の子供の手本にも相成事に候間、言語容貞の儀隨分心掛、律義に致し、粗暴之爲體無之、入學之詮一涯相見え候様、教立べく候。粗暴なる體少々にても有之事候はば、差置かず何ケ度も申聞べく候。さして用事無しに、定期候座席を立ち、又は無用の咄等致候儀、堅く制禁致すべく候。

當時入學登校した生徒の實數は、はたしてどの位あつたものか信用するに足る記録に乏しい。ある筆記には八百とあり、あるものには四百とある。どちらを取上げてよいか適確には云へないが、島津家は列侯中において一とう多くの家士を養つてゐた家柄といふから、登校生も案外多くの數に上つてゐたであらうと想像される。今、藩中家士の數について、島津家の記録によりてこれを見ると、

- 一、外城を受領する大身分の士二十七家。
- 一、寄合、諸士を支配の家六十三家。
- 一、小番、新番、小姓組、與力、其他戸數六千有餘。
- 一、次は卒——

とありて、この卒の數が示されていない。とにかく島津家は鎌倉幕府以來の舊い名家であり、徳川幕政に入つてからも七十七萬石といふ大身の大名であり、殊にまた譜代新參に拘らず、一旦藩國の地に入れたものは、事情の如何によらず他國に出づることを嚴重に差止めてある舊法でもあつたし、自然家士の數が多くなり、一國の士風が永くその中に瀰蒸せられてゐた藩習であつたに徴しても、家臣家隸の多かつた點では、列藩中に一頭地を抽いてゐたであらうことは疑ひなく、従つて藩校への登校者もその數が多かつたであらうことは想像できると思ふ。

しかし、餘所者も入れず、國者も出さぬといふ、久しい間のこの風習は、重豪の次代の次代の藩主齊彬にいたりて非常に緩和され、改訂された。それと同時に重豪にあつた學派の他排觀念を改めて、折衷でも古義でも別に厭ふところなく取入れてその長所を收受した。その態度と同様な寛大さでもつて内守他排の國禁を緩和したのである。だから、薩州に關する正確な歴史といふものは、元隨分不明な點があり、誰でもそれを精密に窺ふことが許されなかつたと云はれてゐたのである。それが多少でも明確にな

りかけたのは齊彬以來のことに屬するといふ。これは聊か偏固な説であるかも知れぬが、曾て頼山陽が九州遊旅の途、入薩した際に島津家の歴史を知らうとし、その検索に着手しかけたので、忽ち藩人に狙はれたといふ話説が今に傳はつてゐるからである。

重豪の時代においては、造士館も通學生が多かつたし、補導者たちもよく君命を體して勤勉その任に當つたやうであり、君主親から不意打に學館に出席して、生徒をしてその面前において講書問答せしむる等のことがあり、専心獎學の道を講じたので學風が日を逐つて盛んになつてゆき、その中から所謂優秀生といふものもほつほつ生れ出たので、すなはちかねて校規の定むるところに従ひ、これを拔擢して他國に遊學せしめることもなつた。しかしこの儀だけは當時つひに沙汰止みとなつた模様で、その後齊彬にいたりて初めて遊學生といふものを藩國の外に送り出したといふ記録がある。是より先、重豪時代の秀才が、つひにその國境を踰ゆる能はなかつた理由は、やはり舊來の國禁といふものに禍ひせられた結果に外ならぬものであるが、齊彬時代にいたりてそれが許されたのは、すなはち齊彬その人の開放的な觀念の顯はれの一つであることを物語つてゐる譯である。

造士館の構造は、略ぼ江戸の昌平學の規模に倣つたものと云はれるが、その典型についての記事といふものがある。(原漢文)

今茲に安永二年癸巳の歲、有司に命じて造士館演武館を創造す。初城南に地あり數百步、黃楡林を

成し、榛莽荒穢なり。ここに至りて悉くその地を除き、二月より始めて秋八月に至りて落成す。文宣王及顔曾思孟を廟に祀る。廟は南門に向ふ。尤も外に在るを仰高門と曰ふ。仰高二字を扁す。清朝有爵の人之を書す。而して講堂を設け、門右學規數十條を掲ぐ。學徒をして日に來りて講書刮劔せしむ。乃ち副史知事山本傳藏正誼をもつて之に教授す。また座の間を置く。その餘親祭の時、執役の局、隨處盡く備はる。門に入りて左張番所を置き、釋菜の日、物頭ここにありて不法を戒しむ。又文庫あり。經史文集數百卷及び聖蹟圖を藏せり。門に入りて直ちに數歩を進めば、泮水あり橋を架す。又數歩にして門あり。入徳門と曰ふ。入徳二字を扁す。中山王尙穆これを書す。この門は實に廟の周圍なり。その中杏壇ありて門を建つ。門扉に杏壇の二字を書せり。大學頭信言これを書す。杏壇門を入り、少しく上りて行くこと數歩、乃ち廟内なり。廟は宣成殿と曰ふ。又た扁額を掲ぐ。伊賀國主藤堂和泉守高教これを書す。廟内階上に先聖及び四配の肖像十哲の木主を置き、又た周程張朱邵子の像を書き、諸階の左右に挂く。又た廟右に御供所あり。而して廟北は一圍をなし、演武館を設く。弓馬槍劍各おのその局あり。教師二十二家、又た犬追物の場をその最北隅に作る——。

この記文だけでは館の詳細は無論解らぬが、まづ荒ましめ光景だけは默想出来るであらう。

造士館創立直後の武道稽古所の模様については、今に傳はる記録が極めて乏しいので、果して何ういふ状態であつたかは詳しくは分つてゐないが、少くとも次のごとき書き留めがあつて、武藝に關する限

り、大ていの種類のものを集めてゐたことだけは知り得るものである。

- 比志島要人(神當流馬術) 郷原金太夫(稻留流鐵砲) 川上十郎左衛門(御家傳犬追物)
- 東郷藤兵衛(示現流劍術) 東郷長左衛門(日置流射術) 梅田九左衛門(本心鏡智流槍術)
- 高田猛太夫(大藏流射術) 平田平右衛門(日置流射術) 左松安左衛門(甲州流軍學)
- 白尾登五右衛門(大島流槍術) 種子島次郎右衛門(稻留流鐵砲) 木上清左衛門(小笠原流弓術)
- 園田與藤次(甲州別傳流兵學) 和田乘助(稻留流鐵砲) 伊集院半五郎(日置流射術)
- 有川彦左衛門(水野流居合) 有川 恰(水野流居合) 大山角太郎(太子流劍術)
- 鈴木門十郎(直心影流劍術) 加藤權藏(天真流劍術) 海老原筑兵衛(關口流柔術)
- 田中猪右衛門(甲州流兵學) 町田佐次右衛門(大坪流馬術) 日高休兵衛(神人流薙刀)
- 川崎大右衛門(赤井流大砲) 黒木仁右衛門(オラン陀流火術) 小山田宇藏(馬場流火術)

この他居合術に大脇主右衛門、野崎次郎左衛門、東次郎左衛門、木藤太郎左衛門あり、劍術には田中喜助、和田六左衛門、小野郷左衛門らがゐた。

當時この武藝家の中に、かなり多くの士分以下の輕輩、足輕歩卒などの身分の者どもが擢用されてゐた。東郷家の示現流とか、比志島の神當流とかは、薩州に縁故の深いもので、これは藩主や身分ある藩士がよく修行した劍道馬術であるらしいから、この教師は相當格式のある士人であらうけれども、その他の中には随分取立の輕輩がゐたやうである。當時藩の當局が何うしてさういふ輕輩を造士館の稽古所に擢用したかについては、その學校の建つ前に、次のやうな足輕の武勇傳事實物語があつたので、輕輩

といへども特技あるものは推舉して御用を仰せつけるに妨げあるまいと一決し、すなはち士分以下の切米取や、又ものゝと呼ばれる陪臣のやからを盛んに採用したのもらしく思はれるし、さういふ輩もまた時にこれをその身の譽れと心得て、喜んで登用に應じたことであらうと考へる。

さて、足輕の武勇談とは以下のごとき事實であつた。すなはちその頃、鹿兒島藩から江戸に向けて、多額の公金を送る用向が出来たので、藩では足輕内田忠左衛門^{三十}海江田次郎兵衛^{二十}の兩人にその公金を護衛させ、馬に乗せて國許を出發せしめたのである。ところがこの事を嗅ぎ知つた盜賊があつて、五人しめし合せ途中後になり先になりして隙を狙つて跟けてきたが、足輕兩人が筑前鞍手郡桑野村の桑良津堤に差かかつた時、折からの暗夜を幸ひに、五人の盜賊が一度に襲ひかかりて馬上の公金を強奪しようとした。かくと見た忠左衛門は、早くも次郎兵衛にその馬を托して他に逃げ延びさせ、その身一人をもつて五人の盜賊に渡り合ひ、即座に三人を斬り捨て一人に深手を負せたので、残る一人は這這の躰で命辛らから逃失せてしまつた。で、公金は幸ひに無事なることを得たが、先に馬と公金を護りて逃げ延びた次郎兵衛は、事突差の場合であり、一旦は逃げ延びたものの、かやうの場合を外して身の安全を得たとありては、面目次第もないことであると云つて、腹を切らうとするのを忠左衛門が押し止め、是同じく役目のためであり、留まるもまた同然である。故に現場を避くるも恥とは申し難いと云つて、後日藩から褒美を受けた時でも、次郎兵衛と同格の御褒美でないとお受け致しかねると申立てて、兩人同様

の手柄であるといふ趣でこれを受けたが、後年この忠左衛門は二百石の士分に取立てられた——この武勇美談が、永くその頃の藩人間に云ひ傳へられたが、こんな事實があつたので、輕輩、足輕のやからといへども、武道の心がけ厚く、技に優れてゐるものは拔擢採用して差支へないといふ趣旨のもとに、彼らの中の武藝家が、俄かに藩學の稽古所入りをした次第であつた。

剛健を誇る薩摩士風

薩州には、昔から新納忠元の作であると傳へられてゐる。一つとや節」と稱するものがあり、その歌唱は實に次のごときものである。

一つとや、肥後の加藤がくるならば、焰硝肴に團子會釋、それでも懲ずにくるならば、首に刀の引出もの。

すなはち頼山陽の詩として有名な『衣到軒』の兵兒歌は、全くこの「一つとや」の歌謠から由來したものであることは、一讀して直ちに肯づけるが、薩摩は古來國の近境に油斷のならぬ大敵を控へてゐた。東隣に伊東、秋月、北に加藤、龍造寺である。いつこれらの梟雄が鉾を提さげて飛こんでくるか知れないので、薩州では昔から國の邊境を特に嚴しくさし固めて、餘所者を一切立入らしめないし、こちらからも容易に出てゆかない。こんな風で國中一團となつて結束を専らとし、いつ敵がやつて來ようとも直

ちにこれを撃滅すべしといふ意氣で、用意おさおさ怠らなかつた。たとへば薩州領と肥後の國境には峻しい峠があつて、これを俗に「越所」と呼び、そこを薩摩の青年どもが堅めて嚴戒してゐる例であつたが、これを「越所持」といふ。この越所の嶮山幽谷で、時に關獵といふことが行はれた。この時には青年どもが千人から千五百人も集つて山獵りをするが、當日は藩主もこれに臨んで一同の勇氣を鼓舞する。この山獵は随分猛烈に行はれるもので、時には少なからぬ怪我人を出すこともあつたが、中には銃丸に中つて死ぬものさへあつた。そこで藩公はこれを憂へて關獵には一切鐵砲を用ふべからずと嚴命し、以後、もし銃を用ゐて人命に及ぼすやうな場合は犯則者を死罪に行ふべしといふことにした。然るに兵兒組の壯丁らはこれに服せずして鐵砲を射つことを止めない。ここにおいて藩公は大いに立腹して、有司をして嚴重にその不法を糺明させたが、兵兒組は下のごとく答へた。吾らの兵兒組は、まづ第一に死を恐れまい——これが組の精神である。この精神のないところに組は成立たない。今、君公の命といへども、これに服して關獵に鐵砲を射たぬとすれば、憚りながら我ら死を恐るるに似てゐる。これが兵兒組の忍ぶ能はぬところである。よつて今後といへども射つことを止めない、といふのであつた。兵兒組といふものの頑張りは實にこんなものであつた。しかし藩ではその兵兒組の横車をそのまま通す譯にゆかぬから、いろいろ取宥めて辛くも鐵砲沙汰は中止させるやうにしたが、すると今どは兵兒組連は別の新案で死ぬ工風を考へ出した。實に有司に對する強もての面當てである。その一つは「運だめし」であ

つて、まづ、天井から一條の繩をおろして、これに鐵砲を水平に吊る。疊の面を距つること二三尺ばかり、ぎりぎりと綱をかけて手を放す。鐵砲には實弾がこめてあり、火繩には火がついてゐる。綱が戻るに従ひ、鐵砲はこれにつれてぐるぐると宙で廻轉する。火繩の火がそのうち自づから火薬に點火されるやうになつてゐる。兵兒組の面々は、かねてこの鐵砲を中心にして、疊の上にぐるりと圓座をつくつて坐つてゐる。鐵砲はぐるぐる廻轉しながら、その銃口を面面の顔なり胸板なりに向けては、急しく次から次へと廻つてゆく。と、しばらくして轟然たる大音響とともに、彈丸が銃口から飛出す。同時に濛濛たる焰硝の煙の下に、圓座の中の一人がばつたり燈れる。これは運が悪いのであるから諦めるより外はないが、彈丸が幸ひ人に當らずして、人と人との間から後ろの方へ飛んでゆくこともある。いづれにしても無法無益な行爲であり、人命に及んだ場合は猶更ら捨おき難い悪風のごとくであるが、兵兒組は往々そんなことで犠牲になつて斃れても決して悔まない。この風は後後兵兒組のみではなく、薩州の暴兒一たいの習はしに移り、間間さうした蠻行があつたといふことである。尤もこれは藩でも嚴しく取締つてゐたには相違ないが、しかし鹿兒島の兵兒組精神は、武を護り膽を練るといふ道のためには、一面また非常に役立つ様子であるから、一概にこれを挫いてしまふことも如何であらうかといふ有司當局の考へであつたであらう。さればこの兵兒組は一面極めて野蠻頑陋であつたが、別面また藩の士風を支持してゐた功も少くなかつたことは十分想像できる。かういふ次第で兵兒組といふものは、士風の荒つば

い鹿兒島の藩地でも、更に一段と特異な色彩を帯びてゐた社會的存在でもあつたから、組それ自身の團結といふものは頗る鞏固で、鐵壁のごとき精神的結合が保たれてゐた。すなはち特異な社會的存在に對しては、また特異な社會的對抗、または干犯が往往にして行はれることのあるのが當然だから、組以外のそれらの事を防いで、よく自己の信念と地歩とを固守するために、彼らは渾身の魂を傾注して敵——相手、すなはち外からくる藩當局や藩の故老、一般の人人の切崩しや容喙運動、内から湧き上る精神的又は肉體的な緩怠や油斷、常にそれらを防禦克服すべく剛み合ふために、異常な心力と體力を支拂つてゐたのである。これがために彼らはまづもつて組の團結を最も鞏固にしなければならぬ必要があり、それにはお互ひ身命を賭して規約を嚴守したのであつた。故に一旦この兵兒組に加入したものは、死を掛けた血盟によりて團結を誓はなければならない。若し他日その行動の一片にでも、組の團結を弱めるやうな振舞のあつた場合は、組の同士の面前において腹を切つて申譯を立てなければならぬ。腹を切らずば同士に斬られなければならぬ——現にさうした事實は稀にはあつたやうであるが、この盟約を破るといふことも、必ずしも大した事のみではなく、ちよつとした心の緩みや油斷から生じた些事であらうとも、それがもし組の掟の一端に觸れてゐたとしたら、もうそれで當人の身命問題になるのである。だから組の者お互ひは、如何なる場合といへども、如何に些少なことも、組の掟に對しては兎の毛で突いたほども違反出來ない。故にこの點は絶対に極度に堅守されたことはいふまでもなからう。さうした

厳しさであつたから、兵兒組といふものは、いつ如何なる際に自他血を見るやうな場合を現出するかも知れぬから、常に縋帶の用意として、白木綿の帶を締め、白木綿の手拭を腰に挟んでゐたといふ。ヘコ帶の俗稱のある所以である。

組の掟にはいろいろあるが、例としてその一つを挙げると、たとへ途上たりとも、婦女子には一切顔を振向けるやうな行動をしてはならない。無論言葉も交さない。上長からの命令とあらば、理非曲直に關せず、これを斷行するのに毫も身命を惜まない——といふたぐひである。故にかういふ士風に研磨された薩州の男兒といふものは、たとへ兵兒組の一員たらずとも、いろいろの時と場合において、彼らは特殊な精神的行動を示現した。たとへば男兒は決して横疊の上には寝ない。足で踏むところに頭を着けない。衣服、洗濯物などの乾してある下は潜らない。横裂きのついた衣裳は身に着けない——かういふたぐひのものであつた。

このやうな士風は、重豪時代まではよく堅持されたが、すでに次代齊宣のころにはそれが大分崩れかけてきた觀がある。尤もこの士風の傾きかけは、必ずしも齊宣時代に直接的に急發したものであるとは斷言できないであらう。これは重豪その人の時代において、すでにその兆しを生むべき原因が植ゑつけられてゐたと思はれる理由が十分にある。しかしとにかく、鹿兒島士風の崩れ目は齊宣時代にいたりて追追と認められてきたもののごとくであり、従つて造士館などもひどく寂れ果ててしまつた。造士館も

創立當時から明治初年の間において、一再ならず盛衰があり隆替はあつたが、恐らく齊宣時代ほどの寂れを見たのは、前後絶えてなかつたことであらう。ところがその次代に齊彬が出て藩の學風を宣揚し、かねて士風を振作した。彼は安政元年正月の正朔に『學問の大本』と題した一篇の訓示を發して、これを藩校造士館の正廳に掲げ、學問に對する自分の所見を、つぶさに教員以下生徒らに告げ知らせ、同時に萎靡しかけてゐる彼らの心頭に、警醒の一砒を加へることにした。

學問の大本

學問之儀、文章訓詁の末になづみ、倫理實用之道理に昏く候ては、不學無識之者に同じく、無益の事に候。元來學問の本意は、義理を明らかにして心術を正し、己をさめ人をさめ申諭すべく候。武道之儀も同様、武術の末流に拘らず、匹夫之勇に墜ず、行儀を正し、士道の本體を失はざる様、厚く申渡すべく候云々。

また 齊彬の『學令十ヶ條』といふものの中に、次のごときものがある。

一、造士館演武館は大信公（重豪）御代厚き尊慮を以て御造立之處、其後何となく衰微致候に付、此節改めて掛り申付候條、是迄の惡弊を改め、造士の文字に相叶候様取計ふべく候。

一、儒官相勤候者は格別、其外の面々は詩文章不得手に候共、今日政事の一助に相成候様心掛修行致させ候儀肝要と存候。當時學者と唱候者、今日の世事に疎く、經濟の道をも捨置き、沙門同様

制外の様に相成り、其行正しからず——假令舊慣の經傳を誦讀し、詩文章に通達候とも、道義に暗く時務に達せず候ては、實に無用の腐儒たるの間、右様の處、上下一同厚く心得候様、申達すべく候。

齊彬のこの熱心な學風革新の企ては、着着と功を奏し、造士館の殷盛は、重豪時代に優るとも劣らぬ隆興さを示すに至つた。しかし齊彬が一とう氣づかつたのは、江戸その他への遊學生一件である。この時分の藩の規定によると、遊學生の種類は三通りばかりに區別せられてあつて、一はその遊學費の全部を藩の費用で賄ふもの、次は同じく半額を給するもの、第三は費用の全部を遊學生自身で自給自辨するものであつた。然るにこの幾人かの遊學生の中には、いい加減の喰せ物も混じつてゐて、如何はしい企らみを行ひ、江戸や京地において遊惰に日を送つてゐたといふ例が往往あつたので、齊彬はつひに次のやうな手書を老臣に交付し、その弊をのぞくべく、學校係の有司に諭告するところがあつた。

——元々稽古修行の爲に他國へ出候事故、學問の巧拙より、學問未熟に候とも、彌眞實に修行政候か、又は當座困窮凌ぎの爲、願出候かと申處の人選第一と存候間、心得違無之様吟味可致旨をも——云々。

齊彬は學事には随分精根を傾けて、この類の訓示や諭達を幾たびとなく出して當事者を鞭撻し、細密な點までも注意して弊習の一洗に努力したものであり、その絶倫な精力は尋常のものではなかつたやう

である。

——苟も人の師たる者、人を見るの明無之ては叶ぬ事に候。又世を見るの明も、無之ては叶ぬ事に候。今儒の世情時務に暗く候て、人を見るの明にも暗く、其上己を見るの明にさへ暗く候は無_三甲斐事に候。小學卑近の書は、浮々と讀過候得ば、何事之仔細無之様にも被思候得共、能々心を着見申候はば、其書之義を通して、世情時務判断出來可申事に候。能々着眼肝要と存候——

これは齊彬がその當時の學館の教員に與へた書翰の文面である。これを以て見ても、彼が如何に學館の教導職にあるものに對して深い關心を抱いて居り、彼らがもう少し活眼をよく見開いて、世情時務を察知してくれたならば、子弟に對してもつといひ教育が施せるであらうにと考へてゐたことが窺はれる。彼は一たい、世子時代における壯年の頃から、すでに精氣に富んだ老成心ともいふべき、極めて良質な分別を持つてゐた人であり、夙にその英明の名が幕府の要路や、諸藩の名君古老の間に喧傳されてゐた。しかもその世子時代の期間が餘りにも長かつたので、彼に對して景慕措かざる藩臣らが、一日も早く彼を藩主として仰ぎたい念願から、一種のお家騒動をさへ引起した事實は餘りにも有名である。彼は是程の傑出人であつたからに、自然よく藩校の學風を宣揚し、また一藩の士風をも鼓舞したことはいふを俟たなかつた。齊彬の爲人が、歴代の諸君公に抽んでゐたことは、當時朝野達識の人たちの間に言ひ囃されてゐたことで、時勢を遠觀して新知識の探求に心を潜めたのみならず、これを事實實行の上に

移して新文化の産物たる軍器彈藥の製造、艦船の建造、新練兵術の研精、その他有ゆる機器の製作にまで神身を打こんでゐた。これは彼がなほ世子時代のことに屬するが、毎日、近臣を促しては邸内の大池に飛こんでばたいた泳ぎ廻つてゐた。大藩の世子ともあらう身で、これは少少行過ぎた輕卒な振舞ひであるといふので、ある時某重臣から諫言を入れて、かやうなことが世上の噂にのぼると、和子様は申すまでもない、吾吾不明の譏りを免れないから、早速お取止め下さいと申出た。すると齊彬これに答へて『不明といふが、其許らこそ如何にも昨今の時勢に不明である。當時の世情は一たい何うなつてゐるか、其許らによく心眼を開いて達觀してもらひたい。殊に現在、士風は古來の強さと質實さを失ひかけてゐる。一たい其許らの中に、よく健馬を乗り馴し、よく水を恐れぬ者が幾人ゐる。自分は大藩の世子であるといふ輕からざる身分であるからこそ、其許らに先だつて池で泳いでゐる。自分が池の中で水練の稽古をしてゐるといふことだけでも、家臣末末のもの、耳に入らば、彼らは水練に油斷せず、自分につづいて稽古を勵むやうになるであらう』と云つたので、件の重臣はお辭誼をして黙つて引退つてしまつた。世人は彼のかういふ業行を聞傳へて、後日、水戸の義公(徳川光圀)や烈公(徳川齊昭)に對比して賞讃の辭を惜まなかつた。義公も烈公も熱心に馬を馴らし水を練つたことは、ともに世に聞えた事實である。

尊皇思想の昂揚

齊彬の前前代重豪は、篤く學藝を奉じた君公であり、また藩校造士館を創設した人であることは前述したところであるが、更にまた特にこの學藝に傾倒し過ぎたがために、自失引退の因をもつた次第であるけれども、しかしながら彼はその一面に豪毅豁達な氣象を藏してゐて、生涯よく家風を墮さず、一藩の士氣を支へたことは偉とするに足るべきである。重豪の女幸子は、出羽新庄藩六萬八千石の戸澤能登守正胤に嫁し、世子正令を生んだ。正令好學の品性は、實にその祖母瑞子彦根藩主井伊直中の女、村田春海の門に和歌和文學を修む。および重豪の氣質を引いた母幸子の心脈を享けついでものである。正令には多くの著述があるが、その中に『大日本號之說』といふ一篇がある。これは本居宣長の『國號考』の附録として、その書の趣意の補足の意味で書かれたもので、その巻頭に一首自作の和歌を掲げてある。

日の出るところとのりしむかしより天てらします國の大御名

この歌意によつても讀みとれるがごとく、彼は随分熾烈な勤王心に燃えてゐた大名であり、この他にも『皇朝魂辨』のごとき『尊内卑外論辨』のごとき、その外『ことばのひとや』とか『御そき』等の著述があり、皇朝に對する彼の眞摯敬虔な氣魄を窺ふに足るべきものが多い。殊に明治維新前後皇政復古の黎明期に際し、奥羽の列藩が擧つて官軍に抗した時、彼の嗣子であつた中務大輔正實は、敢然起つて秋田藩と連衡合體し、皇朝に對し奉りて忠勤を抽んでた一事は、正しく父正令が志操の感化を受けて、立派にその眞精神を繼承したものと見てよいであらう。

さて、その正令の『大日本號之說』であるが、これは奇しくも後の島津齊彬の「日章旗の創作」と、はなはだ至妙な好對の事例を作り出したものとして擧げることができる。正令は前に述べた重豪の女幸子を母としてゐるのであるから、その重豪の孫である齊彬とはすなはち從兄弟にあたる譯である。その從兄弟同志が皇室尊崇の志を共にして、しかも一人は皇國萬代の表象として仰がる日章旗を創作し、一人は華胄稀に見る志操として今に傳へらるる文献を遺したのは、一つの出來事としてはいささか數奇の感もないではないが、實は顧みて事偶然でないことを思はせる理由が十分に存在する。

正令の尊皇思想を培かつたものは、和學の道の研鑽、ことに國體に關する諸說に心を潜めて、大義の本末を明らかにせんと努力したところから獲來りたるものであり、苟しくもこの大義の本末に關して疑はしい說に對しては、相手が如何なる大家學匠であらうとも、毫も憚るところなく、これを向ふに廻して猛然として反撃し、飽までその誤見を打碎かでは措かないといふ氣魄を示した。すなはち彼の著作として皇朝の國體を明徴したる書物や評論は實に十數種にのぼる。その中において右の異論駁撃、疑義啓蒙に關する對手方は、香川景樹、村田春海、高田與清、野野口隆正らをはじめとし、沼田順義、市川匡らに及んで居り、一に金甌無缺の皇國の本體を辯護するに、殆んど剩すところなしといふ熱烈さを現はしてゐたのであつた。

齊彬の「日章旗の創作」については、今さら事新らしく説くまでもない。この由來については世人す

でに周知のことに屬するが故に、ここには改めて繰り返すの煩を避けるが、この一事も要は彼の皇室尊重、皇朝崇敬思想の反映として生れ出でた現象に外ならぬ。しかもこの尊貴な思想が如何なる機縁によりて如何なる邊から啓發され來りたるかについて稽ふるに、その一つは儒學の影響もまた與りて力あるものである。彼の生涯は融通無礙といつていい寛濶さ放膽さで、その裡に一種捉へ難い閃光の迸ばしりがある。それだけに儒學といふものに對する彼の考方なり見方なりは、世の儒者文人らとは自づから異つたものを持つてゐたと見なければならぬ。されば彼の儒學に對する態度は、常に批判的だつたが、決して懷疑的ではなかつた。世の儒學者といふものは、お互ひに他派の學問に對しては、この頃でもなほ異學呼ばりの糟粕を舐つてゐたやうだが、齊彬はいづれに對しても斷然毛嫌ひをしなかつた。彼は「何學風にても立入て研究候へば、朱子學の優れたる處も、分明可致事に候——」と云つて、必ずしも學館員や生員などの異學研究を禁止してはゐない。この襟度の寛濶さは、すなはち彼の識見の迢邁なところである。造士館の教官得能某の『漏蓋筆記』といふ手筆本に載するところによると、齊彬の言として『孝は唐土にては百行之基とす。本朝にては忠を以て百行之基となす也。孝も忠も、百行と共に必ず基く處あり。基く處とは根元之事也。根元に由ぬ忠孝は意義貫かぬ也。根元とは高大なる處に在り。所謂大所也』これは得能某の聞書であるが、齊彬はこの態度で儒教といふものを見、この識見で斷じてゐたのは偉いと思はれる。大所から見た根元に基く忠道——これがすなはち尊皇の忠道精神でなくて何

であらう。彼は儒教といふものに斷じて驅使されず、その教義を撰擇綜合して自家行業の利器として用ゐたところに、彼の非凡さの半面を見ることが出来る。

されば藩摩の士風といふものは、當時よくこれに陶冶されてその本色を發揚し來り、その精華がよく維新前後において煥發したことは、正に當然の結果であつたといふべきである。

齊彬歿後、忠義襲いで二十九代の藩主となる。しかしなほ幼少であつたので、久光これを補佐し、文久元年新たに左のやうな學令を發して藩士を誡めた。

學術の次第は、大信様以來、近頃順聖様（齊彬）にも、御深慮を以て仰渡し置かれ候へば、聊か取違ひは無之筈に候へども、第一天理人倫を明らかにし、孝悌忠信の徳を行ひ、正道を守り候は學者の急務に候處、古來より太平久しき時は、自づから詞藻に耽り、文武の本體を汚し、安佚に日を過し、終に人道を失ひ、或ひは高遠に志し、放肆に流れ、國憲を犯し候類少なからず候間、各平日士たるの業を勤め、武道を練磨し、謙讓を以て己れを持し、國家有用の士と相成候様講習有之度候事、云々。

この頃になつては、幕運いよいよ押つまりの瀬戸際に逼迫し、自然各藩においてもいろいろの問題が起り、事情が變轉し、世は今日をもつて明日を計るべからざる有様になつてゐた。されば藩校造士館の

ごときもその影響を受けて、動搖常なき有様となつたが、要するにこの前後において新たに洋學を取入れ、西洋砲術をも授けることにし、維新後にいたりても相當員數の生徒を維持教導をつづけた。かくて明治三年造士館の名を廢し、本學校と呼び、九年本學校の名を廢して英語學校、師範學校、準中學校に三分し、十年にいたりて英語學校を廢し他の二校は繼續したが、十七年に鹿兒島縣立中學造士館、二十年更に鹿兒島高等中學造士館、二十九年に尋常中學造士館を置き、三十四年高等學校の擴張に際し、舊藩からこれを政府に寄附して官立に改まり、第七高等學校となつたものである。

熊 本 藩

五十四萬石の大藩、その熊本城は加藤清正の築くところであり、明治十年西
南戦争に、谷干城ここに據りて賊徒の軍を支へた名城として著聞してゐる。
これより先、寛永中細川忠利豊後の中津より移りてここに封ぜらる。忠利は
すなはち忠興の男、明治維新の際の藩主は細川韶邦で、後華族に列し侯爵を
賜はつた。護立これに次ぐ。城地は明治十年の戦役に天守閣を焼失したが、
壘壁今なほ存して當年の雄姿を偲ばしむるものがある。

三名城の一——熊本城下に培はれた肥後藩の士風

——熊本藩學時習館——

列藩中の鳳凰——藩主重賢

肥後藩七代の主細川重賢 小字六之助、通稱主馬、從四位下侍從左近衛少將兼越中守、天明五年歿、年六十八 は、列侯中の鳳凰をもつて稱せられた賢君であるといふ。その頃江戸の人人の間に『當世に過ぎたるものがふたりある、紀州に麒麟肥後に鳳凰』あるひは『桐の葉のしげれる國もあればある——』といふ歌詞が傳唱されてゐた。その紀州の麒麟はすなはち徳川治貞である。このふたりの君公はともによく經濟撫民の治績があり、ともに大いに文教に力を盡した。治貞には『與民偕樂』と刻した印章があり、重賢の江戸邸には『先憂後樂』の扁額が掲げられてあつた。重賢は極めて識力の明らかな藩君で、その上一生涯燃ゆるがごとき向學心を持ち通した人である。彼は藩校時習館を熊本に開設したが、その學校または城内の讀席で、きまつて月六回の會讀を缺さず催ほした。はじめ彼は彼の居室から程近いところにあつた二三十疊敷ばかりの部屋へ、ある朝、

目が覺めると同時に起きていつて、ばたばたと敷物を取り除かせ、大工に命じて、あとをすつかり板張りにさせた。近臣は君公のこの仕方が餘り唐突であつたので、何事であるかと膽を潰した。次で彼は家老の長岡忠英を呼んで云ふには、實は、予は今朝曉方に妙な夢を見た。それは文教の祖文宣王の御姿である。文宣王さまは儒服を被ておられた。そして手に經書やうのものを持ちながら、この部屋をとほと歩いてゐられた。これは正に予にこの室で經典を讀めとお告げに相違ないと思ふ。よつて今後この室において經史百家の書の會讀することに致す。左様心得てもらひたいと云渡した。この忠英また好學の士であつたから、早速この旨に賛意を表し、以來會讀は多くそこで續けられたのである。

重賢は常に好んで『世說新語補』を繰り返し繰り返して讀んでゐた。近侍のものが『この書は、それ程に尊貴のものに候や』と尋ねてみると、彼はこれに答へて『左様の心得で讀返してゐるのではない。よく世情に通ずるに便であるから』と云つたさうである。この書物などは別として、彼が經書を尊敬すること非常なもので、開卷、讀了の時はきつと恭しく捧拜の禮を缺かさななし、座にある時でも、他書の下に經書を置かない。それから風下の方にもこれを置くことをしなかつた。必ず几を風上の方に移してその上に經書を重ねて置かしめるやうにした。彼は犬追物に熱心であり、遊獵——鷹狩を好んでよく山野に出遊したが、ある時その鷹狩に、臣某と馬を駢べて辿つてゐるうち、その某が當日、主君の眞似をして懷ろに一冊の書籍を押こんで持つてゐた。重賢はさういふ時でも必ず本を携へてゐたのである。

ところが、某は何うかした機みか、懷ろから本を地上に落したが、それに少しも氣づかなかつたのを、重賢が早くも見つけて、あつといつて翻りと馬上から飛びおりたから、某はいふに及ばず、附添つてゐた近臣らは、何事であるかと思つて、驚いて馬を飛びおりたところ、重賢は手ばやく地上の書を拾つて、ばたばた手で塵を拂ひ『氣をつけなければいけない』と云つて、例の捧拜をしてからそれを某に手渡ししたので、某は極度に恐懼狼狽したといふ逸話がある。これは重賢が如何に書籍に對して細心を注意と深い尊敬の念を拂つてゐたかを察するに足る、一つの證しにもなることである。

藩校時習館は、寶曆四年十二月に起工して、翌五年熊本城内に建設開校されたものであるが、この學校の開設について重賢は一通りならぬ苦心を拂つたやうである。重賢は江戸で生れてそこで世子時代を過し、延寶四年に家を襲ぎ、翌寶曆元年入國と同時に藩政諸般の改革に着手した。随分これは敏捷活潑な調子で行はれたやうであつたが、當時肥後藩五十二萬石の財用も、同じく他藩の例に洩れず、逼塞不如意で手も足も出ない状態にあり、何も彼も悪條件だらけの有様であつた。重賢はその只中へ飛びこんでいつたのであるが、その直前に國元から急招したのは家老職の長岡忠英であつた。かくて彼はこの忠英から藩の内秘に亘り、有ゆる事情について詳細な説明と意見を聴取し、その上随分緻密な研究を遂げ、すつかり腹案を纏めて後、お國入りをしたところこの人の名君らしい頭の善さがあつた。かくて

彼は熊本に到着すると間もなく、彼の意見書とも見るべき警醒的訓示を一家中の面前につきつけた。

一、諸事清廉に取計可申段は先代よりの趣之事に候。然處近年間々不直之輩有之難差置に付其段申付候。此義人の選み宜しからざるは我等不肖に候哉。又は役頭々の依估量肩よりの申立に依候哉。正道を失ひたると存候。兎角私慾之筋専らに而申付置たる筋違ひ候故。末方之者迷惑候得共、末方之者は役頭を恐れ、無是非不訴出候付、第一我等爲に相成不申候。依之此以後輕輩たりとも志有之者は其人の高下に依らず、支配々々まで、存寄封印を用る差出可申候。國政之儀は我等存念計に而茂不取行候。貴賤一和をもつて治國に至候。何れも可相考事。

一、目付横目役之者共、當り障りを存ずるか、又は勤を怠るか、兎角事實を不申出、當時之心得にては、我等爲にならず。此以後屹度心を付け、何事も有體に申聞すべし。外に聞届けたる筋もあれば、追而の樣子に應じ、越度申付べし。

一、右の條々、今年初めて入國之儀に付、心得相示す。我意を立て權を争ひ、功を奪ふ尤も未練の至也。支配方に有之面々此節格別に心遣致、家中無異議押移る様に致度、何れも忘るゝ事勿れ。

藩主大名の訓示戒告といふたぐひのものは、藩君その人の名をもつて直接に發表される場合は殆んどない。大てい家老、用人、目付、物頭なり奉行なりの名によりて『——と被仰出候に付、一同屹度可相心得者也』といふやうな調子で、云出しは藩公であるけれども布達は有司の名をもつてする習はしに

なつてゐるが、重賢のこの場合は、特に直接の手書といふ嚴しい形式であつたので、藩臣どもの頭へよく徹底して、轟とこたへた。殊に大名藩主が藩臣に與へた手書としても、この位隔から隔まで行届いて瞭平と物を云つてゐるものはまづ極めて稀である。また殊にその末文に『——追而の樣子に應じ、越度屹度申付べし』と結んでゐる點など、背ろめたい役役の面々には、シカと一本の釘を打ちこんだもので、この輩にはさぞ冷汗をかかせたものであらうと察せられる。

重賢はかういふ藩弊を一洗し、殊に民用を補つて、やや藩領を豊饒に導くまでには、容易ならぬ心力を費やしてゐるが、しかしなかなか治國安民の理想實現はむつかしい。しかも彼はその途中において藩校の開設を少少無理押しながらにやり遂げようと焦慮したが、それが一時問題になつて成立しなかつたのを、家老長岡忠英、藩儒秋山玉山名儀、字子羽、號玉山、通稱儀右衛門、肥後の人、寶曆十三年歿、年六十一、ら力を盡して主説を擁護し、四方に斡旋してやつと希望を達しえた。玉山は當代の大儒でその名夙に東都に藉甚してゐたが、この時すでに富士に登り、護國の詩人服部南郭をして『富嶽出生以後の文章』と嘆稱せしめた登嶽記を作り、また熊本に藩費を興してその教授となつた。玉山時に某に告げて云ふ『僕、生涯三つの素願があつたが、すでにしてこれを果しえた。その一は富士に登攀すること、その二は熊本に藩校を設くること——』と云つたので、某問うて曰く『先生すでにその二を果す。而してその三は如何』と云ふと、玉山ただ笑つて答へなかつたといふが、その三はすなはち彼の自信滿滿たる詩集『玉山詩集』六卷が、この年江戸におい

て上木發刊されたことであつた。當時の詩壇は白石以下正徳の諸公、徂徠一派、護國諸子の後を享けて極めて熱盛の境地に入つてゐたが、玉山は現在の諸家を凌駕して、特色のある詩を作つた儒家であり、また頗る深い自信と高い矜持を持つてゐた人である。殊にその五言詩においては古今絶等をもつて任じてゐたやうである。曾て彼は某侯の宴に陪し、酒三行にして高く口を開いていふには『僕の五言詩は正に天下無双のものである。しかもこれに抗せんとするもの一二これあり。かくのごときは是れ世にいふ盲者蛇に怯ぢざる痴漢である』と。時に座に護國の高野蘭亭があつた。彼は當世において服部南郭と及び稱せられた優れた詩人だが、弱年にして失明してゐた盲者である。されば彼は玉山の聲に應じて、喝していふ『秋山生の言は、吾を冒すものだ』と——この一場の出来事は、當時儒林の逸話として著聞した。

藩校時習館の創設

藩學の創設については、これを重賢の功として當然認めてよいのであるけれども、この藩學開設の希望はすではやく先藩主たちの間にもあつたのである。しかしそれは希望だけのことであつて、實現せず空しく今に迫んだのであるが、重賢つひにこれを實行に移し、事實に現はしえた次第であつた。藩費設立の徑路と成行とは、各藩とも大ていこれに似たり寄つたりであつて、ある時代の藩主がまづこのことに思ひつき、その一代中に開設の功を成し遂げたといふ事例は、殆んどどこにもないといつてよいやうである。

藩校時習館は、最初は單に講書所、または稽古所の名をもつて稱ばれたもので、後時習館と改められたものである。その當時の記録に『——稽古所の儀、學寮は時習館、武藝所は東西兩樹也』とあり。すなはち内部には時習館の學寮があり、更に東樹西樹の武藝稽古所が設けられてあり、さらにその文武兩堂へ通ずるところの東門、南門の二門があつたのである。その講堂に掲げられた學則は當校の教授秋山玉山撰するところの十二箇條であつたが、繁を省くために、殊にこの箇條中でも主要點であると見られる第七條の一項を、學規とともにここに掲げる。

學規

維寶曆五年乙亥春、我公新興學館。扁曰時習。令國之子弟肄業於其中、令宗室一人爲國手、總教提調學政、專制黜陟、所以重國學也。且設尊經堂、置教授及訓道官、誘掖後生。典籍有藏、廩饌有給、群居稽古、相觀而善、藏修息遊。豫時孫摩絃誦於斯、揖讓於斯、又從而涵泳於斯。使其耳目不觸異物、而遷焉。所以敦人倫、育英才、而供國之用也。越二月吉辰、我公命駕臨視、躬建首善。於是乎子弟入館者、皆靡然悅服、各思成厥業、以答國恩。豈不濟々乎盛矣哉。古之教者、虞曰米廩、夏曰校廩、殷曰序、周曰庠、皆鄉學也。而學則三代共之。蓋虞商貴在郊、以期遠市紛之劇。夏周貴在國、以惇禮樂教化之原。今也中國設斯館、以從來

學之便一矣。其教則文行忠信、其書則詩書易春秋三禮——方策具存。由_レ此求_レ之乎、則庶幾亦以可_レ弗_レ畔矣。謹奉_二公命_一、敢定_二科條_一、榜_二諸楮間_一、以示_二諸生_一。若夫禮樂之化、則俟_二後之君子_一云爾。

學 則 (第七條中の一項)

諸生之業嚴立_二課程_一。孝經論語一科、易書詩一科、春秋三傳一科、二禮二載記一科、是爲_二正業_一。雖_レ主_二古義_一、不_レ廢_二新註_一。彼此參考、必歸_二正當_一而止——

これによつて見るに「古義を主とすといへども、新註を廢せず」とあるのは、藩主重賢が必ずしも學問に正學異學の區別を立てないといふ、その趣旨の大意を失はぬために、かく斷わつたものであることが察せられる。しかも更にその末句において「必ず正當に歸して止む」と強く云つたのは、玉山の立場である朱學を學問の正標と定めて、これに歸せしめずにはおかぬといふ意向を暗示したものである。重賢がこの際、玉山に恃むところ極めて多大であつたことは、玉山を「國の大工どの」と稱したといふのもよく分る。すなはち重賢が曰く『士民は河上に住むもあれば、河下に住むもある。よりて河上に住むものは河上の橋を、河下に住むものは河下の橋を渡るやう橋を架けてたもれ。とかく人たるもの、孝悌忠信の岸へ無事に、辿り着くやうに計らうてたもるが肝要である。御身こそはまことに國の大工どのぢや』重賢は如何に玉山を重んじてゐたかは、この言葉によりても察知される。

重賢は常にその居室に續く部屋部屋を通るにあたり、建物の老朽から、敷居が緩んでゐて紙襖がしば

しば倒れた。近臣某ある日重賢に役大工を呼んで修理すべき由を告げたが、重賢肯がはずしていふ『汝はいらぬことを氣にするではないか。今國中の敷居が緩んでゐる時節である。ふすまの倒るる、何程のことがあらうぞ』と。彼は人を作るがために教學の橋を架ける大工の必要に迫られてゐたが、敷居を修理する大工はなほ必要としてはゐなかつたらしい。

學校の創建當時、その目付役及學寮係を勤めたものは堀平太左衛門勝名といふ名臣であり、これより先老臣竹原勘十郎の推舉になるものであつた。堀平太左衛門のことについては、熊本の上風を證するため一二記述したことがある。後に記す。當時この藩校の

職員は、最高格のもの三人、すなはち總教に家老職長岡忠英これに任じ、目付役は堀平太左衛門これに任じ、教授に秋山玉山これに任じた。その下に助教一、訓導六、句讀師、習書師ともに四、孝經師、算術師七、その他補助員若干、事務、執役雜役若干である。この中の孝經師といふ役名目は、この前後の他藩の藩校には、かつて見當らないものであるが、これについての時習館の記述に、次のごとく記かれてある。

孝謙天皇の天平寶字元年に、天下に詔して家毎に孝經一本を藏めしむ。後漢の光武の時に學館を建て、孝經の師一人を置く。これ歷代明主の孝悌力田を勤め、三老五更を尊ぶ意なり。一孝立てば百行これに従ふ。故に習書生の時より此れを誦せしめて、朝夕これを訓へ、他日學問の本領となすべし。先入の香主とならむは、染むこと丹青の如くにして又變ずべからず。教學の基本これを第一と

す。

すなはち時習館における幼生の教導基本は、孝經一篇の趣意にあつたことを窺ふべきである。外にも幼儀師の名目もあるが、これは多く儀禮關係の行儀について修得せしめたものらしい。開校當時の生徒數はある記録によると三百七十八人、句讀生四百七十八人、習書生四百五十六人、句讀生と習書生は後五百人に達したとある。しかし明治維新後に及ぶまで、この數を持続した譯ではなく、人心の向背、時代の情勢などにつれて、校運の隆替がしばしば繰り返され、従つて校の機構にも變化があり、教師生員の増減なども一定しなかつたことはいふまでもない。

後、學校内には寄宿寮の設備があり、特に優秀な生徒は専らここに寄宿を命ぜられ、外用に煩らはされず専心學事に勉勵し得るやう藩から保護せられた。尤もかういふ生徒にして藩の助力を得ず、自宅から勝手に通學し得ることは自由であつたが、しかしそれら撰拔せられた優秀生は、大てい學校の寄宿寮入りをしたのは、ここに入れば費用は全然藩當局の持ちであるのみならず、少額ではあつたらうが、時を定めて若干の手當金さへ頂戴できる制度であつたから、これらの優待生は殆んど擧つて寄宿寮に一身を託したのは當然であつた。なほ彼等の期待するところは、藩當局が時機を見計つて、江戸その他に遊學を命ずるといふ特殊の取扱があることであつた。しかしこれらの生員で、當時實際に遊學を命ぜられたものは、記録の上には殆んど見えてゐない。あるにしても二三名には過ぎず、他は直接藩校の教師に採用されたに止まつたではないかと思はれる。

右のやうな撰擧された優秀生の中からは、後來隨分その名を世上に馳せた偉らものも出たやうだが、藩はまた優秀生以外、最初から代教員、準補導として擧用した優れた青年も多少ゐた。後の教授でありまた藩の物頭格にまで進んで藩政に參與した藪孤山名慈、字士厚、通稱茂次郎、熊本、享和二年歿、年六十八。などもその一人である。また玉山が江戸から伴つた片山兼山名世孫、字叔慈、通稱東造又冬造、號兼山、上野の人、天明二年歿、年五十三。のごときは、熊本に着くと直ぐ時習館の生員から教師に取立てられたが、これは後年歸國して再び江戸に出た。その頃の兼山はすでに一廉の儒者先生になつて居り、片山點といふ訓點を世上に流布したほどの偉らもので、その名全國に著聞したものである。

天下著名の士で、時習館に縁故ある人物はなかなか多い。秋山玉山はいふに及ばず、藪孤山、辛島鹽井名憲又知雄、字伯壽、號鹽井、熊本の人、天保十年歿、年八十八。、村井見朴名熊章、字淳民、一字見朴、復陽堂眞人、熊本の人、寶曆十年歿、年五十九。、高木紫溟姓李、名順、字子友、號紫溟、文化十年歿、年七十六。、片岡朱陵、井上梧陰、木下犀潭、池邊蘭陵、日田蒙齋、横井小楠名時存、字子操、號小楠又沼南、通稱平四郎、明治二年歿、年六十六。、元田永孚名孚、通稱庄左衛門、號東野、熊本の人、明治二十四年歿、年七十四。など、まだ幾人かあるであらう。今の徳富蘇峰翁なども、明治初年において、幼時一度はこの後身たる藩學の教廨に、その履を脱いだことがあるかも知れぬ。なほこの時習館といふ譽名は、江戸時代方々の藩においてかなり多く用ゐられた名稱であり、たとへば豊橋、笠間、大田原藩等にもあつたが、熊本の時習館はむしろその規模においても内容においても、またその著名な點に

おいても傑出してゐたことは云ふまでもなかつた。

熊本土風の根元

時習館の學問について最も特異な點であると思はれたのは、當時必ずしも朱子學墨守一途の方針でなかつたことである。むろん朱子學は正學の根本と立てられたには違ひなく、すでに長老の長岡忠英でも、教授の秋山玉山でも朱學であるが、學校の方針としては、教師は各自奉ずるところの學問によりて、それぞれ的主旨に據り生徒に授けてもよい規定であつた。これは正しく藩主重賢の主義主張の反映であつたであらう。すなはちこの學校の創立直前、後學校奉行を勤めた竹原勘十郎から伺書があり『他派の學問を混ゆることは如何あらうかと考へる。當藩にはかつて陽明學御改めと申すことがあつて、異學排除の事があり、當時すでに三十餘名の學者家臣を、國外または蟄居退身仰付けられたことがある。然るに今日その先例に倅るがごとき御仕置を遊ばさるること、尤も不可然と存する間、御再考下し置れ度——』といふのであつたが、重賢はこれに對して『伺書の義尤至極である。乍併、藩學開校の間際になりて、彼是とそれを詮義がましく致さば、紛争を生じて却つて人心を取亂す恐れがある。すべて學問の大綱は、治國濟民にある。この肝要なる考へは、朱學の主旨にのみ有之て、他派には無之といふ理はない。若し治國濟民の道を認めぬ學問ありとせば、それはすでに學問としての價値もなく、世に存續す

べき筈はない。この世に行はれてゐる學問ならば、必ずこの肝要處を基本としてあるに違ひない』と諭示した。この重賢の意志の現れは、讀書習字についての學校の規定にもよく反映して、生徒の讀本と習字手本は、學校で定めたもの以外のものでも、持參勝手たるべしとあり、その他些細のことに亘つて、他藩のそれと比較してかなり緩やかな點が多かつたやうである。彼が學問を尊敬し、文教を如何に重要視してゐたかについては、殆んど常識を逸してゐたのではないかと思はれることさへあつた。それは學校の經費はむろん藩でこれを賄つたものであるが、創設の當初勘定役から君公重賢に對し、出納簿を差出して閱覽を乞うたところ、重賢はその帖簿を手元に引取つて、さて勘定役に向つていふには、『この帖簿は不用にせよ。學校は神聖な場處である。従つて學問の修業をなし、またその教道の任に當り、その事務を執る人にいたるまで、すべてこれ廉潔の士であるべきである。苟くも聖賢の道に身をゆだねるもののおつまりに、金錢出納のことなど、要なきことである』と云つたので、勘定役は大いに膽を潰し、事の然るべからざるを申立てたが、重賢は『左様の事、古聖賢に畏れ多い』と云つてつひに許容しなかつたと云ふ。この點彼は藩祖幽齋の主義とは非常の相違があつたと云はねばならぬ。幽齋は極めて勘定に嚴重な性格で、陣中にさへ算盤を携へ、居常座右にこれを備へてゐたといはれた武將である。むろんかうしたことは、何も幽齋が卑愷な人物であつたといふ何らの證しにもならない。意味は別にあると思ふが、しかし幽齋は無計畫からくる貧乏といふことだけは非常に嫌つてゐたやうである。これも熊本の

士風を考へるに興味ある一つの例として引くが、或る士が一日幽齋を訪うて物語をした。折から幽齋の家臣が、他から到来の大鯛を口上とともに幽齋に披露して、その鯛の仕末を尋ねると『三枚に卸して、骨おちに鹽を打つておけ』と命じた。士はこれを聞いて、幽齋が大身分の主として、かかる些細のことまでマメやかに命じるとは、小心愷しよくも程こそあれと密かに彼の心事を陋としたが、程經て幽齋はその中骨を吸物に、身は造り身としてその客に饗應したから、客は大いに心に愧ぢたといふ逸話がある。また彼の和歌の門人に小野木縫殿介言郷があつた。その妻は古田織部正の妹でやはり幽齋の門人であるが、この夫婦は極めて貧しかつた。ある時の歌の會に、妻は御簾の内にありて、みなみな歌詠をきいてゐるうち、食事時分になつて、家の老女がまかり出て『如何致しませう』と尋ねたが、客に供すべき何物もない。そこで彼女は、憐れな一首の歌を詠じて皆に見せた。

月さへももる宿なれば春雨のふるまふものもなかりけるかな

幽齋その貧を憫れみて、長く彼らの家計に助力を與へた。

これは、幽齋が單に門人夫婦の貧を扶けたといふ小さな問題に過ぎないが、重賢は藩の財用窮乏を救ひ、また民人の窮苦を救うたといふことは大きな篤行である。殊に天明二年の饑饉に際しては、農民からの徴納は全然出来ない。そこで近臣から、藩士一統はこの際家祿半減御奉公の儀を献言したが、重賢は不承諾であつた。大節に臨んで身命を致すものは士である。もしその食を減せば、事に臨んで緩怠の

心を生ずるであらう。決して祿を減じてはならぬ。若し及ばざれば倉廩をひらいて残らず民下に施してもよいといつて、國內米一升を八十錢以上に賣ることを禁じ、これを犯すものは嚴刑に處断すべしと布達したので、その日から米價が減じてこれが爲めに幾萬の生靈が救はれたといふ話もある。明年重賢が江戸參觀のため熊本を發したが、熊本から領境ひの鶴崎にいたる三十里の間、人民道堵に伏し、拜跪感泣したといふことである。

その頃、上に賢君がゐるから、下にまた幾人の良臣能吏がゐた。その中で一門長岡忠英のごときは良臣であり、前に記した堀平太左衛門のごときは良吏の模範であつた。このふたりは特に重賢の主材を彌が上に研ぎあげた觀がある。平太左衛門は年わづかに三十六にして大奉行となり、明和三年家老の列に入りて祿三千五百石を領したが、一代稀有の手腕を振つて熊本藩の宿弊を一掃し、素晴らしい功を立てたけれども、その身は儉素の中に活きて絹布を着けず、糲飯に菜根を咬んで暮した。彼は玉山に請うて、蔬菜の畫に畫贊を頼んだが、玉山は『不可不使_三以此味_三士大夫。不可使_三以此爲_三民之顔色』と書いてやつた。平太左衛門は生涯これを事實に躬行することを誓つて、邸内の庭園を廢してそこをすべて水田となし、稻を植ゑて自分はもちろん家内ぢうを動員して、草採りから刈入れ、粃磨までやつて殖産の助けとなし、また妻子を戒めて決して物に奢ることをさせなかつたので、一藩の士風は靡然としてこの良風に倣つた。平太左衛門はもともとさして家格の高くない身分の家に生れた人物であつたから、

彼が異常なる出世をするにつれて、稀にはこれを嫉んで種種の誹謗をなすものもあつたけれども、彼はかつてこれに反抗がましい態度を執らず、終始一貫、誠意をもつて藩事に盡し、却つて他に對しては仇に報ゆるに恩をもつてしたので、初めこれを憎んだものもつひにその誠意に動かされ、自分を愧ぢて同じく誠意を披瀝してこれに報いざるを得ないやうになり、一家中學つて彼に心服するにいたつた。

長岡忠英、堀平太左衛門と並び稱せられたものに今一人稻津彌右衛門がゐた。寶曆五年、すなはち時習館の出来上つた年に肥後藩領内大出水で球磨川が漲溢し、萩原堤があはや崩壊せんとした。もしこの堤が切れたら最期、百數十箇村水浸しになつて、剩さへ人畜の死傷計るべからざることになる。彌右衛門は當時郡奉行の職にあり、身命を賭してこれを喰ひとめ、農村を安全ならしめ、同時に數萬の生靈を救つたので、農民はこれを徳として『あのや稻津さま、神か佛か、死ぬる命を助けさす』と唄つたのを農村見巡りに出た藩主重賢か計らずもこれをきいて、歸城の後この唄を歌つて興に入つた。彌右衛門は『殿様に様づけされたのは、恐らく俺ひとりであらう』と得意になつたといふ逸話がある。時習館の三代目の教授高木紫溟初代教授秋山玉山、二代教授數孤山、三代教授高木紫溟は、後このことを採りあげてその著『銀臺遺事』の中に記した。

紫溟は和漢の學に通じ、殊に和歌を善くして多くの秀歌を身後に遺してゐる。彼は初め阿蘇の麓に萬松廬を結んで住んでゐたが、秋山玉山また常に阿蘇の景趣を愛し、しばしばここに登攀して詠詠をほし

いままにしてゐた。説によると、彼は一日端なく萬松廬に紫溟を見て、その才學と人物を敬愛し、これを藩主重賢に勧め、紫溟はその切なる招聘によつてつひに熊本に移り、次で時習館に入ることになつたとある。紫溟、萬松廬を舍つるにあたりて戀郷の情にたえず、

玉くしけ二重の山をこえゆかは手野の神杉見えすかもあらむ

と歌つた。彼の詠に次のごときものがあり、圖らずも時の帝の聽御に達したものであつた。

唐こしも東風ふくたひに匂ふらし大和島根の花の盛りは

帝この歌をきこし召してこれを嘉したまひ『圖らざりき西睡の田舎に、その珍人を出すとは』とみこと宣りし給うたので、紫溟はこれを生涯の譽れとして、『田舎珍夫』の印を刻したといふことである。

かくして彼はその身熊本にありといへども、永く阿蘇の麓の郷地を慕ひ、常にその土地に産する穀蔬のるるを取寄せては、それを食膳にのぼせて喜んでゐた。當時江戸小石川の茗荷谷に熊本藩の有斐學舎があり、在江戸の肥後青年の士氣振興の機關であつたが、その寮にゐた生徒達は『江戸の米は無味い』といつて、態態故國から有名な肥後の上米を取寄せて食つてゐた。これは紫溟の場合と同一徹な話柄であるが、肥後人のお國本位の思想は、かうしたこと端し端しにもこれを窺ひ知られて、興味淺からざるものがある。

熊本の城下に生れ、熊本の城下に育つたものの持つ、かうしたお國本位の氣風の中には、常に天下の

名城たる熊本城が儼乎として根を居ゑてゐたに違ひない。天下に城池は多い、しかも熊本城はその城池の中の冠たるものである、と信じて疑はないのである。殊にこの城池は、西南戦争において名将谷干城が立籠り、賊軍の包圍を受けてその猛攻を喰止めたといふ著大な戦歴を経てから後は、明治に生きてゐた熊本の武士の子達は、一層その感を深くしてゐたであらうことも疑ひない。昔名古屋城の築造には、加藤清正これに管事したが、彼はそこに居城したのではない。清正がみづからこれを繩張し、築造してそこに居城したのは熊本城である、といふ誇りは特にまた熊本藩人の抱持してゐたところであらう。この特殊な氣風は、常に勇將清正の士氣獎勵の精神と交流して、深く藩士の心に浸潤してゐたことは確かである。その清正に家中への申渡七箇條と稱する掟書が今に傳へられてゐるが、これは正しく細川家家士達の心得の一つでもあつた。すなはちその中の一箇條に次のごとく記されてゐる。

學問之事可入_レ精、兵書を讀、忠孝の心掛可_三專用_一。詩聯句歌よむ事停止たり。心に花車風流なる手弱き事存候へば、いかにも女のやうに成ものにて候。武士の家に生れてよりは、太刀かたなを取りて死する道本意也——

とある。殊に重賢のごときは、學問に精を入れて藩校まで興したが、決して武道に怠りは見せなかつた。とかく細川家の武備の嚴重であつたことは、細川三齋の逸話に盡きる。幕府の出頭堀田加賀守正盛が、當時茶道の權威であつた三齋に對して『お道具拜見仰つけられたい』と申出た。むろん正盛の考で

は、茶道具のことを指したものであり、三齋もまたよくこれを察してゐたが、さて當日になつて、正盛は閉服して三齋の邸を訪ふと、これはしたり、茶道具などは一品も見えず、ずらりと家藏の武具を連ねて飾りつけてあつた。正盛は以ての外に案外し『さてさて、拙者のお道具と申したるは茶道具のことにて武具のことではなかつた』といふと、三齋もまた案外な顔をして『これは不念を致して失禮申した。しかしながら手前ことは元來武士であつて茶道ではない。茶は消閑の餘事であるから、武士の身で道具と申せば、いふまでもなく武具馬具を指すのでござる』と云つたといふ。彼は天下双びない茶博士だつたけれども、やはり武士としての本道を忘れてはゐなかつたのである。

細川家の長臣長岡帶刀の家祖は松井佐渡といふ。その頃有吉頼母なるものがゐた。佐渡は元來才幹に長じ、また人望のあるもので、君家の政經向にはなくてはならぬ利権者であり、世間では『公儀は佐渡、武邊は頼母』と評した。佐渡喜ばずして曰く『侍士は有吉のごとくなるがよし。吾、愁ひにあれこれと爲すが故に、この沙汰に遇ふ。吾豈武において有吉に劣らうか』と一嘆したといふ。熊本藩士は、永くこの心をもつて心としてゐたもので、この一事は三齋のお道具の逸話と相似た一談柄である。

しかし、幽齋、三齋が武にして文を捨てなかつたやうに、重賢もまた犬追物といふ武家の遊技において一番の士氣を養つてゐた。犬追物は重賢が家臣竹原九右衛門に命じて、藩祖幽齋以來傳來した方式に、竹原の家に傳はるところのものを参照し、薩州島津家所傳の口傳を引用して再興したものであると傳へ

られてゐる。後の齋茲その志を継ぎ、竹原父子、齋藤權之助、境野嘉十郎、太田善九郎らこれに参加して斯道を奨励するにいたり、つひには一時犬射ぬものは、家督相續にも障りあるほどの事なりといふ時代を現出するにいたつた。後に藩士志方半兵衛なる者、江戸で伊勢流の犬追物の古書を發見し、これによつて研究をかさね、藩校時習館の議にも上つたが、その傳は家士の疑惑を慮ばかりてつひに採用されなかつた。

この犬追物に携はつてゐる齋藤權之助は號を芝山と稱んで、時習館の弓師範であるが、儒學に造詣ふかく、當時徂徠の學風を皇張することに勉め、六經を自註してこれを用ゐる『文武兼備にあらざれば、實材といふことはできぬ』と高く標榜してゐた。彼は文學部には關係はないが、それにしても徂徠學者が當時時習館にゐたといふことは、強ひて他派を排することをしなかつた學校の方針——重賢の方針を知るべきである。

境野嘉十郎、彼は凌雲と號して、これも同時に時習館武道稽古所の教師であるが、これは芝山とは異なり、武邊一片のものであつた。技において必ずしも齋藤に比して劣つてゐたのではないが、齋藤は文武を兼ねて藩中の人望をあつめてゐたので、射手四百三十六人、犬四百を用ふるの盛況で、これがため「熊本の士風改まる」といはれたが、境野は門人遂に四五人になつたので、彼は斷然弓術の教師を罷めて齋藤に入門したといふ點に、また武士らしい淡泊さがあつた。然も彼は意氣嚴勵な武人で、かつて河

尻に奉行の職を奉じてゐた時に、ある日その地の藩主のお茶所へ島津侯が泊することになつた。ところが境野は大いにこれを不可とし、上司に訴へて『この地は御當家船手のある土地である。他藩のものを入るべき境地ではない。速やかに島津侯の御宿所を他に移されたい』と申出たが、藩主の口からすでに約束されたことで、かくのごときは武士の二言で、不信に陥るものであるから變替へは出来ぬといふことになつた。そこで境野は薩公御警護のためを名として壯士百餘人を狩催ほし、拔身の刀槍を持たして巡り歩かしたので、薩摩公は過失あらんことを恐れ、匆匆他に移轉したのであつた。

學風と士風のつながり

時習館内に再春館の建設を見たのは寶曆七年で、大講堂尊明閣の出來たのは同十年である。再春館の建設と同時に、肥後では八代に文武稽古所を開き、また豊後鶴崎に成美堂が設けられて學問武藝を奨励した。再春館は醫學の講習所であつて、村井見朴が一代の首席教授としてこれに任じた。彼は盲なりといへども心識明敏で極めて博學、世の醫師方技の輩が貧富によりて患者の待遇に差別を立つることを極度に憎み、世にはゆる仁術をもつてその身の務めとなし、雨雪を厭はずして病家に趨り、門外展聲を聽けば、即ち起色あり”といはれたほどに熱心であつた。しかし彼は元來盲なるがために、毎日登校教授のことに従ふわけにはいかなかつたが、なほ家にゐて教授の名を負ふの恩命に浴してゐた。しかも

諸生教導の方針については極めて熱心で、學校の機構施設の事に關しては日夜盡瘁して倦むところがなくつたといはれる。彼は音樂吹彈のことに通じ、常に鐵笛を弄し琵琶を撫し、悠悠自適迫るところがなくつたが、一旦學問、療病のことに及べば、それらを一擲して座を起つといふ有様であつた。

再春館にはその頃、藩外からの遊學生がかなり多く來てゐた。その中でも福岡藩からのものが多分を占めてゐたといふ。それは、同藩の儒であつてかねて醫でもあつた龜井道載實南が、極めて見朴の爲人に敬服し、肥後第一流の傑人であると稱して、これを郷里の人人に吹聴したにもよるだらうといはれてゐる。一たい彼は肥後藩の士風を非常に喜び、後『肥後物語』なる一書を著はして極力重賢の徳を擧げ、また熊本の士風を賞美してゐるが、これを時の福岡藩公に呈し、少と熊本侯に見做うては如何、と云はぬばかりに諷諭した。福岡侯これに含むところあり、後、異學制壓を名として道載を免黜したといふ俗説がある。それは如何であらうと、道載の肥後士風に對する仰慕は非常なもので、次のやうなことがその書に記されてある。

臣諸國を遊歴し、士風民情に心付て見るに、幾度も肥後の風俗は感じ入りたり。家中の面々其勤職に出精し、遊惰なる風俗少しも見えず。勤めなき人も學校稽古に勉め、聊か懦弱なること決してなし。侍小路町方を歩き廻るに、琴三味線などの音聞えず。川狩などに參る士を一度も見ず。彼の國にて交りしは多く儒者也しが、其面々出勤を見侍るに、袴も羽織もみな木綿なり云々。

坂田孫左衛門、江戸にて肥後の士と出會、懇意に何角物語しけるに、先様にては貴國にては服制如何にと問ひしに、孫左衛門答て、當時は國用不如意にて、諸士一統儉約を用ひ、正月の朝禮のし目服紗を着し、平日は一統綿服なりと申ければ、先様重ねて、いかにも貴國は富有と見えたり。我藩などは正月も節季もみな綿服にて候と語られきとの話也。

道載は懸命になつて肥後風俗を譽めちぎり、川狩などに出かける士人などは一度も見かけたことはないと述べ、熊本人こそは勤直一片そのものごとく書いてゐるが、しかし熊本人にもなかなか拔道はある。熊本には古來夜討といふものが流行つてゐた。これは夜中深更に及んで二人あるひは三人、または四五人、突然人家を襲うて叩き起し、酒を命じて夜の引明けに引揚げるといふ不遠慮な蠻風である。この夜討に逢ふもの、酒がないといつて斷わることのできない不文の掟になつてゐた。酒がなければ如何にもして調へなければ、その家の主人は面子丸潰れになるのである。だから熊本の士人にして飲手である以上は、年中その用意がなくてはならぬことになつてゐた。しかし道載の右の『肥後物語』にも、ちよつとこれに縁りありさうな一話が載せてある。それは道載が熊本に滞在中、何某といふ儒者が訪ねてきた。その儒者は手に繩で括つた一陶の酒をぶらさげ、竹皮包みの干魚少しばかり、それを道載の前に差出して飲まうといつた。これは夜討の逆で一種の逆寄せであるが、道載はこれをもつて、熊本人の素樸さを稱してゐる。

熊本の士人は、よく酒徳利を提げていつて相手と對酌したのか何うか知らぬが、後代、横井小楠もこれを提げて春日潜庵を訪れてゐる。その頃潜庵は京都に帷を下して陽明學を唱へてゐたが、小楠は何を考へたか、初對面に酒を提げていつたさうである。ところが潜庵は從五位下讃岐守か何かで、それこそ謹直に構へてゐたので、なかなかその酒を飲まうとしない。小楠は上戸であつたか下戸であつたか知らぬが、酒はそのまま即座に大議論になり、朱子學と陽明學が忽ち正面衝突をなしてしまつた。しかし小楠はこの時から潜庵の學問人物に服して、逢ふ人毎に彼を吹聴して措かなかつたらしい。小楠は時習館から江戸に遊學を命ぜられた當時の秀才であり、後、長岡監物とともに實學をもつて稱せられたといふが、この實學の稱は果して如何であつたか、學問によりて陶冶鍛鍊された彼の人物は、極めてずばぬけてゐたことだけは確かである。

嘉永三年、長州の吉田松陰熊本を訪ひ、少壯氣鋭の人人と會して時勢を痛論し、人材を評議したが『熊本人と議論して利益を得たる事多し。是氣象活潑ここに至るを得せしむ』と云つてゐるが、彼は小楠と尤も深く交はつたといふから、右の言葉の底には、小楠の倂が一同よく沈潜してゐたにちがひない。その時代に、同じく時習館を出た特色ある人物は元田永孚である。小楠は一代朱子學を奉じてゐたやうであるが、永孚も朱子學といへども、これを墨守してゐたやうな形蹟はない。彼は溫雅にして聰明、少しも腐儒の態なくして、却つて實學と稱すべき素質を具備してゐたやうである。明治三年細川護久公

の侍讀となり、後宮中に奉仕してつひに 明治大帝の侍講に進み、また帝國憲法や皇室典範の成案に參畫し、教育勅語の草案を立つるなど異常なる功績をのこし、樞密院顧問官となり從二位男爵を授けられ、生涯を通じて 大帝の恩寵を拜すること海嶽も首ならざるものがあつた。明治維新に先つこと十數年、嘉永三年彼に『懷昔行』なる長詩がある。その末に曰ふ、

——天意何時無回遷。陽氣一發石可穿。安起眞龍乘雲雨。鼓動風雷轟九天。

すなはち彼は、夙に皇政復古の時節到來すべきを口占してゐるのであるが、熊本においては、當時朝幕に對しての藩論がなほ纏らず、平野國臣をして空しく『都には吹きもいたらず火の國の、阿蘇か根おろし音はかりして』と焦慮せしめたにかかはらず、永孚はこれに先だつ幾年、すでに皇運恢宏の兆を洞察して、これを詩賦に託してゐたのは異となすに足りる。後年 大帝には特に永孚を召させられ菊花の拜覽を仰せつけられた後、御苑萩の御茶亭にて御親しく賜宴の御事があり、畏多くも 大帝御手から御箸を執らせ給うて、御饌中の魚羹を永孚に賜り、彼をして恐懼感激に堪へざらしめ給うた。時に 大帝は永孚に詩吟を命じ給うたので、彼は時習館流の曲調をもつて『芳山帶刀歌』を朗朗と高吟して 大帝の御感に入ることができた。かくて彼はこの時の榮譽に感慨措く能はず、次で一詩を賦す。

花月相合此令辰。君臣歡會亦何新。周文善養應無及。御箸分看賜野人。

時習館の學問は、その創建當時は藩主重寶の方寸によつて、必ずしも朱子學一脈のみではなかつたけ

れども、後年にいたりては朱子學一本立となつてしまつた。しかし、この學風は時代を辨まへぬ狹義なものであるとして、これに嫌らぬ一派も出で來つたのである。すなはち林櫻園などはその代表的な一人であるかも知れぬ。

櫻園は朱子學一本立の藩學には満足出來なかつた一人である。彼は夙に神祇を唱道し、學はむしろ老莊をとつてゐた。彼の考へによると、世の儒學といふものは極めて人爲的な存在であり、神祇の道は天地自然の法則をそのままに奉じるもので、老子の無爲といふのも、畢竟自然に準標したものであり、同じ道に歸結さるべきものであるといふのである。彼の門からは宮部鼎藏、轟武兵衛、太田黒伴雄、加屋霽堅その他、例の神風連の人人が出てゐる。

時習館は年所を経るに従ひて、いろいろの弊害も出で來つたには相違なかつた。重賢の時代を過ぎて二三代は、多少の隆替はあつたにしても大なる變化はなかつた。重賢から一代おいて次の齋茲は極めて好學の藩主で、學校のために新地の鹽田一萬石を拓き、これを學料として寄附した。彼は江戸にありても常に藩學の事に心を用ゐ、詩の課題を脚力に託して熊本に送り、これを館生に課してその作詩をまた江戸に取寄せては悦に入つてゐたほどである。しかしそれ以後になると、學校の内部において、人も、事も追追と黴臭くなり、學問さへも舊習に狎れて新味を欠くやうになつた。小楠の『學校問答録』といふものがあるが、これは彼が越前福井藩に聘せられた際書いて藩主に差出したもので、具さに藩學の弊

を述べたものである。故に小楠、永孚、長岡是容らは、熊本ですでに別に經學を講じてゐたといふが、この林櫻園などは、露骨に反旗を翻へした一人であつたのである。

しかし、この藩學は長い間において、熊本の士風を涵養したその功績も、また忘るべからざるものがある。小楠にしても宮部鼎藏にしても、ここで學び、またここで武道を勵んだ。しかも小楠と鼎藏では、その士風において大分異なるところがあつたやうである。小楠は少壯意氣盛んな頃には、何かの機會に折折刀を抜いたが、鼎藏は『抜かずして治むるを上智とす』と常に云つてゐたといふが、しかも小楠も鼎藏も、つひに人を斬害したといふことはないやうだが、一は暗殺の厄に遭ひ、一は襲撃の難に死した。事は少し古いが、熊本の士で、抜かずして手柄を稱せられたものに都甲多平がゐた。曾て江戸に赴く途中、箱根邊で、一賊が人を害して縁の下へ潜りこみ、白刃を擬して人を近づけず、捕吏も村民も當惑してゐるのを見て、奮然義氣を發し、その身は赤裸裸に揮一本、寸鐵もこれを帯びず、一枚の鍋蓋に一條の麻繩を携へて縁の下に這ひこみ、容易に賊を縛して出て來たので、人人舌を捲いてその大膽さと技術の精妙さに驚き、これは如何なる手法の妙によるかと問ふと、多平は笑つて『士が刀を抜くは鼠賊のためのものではない。この心得は、宮本二天先生の遺訓によるものである』と答へたさうである。多平がこの鼠賊を捕へたことは、事甚だ小であるけれども、彼が薩人としての眞骨頭は、江戸城西の丸の城普請に關しての、彼の膽略と意地とについて見る事ができる。

江戸城の西の丸普請の時、幕府は諸藩に令して賦役を課した。肥後藩もまたその命を蒙り、多平は工事監督として出府事に従つたが、諸藩は着着と工事を進めてゐるのに、如何なる手違ひであつたか、自藩からは石材が届かない。時に事すでに切迫、細川侯まさに罪を獲んとして、片時も猶豫が出来ない。多平大いに焦燥立ちて、浦賀の海岸に駈けつけて見ると、この時恰かも佐賀藩の船が石材を載せて着船してゐたが、折よくも水主船頭がみな上陸して酒舗に飲んで居り、老奴ひとり居残つて船を守つてゐた。多平得たりと躍りこんでこれを縛し、石材はそのまま江戸に運んで工事に着手した。むろんこれは君公の厄を救ふがための一時の險道には違ひなかつたが、彼は意を決しての非常手段であつた。佐賀藩憤激してこれを幕府に訴へ、多平は次で有司の手に捕へられた。この顛末について『譚故書録』に次のごとく載せてある。

佐賀其由を訴ふ、人多く熊本を意ふ。官、多平を召して之を鞠す。曰知らずと。蹤跡粗々露はる。勘問すれども曰知らずと。温問嚴責百方之を問ふも曰く知らずと。乃ち柴棍を束ね、之をして稜角に座せしめて曰く、自首せずんば則ち將に石を其膝に加へんとす、如何ん、曰く知らずと。因て次第に重きを積む、殆んど胸と齊し。柴稜肉を噬み血流淋漓たり。然れども曰く知らずと。是に於て千斤を把り力を極めて肉を起す。曰く知らずと。乃ち擔斷して前に置く。肉顫うて蠢々如たり、如何ん、曰く知らずと。吏感嘆狀を報じて之を赦す。

彼の爲したことは與すべきでないが、その氣魄の痛烈は、まさに人の膽を寒からしむるものがあり、飽まで溢太い熊本土風の根元を示した一事實である。

藩校の教官らその他

時習館には秋山玉山以後、知名の學士がかなりゐた。教授に藪孤山、高木紫冥、村井見朴、辛島鹽井があり、助教、訓導に井上梧蔭、木下犀潭、日田蒙齋、富田大鳳、村井琴山、古屋鼎、井上雪溪、池邊鶴林、池邊蘭陵らこれである。この外に片岡朱陵がゐた。朱陵は初め藩學の創立について、玉山らと力を協せたが、つひにその學校の教職や事務に携はることをしなかつた。朱陵は豪快磊落の人で小事に切切たらず、玉山とはその性格において相似たものはなかつたけれども、この兩人は何ういふものか極めて密な交情を保つてゐた。朱陵は河豚が大の好物であり、玉山は蜆を好んで食した。よつて玉山が朱陵に寄せた一詩がある。

河豚行戯示岡士驥。

前有三尺魚。後有一坏土。達土由來帝縣解。視死甜於西施乳。寒冬十月雪作花。虎斑豚魚味方美。醉將西施葬人腹。笑殺魚腹埋屈子。君不見吳天白日正酣歌。越來之溪爲血水。又不見吳王三尺腸。血濡一縷人立死。

士驥はすなはち朱陵の字である。詩題には戯れに示すとあるが、しかし玉山としては、これは恐らく眞劍正味の切言に相違なかつたであらう。菰園の盲詩人高野蘭亭は一時豪快の人、鎌倉の墳墓を發いて某武人の頭骨を獲、これに漆して盃となし、よつてこれを宴席に用ゐ、少壯快活の輩は歡んでこれで飲んだが、玉山ひとり辟易して手にも觸れなかつたといふ。彼はそれほどにきてふ面な儒者であつたから、朱陵が好んで河豚を食ふことにも、心からこれを恐れてゐたに違ひあるまい。

寶曆十三年に、時習館で大試業が行はれた。その時には藩主國老らも臨席し、歴列座の前において生徒中の優秀者百餘名に褒美の品を下し置れたが、その内の五十名は時服を賜はり、中にも最優秀の成績を示したものの三名に、藩公自筆の扇子を殿様自身の手から與へられた。この名譽を贏ちえた三名の中に水足作之助といふ十五歳の少年がゐた。それは曾て水谷家の生んだ天才兒水足平之允の後にあたるといふので、人人は『さすが血統は争へない』といつて感嘆した。その作之助は直後時習館の助教授に引上げられたが、天この少年に年を藉さず、十七歳にして夭折した。因みにいふ、水足の生んだ天才兒平之允といふのは、すなはち『徂徠文集』に見ゆるところのいはゆる西肥之水秀才とあるのがそれであるといふ。平之允は十六歳にして江戸の徂徠に書を寄せて經義を問うた。徂徠これを奇とし、李于鱗の『華山之記』を平之允に送り、よくこれを讀み得たら、我耳を與へようと云ひ送つた。李于鱗はすなはち徂

徠が古文辭を引出し來つたところの明の古學者で、その文字古怪、文章嶮奇、到底普通儒人の判じうるところのものではない。然るに平之允直ちにこれを讀過して徂徠に返送し『願くは先生の耳を獲ん』と云つて來たのには、さすが我慢の徂徠も舌を吐いて長嘆したといふことである。

徂徠は一世を曠うした大儒であるが、彼は一生中に、これでふたりだけの秀才この秀才といふ辭句中には、當然少壯人といふ意味がある。を認めてゐることになる。ひとりとは菅麟嶼で、他のひとりはこの水足平之允である。麟嶼は少年にして幕府の儒となつた異常の人物だが、二十七八で夭折した。平之允はその後何うなつたかそれ以上のことはよく分らない。恐らくこれも夭折したのではあるまいか。天の才子に壽を惜むこと、浩歎に値ひすといふべきである。

添へて記す。熊本時習館は明治に入りて、二年洋學所を別に設けたが、三年休校、四年にいたりて閉鎖した。なほ當時學館及鸞繡閣の藏書は概まし次のごとくで、これは舉げて洋學所に移され、後さらに縣廳に移管された筈である。

時習館藏本

正史雜史 三百種
禮儀 九種
故實 二十種
譜牒 十二種
兵書 三十六種
雜書 三百四十種
熊本藩 七九

儒學の陶冶を受けた筑後士風の勃興

——久留米藩學明善堂——

明善堂と水戸學

安政、萬延の頃、筑後久留米の地に遊んで、その國風人情を観察した筑前秋月の藩士海賀宮内の『適筑志』に曰く、

風俗は和易疎簡の風也。上下の間も格別隔絶なく、陪臣小身の前にても、天下の時務、國家の政務を勝手に評論す。夫故俄に見る時は、長老老少の序薄く見ゆれども、之は決して倨傲にて老人を敬せずといふにはなく、疎簡なる心よりかく解和して憚畏なき也。

商家は商事巧者にて、四方近隣多くは此地に來る也。是は輕巧にて人を欺き來すにはなく、應接丁寧にて物價下賤にして、多く客を招くを以て主とする故也。

士氣は一通り也。但し一派水戸學の風は甚氣概あり。俗人よりは之を天保學とて大いに譏り惡む。

併しこの天保學有が故にこそ、氣節義烈の風、卓爾として他方に超然たる也。若此天保學無んば、風俗士氣も廢弛萎靡するならん。

ここに水戸學と呼んでゐるのは、水戸の會澤正志齋の學系を援き來れるそれを指すものである。當時會澤正志齋の『新論』といふ一書は、新鮮にして潑刺たる彼の識見を披瀝し盡したもので、これが諸藩の子弟に與へた精神的刺撃は極めて大なるものがあつた。この刺撃を受けて、その頃遙遙と西陲の久留米から東國の水戸に正志齋を訪れたのは、木村赤村、村上士精、眞木紫灘名保臣、初鶴臣、號紫灘、明治元年歿、年五十三の三人の青年であつた。ここにいふ紫灘はすなはち後の眞木和泉である。かくて彼らは同時に正志齋に入門したのであるが、後年この三人が久留米に歸藩して、ここに初めて水戸學の骨髓を移し、その學風を宣揚して頻りに藩の上下を矜式した。だが當時この會澤流の學見は、餘りにも義理に徹底し過ぎてゐたので、俗人はこれを天保學と稱んで冷やかにあしらつてゐたことも事實である。しかしこの天保學こそは、後よく久留米の人心を鼓舞振作するの基調となつたことも否めない。

この久留米の青年たちが、正志齋に入門した際、師に贈つた束修がめいめいに振つてゐる。すなはち木村生は菊池の千本槍、眞木生は久留米の刀匠綱宏鍛ふところの短刀、また村上生は先考畫くところの元寇鬪戰圖であつた。かくしてこの青年たちは正志齋から具さに『忠孝無二。文武不岐。學問事業不殊。其功。敬神崇祖。報。國家無窮之恩。』の練作鉗鎚を受けて歸國し、みなその藩校明善堂に就て、後

進の教育指導の任に當つたのであるが、後、紫灘の眞木和泉は王事に奔走中事成らずして自刃し、士精の村上は狂を發して藩老馬淵某を刺し、これまた自刃して果てた。この士精は異常の才人であつたことは、歳わづかに十一にして國慶の句讀助手に擧げられ、十九にして『政論』十卷を著はしてゐたに徴しても、その人物が想像できる。彼はこの時すでに優に大人を凌ぐの學見を具備してゐ、文章また嘖嘖讀むべきものがあつたといはれた。死せし時年三十二。士精かつて水戸を辭するの時、師の正志齋に一詩を留む。曰く、

志氣平生蓋五洲。寧將今日更增憂。一部新論傳萬世。不知天定勝人否。

正志齋これに和して士精を送る。

旭日發光大八洲。慨然懷古奈先憂。天涯引領望知己。鴻雁爲余傳語不。

眞木和泉、村上士精らが藩校に入つてその學風を宣揚し、精神を發興して藩學を一時に隆盛せしめた功績はまことに著しいものがあつた。これより先藩學明善堂は藩の第九世有馬頼徳の時にいたりて、子弟間の階級争ひや嫉視、文武の軋轢が相當に激化し、双方對峙して相下らず、弊害百出殆んど收拾がつかない亂脈さに陥つた。これはその頃生徒の數がかなり増加して校舎が狹隘を感じたので、教學部からの要請を容れて『明善堂勸學令』といふものを發し、同時に武藝稽古所を教學部の方に取入れて、そこに學生を收容した。尤も武藝稽古所は當時餘程閑散で、道場ががら空きのことが多かつた、といふのは

頼徳の前藩主たる第八世頼貴は非常に好學の君公で、とかく武道の方は閑却されがちな様子もあつたから、武道教師は以來多く不満を抱き、その門人たちもまた師の肩を持ち、學館の稽古所には餘り顔を出さずに、師匠の道場で修業するといふ傾向になつてゐた。藩の當事者はこれを苦しいことに思つてゐたが、却つて事を荒立てては面倒と心得たものか、ろくろく武道師範の側には協議を遂げず、殆んど獨斷でその稽古所を取上げてしまひ、その替りとして或一部を稽古所に直したのが抗爭の端緒となつたものであつた。この悶着がかなり大袈裟になりさうであつたから、當時江戸に參觀中の藩主は、驚いて學校の當事者へ直書といふものを下した。

直書

近年明善堂追々衰微ノ躰ニ至リ如何様取扱方次第ニテハ盛ニ可ニ相成ニ哉ト令ニ勸辨ニ候。全躰學問ノ儀ハ一藩風教ノ厚薄萬人心術ノ善惡ニ相拘リ肝要ノ事ニ候得ハ、明善堂ニ不限一躰ニ盛ニ相成候様無之テハ國家ノ人才彌手薄ク、自然政教ノ衰弱ニモ相成儀ニテ片時モ被ニ捨置ニ事ニ無之候。依之堂中ノ面々孰レモ精々心掛、公平論究ヲ遂ケ一致ニ相成候様不ニ取計ニ候テハ學校モ無詮、甚歎敷事ニ候條是非共堂中一致ニ相成様勵精候テ、必其應驗有之、一統之振立ニ可ニ相成ト相考候。兎角一役之中銘銘ノ存寄而已多成、實事ニ至リ事ニ依リ一和不致ユエ終始ヲ遂ケザル事モ有之哉ニモ考候。右ニ付其方儀存寄ヲ以テ日々出堂申付候ニ付、一部初メ熟讀等モ具ニ承候テ、存寄モ候ハバ其趣申

述其模様ハ我等ニ時々可ニ申出ニ候。堂中一統ヨリ願望之次第有之候得共、先以下ニテ取扱方十分致ニ盡力ニ可ニ相勤ニ候。其上ハ猶下知次第モ可有之候條、下ニテ精々心掛是非共盛ニ相成候様、堂中役々一致勵精諸人ニ及候義肝要ノ事ニ候云々又次のごときものもある。

於ニ明善堂ニ六會、但出堂並に懈怠付明細。舍第諸稽古之時右同斷。銘銘家宅稽古之節出席右同斷。砲術丁場勝手次第右同斷。

右之通小姓中へ申聞候に付、明善堂出役の面々孰も丹精せしめ、歸國迄には一段相進候様教導可致候。此旨其方より屹度よく可ニ申付ニ候。

この前後に、藩主及藩の有司から幾たびか布達や沙汰書を發し、學校の上下に對して警告戒告を雨の降るがごとくに注ぎかけてゐるが、さういふ外面からの小言や註文は左様な亂脈を癒す爲の何の効にも役立つてゐないやうであつた。すべて諸藩における學校の肅正は、藩主大夫から交付する一片のお布令書などよりも、要は内部自體からの改善整理の方が、いつでも大なる淨化力、消毒力をよく發揮してその學校がよくなつてゐるのが例である。故に各藩の藩校の事例に徴して見て、學校の消長盛衰はその學校に有能有力な教師輔導員がゐるか否やに繫かりてゐるのであつて、これは決してお布令やお沙汰書の威力にはないといふことを、よく物語つてゐるやうである。

この對抗の争議中、教學部の生徒と武道側の生徒との打合などがあり、引いて教師と師範との口論があり、再三ならず藩の有司の和解や説得があり、また文武双方へ通學してゐる子弟中には、板挟みの苦境に陥りて退學閉息して出校しない輩も多く出で來つた。學館の教師である山本幽篁といふ人は、極端な貧乏人であり、兼て極端な脱俗人であつて、雨漏りのため家の中で傘を差してゐたといふほどの變り者であるから、餘り人事には口を出さない先生であつたに關らず、何ういふ機みか又この抗争の中に捲きこまれて、有司から殿しい譴責に遭ひ、直ちに閉門謹慎を命ぜられたが、左様な貧乏人であつたがために、家にその閉門すべき門がない。しかし閉門の嚴命に門がないでは濟まぬから、さすがに役人たちも氣の毒がつて、新たに門を拵へてやつて、その門を閉め切つて青竹で封じてやつた。ところが月餘にして漸やく赦免の沙汰に接したが、幽篁は一向に門を開かない。そこで役人や門弟が出向いて、一時も早く開門すべしと注告したところが、幽篁は答へて曰く『我門は元來閉すがための門であつて、これを開くは原則でない』と、よりて人人啞然としたといふが、かういふ人物はまた格別の人物として面白味のないこともないであらうけれど、結局、學校有事の場合、その危機を救ふといふには適當の材ではなかつたことはいふまでもない。

學校における子弟の階級的席順争ひも、この頃追追と悪化してゐた。これは一にその子弟たちの家の格式によりて定められたのは當然であつたが、當時少しく校紀に緩みがあつたのであらう。家格が多少

低くとも、才譏優れて學問に敏い子弟たちは、ややもするとこの差別を超えて順序を紊したり、中には上司の子弟を嘲弄蔑視するの風があるといふので、それがまた難かしい問題となつて紛議が持上つた。そこでその頃の助教であつた本庄星川名一謙、字子搗、通稱一郎、久留米の人、文化三年歿、年七十三。學校用掛の柘植傳八等は罰則といふものを定めて、これが鎮壓取宥めに多くの苦心を拂つたやうである。その頃のものと思ふが、次のごとき規則があつた。

學生 罰 則

- 一、不行作禁足五日、三度目二十日。
- 一、相手切の喧嘩口論、禁足十日、三度目五十日。
- 一、師長の教に背き却て嘲弄し、或は徒黨を結び喧嘩口論の時は、特に嚴罰に處す。三度目は退館、其父兄は譴責す。但し本人悔悟せば復館を許す事あるべし。

これによりて見ると、生徒輩が徒黨を結んで争ひ、あるひは師長を輕侮する等のことがあつたことを明らかに窺ふことが出来るし、當事者が如何にこれらの取扱ひに手を焼いてゐたかをも想像し得る。この前後、藩の目付長沼某の名をもつて、藩校の訓導橋口仙太郎に對して交付された『叱置一札之事』といふものがある。しかしこの事は、後日にいたつて當の橋口の落度でもなかつたことが明らかにされたが、橋口訓導はこれがため大いに憤慨して辭職を申出でたのを、皆が氣の毒がつて双方の緩和を計り、

橋口を江戸邸の勤務に廻して事落着してゐる。一札の表に曰く、
其方事、今度之學生徒黨争に付、其取鎮方當を得、學校に掛合を及し候段、役職を疎かに致、重
々不行届に依而屹度叱置。

とある。當時學校内外の紊亂さが、これによりても推測できるであらう。
その後を享けてこの藩學に入り、教育輔導の任に當つたものは眞木らの少壯一派であり、これらの人
人がここに水戸學と銘を打つた新鮮な空氣を學内に注入し、かねて藩人たちに新論的な精神を植ゑつけ
るに努力したのであつた。かくて初めて傾きかけてゐた覺運を既倒に廻し、併せて一藩の士風を矯正し
た功績は、けだし少小のものではなかつたであらう。

初代の藩校教授樺島石梁

藩學明善堂は第八世の藩主有馬頼貴の時代、寛政八年、教授樺島石梁名公禮、字世儀、號石梁、又萬年、通稱勇七、久留米の人、文政十七年歿、年七十四。らの建議によつて開設されたものである。是より先、藩の學問所修道館は、講談所と稱ばれてすでに開
設せられてあつた。すなはちその修道館は、夙に咸宜園塾の廣瀬淡窓なども來り學んだ學問の道場であ
つたが、それが寛政中火災に罹つて焼失したので、その後校舍再興の議があつたけれども、藩の財用が
許さないのでその運びにいたりかねてゐたが、折から御原郡井上村の豪農某甚藏なるものがあつて、そ

の基金として三百兩を藩に献上した。彼は京都の西依成齋に學んだ好學篤志の人物であつたといふ。そ
の頃、石梁は江戸邸侍讀であつたが、その年歸藩して學校再興に心を砕いてゐたので、これが機會をつ
くつて、つひその希望が達せられた。明善堂すなはちこれである。これはもとより石梁その人の熱心な
運動の功にもよることであらうが、當主頼貴は極めて學を好み、稀なる文教の奉仕者でもあつた結果に
よるものであつた。

明善堂の前身修道館は、初め天明五年久留米兩替町に開設され、後更に狩塚門に移された。當時は左
右田尉九郎これが教授たり、講師には廣津善藏、徳永圓次、松下勇馬らがあり、杉山觀齋が幹事の役を
勤めてゐた。石梁のごときも、江戸から歸藩した際には、ここに又書を講じたのである。その當時の『修
道館記』といふものをここに省記する。

修道館記

維時天明乙巳、本藩南筑州、君侯昉就國、施仁政、行清肅之治。欲使藩中子弟明人倫、嚮
文學、常以愛民心焉。方今宇内右文之治大闡發、禮樂、詩書、康哉至矣盡矣。當此時也、君侯
再建學館、命以修道。蓋取諸思子中庸篇之言。曰、修道謂教。祭酒主事等、日會以講經藝。
上自彬々之先進、下至學業句讀之子弟、皆窮日之力以勤焉。本藩振古稱闔國出人。今苟濟々多
士、青衿子弟、玄冠師傳、相共陶育鼓鑄、以達文藝之究奧。

これは左右田教授の選文と傳へられる。

かくて後明善堂の建設成るや、藩は左右田尉九郎を移して、石梁とともにこれを教授及教授物頭格に任じた。當時この藩學に關係した諸儒には梯箕嶺、安元節原、岡永蘭洲、池尻葛覃らがあり、本莊星川は助教としてかなり重い地位に据つてゐた。また藩老に有馬照長、同じく恭賢があり、ともに好學の太夫で、これまた建業に力を盡した人人である。石梁は純粹の久留米人であり、業を江戸の細井平洲に受け、溫秀儒雅、極めて師風を存した人であるといふが、その學は純乎たる程朱學であつたといふから、この點では師平洲の學風よりも無雜であると思はれる。しかし強めて自家の見を韜晦含蓄して、専ら師傳を奉じ他説を交へずとも云傳へられてゐる。彼は元來が敦厚敬恭な君子人なので、士大夫庶人はいふに及ばず、藩公も極めてその人と學問とを敬重し、彼の在るところ、人みな慎んで謹厚な態度を失はなかつたといふから、醇乎たる君子儒であつたに相違ない。ある夏日、藩の重臣某、その家に石梁を迎へて講義を聽いた。然るに石梁、前夜夜を徹して書に訓詁を施したので、この日殊に神身倦み疲れ、講義中に睡魔しばしばいたり、何うにも支へ切れずして頻りに居眠つたが、驚き覺めてはまた講じ、講じてはまた居眠つた。ところが對座聽講の重臣某も、石梁居眠れば同じく居眠り、覺ればまた覺めて聽講した。かくして辛くも講義が終りて、石梁は暇を告げて歸り去つたが、先刻からこの態を窺つてゐた某の家來は大いにこれを訝り、先生居眠れば太夫も居眠り、先生覺れば太夫もまた覺む。

この故如何と問ふと、重臣某答へて曰ふ、それは尤なる不審である。吾再三、先生に注意すべしと思つたが、先生は稀なる謹厚人であり、如何にしてもこれを驚かすの勇氣を出すに忍びなかつた。しかも先生座睡して吾ひとり恬として覺めてゐたら、是また先生の失態を辱かしむるに似て、甚だもつて吾らの忍び能はぬところである。故に先生眠れば吾また眠り、先生覺れば吾また覺む。かくしてこそ初めて彼我的態度相愜うたゆゑである、と。人の石梁を憚り重んずること、實にかくのごとくであつた。

學校の生徒は、全家士、足輕輕輩の徒にいたるまでの子弟にして、八歳より十五歳のは残らず登校就學すべしと布達し、なほ緩怠者ある時は、有司から督促獎勵し『學校御建設の御趣意は、御家有用之材を作るに有之候。折角之御趣意を取失ぬ様致度——』と幾度もこれを促し立てて入學の手續を取らしめた。學校では素讀師がこれら幼少年生のために毎朝四書、小學、五經、蒙求、古文眞寶、史記、春秋左氏傳、文選などを習得させ、詩文方は月六回教導して試作を行はせ、初年生にして一年無缺登校のものは四書一部、二年は詩經、書經、優等は褒賞銀、殊に優秀なものは官途に登用し、二男三男にても特に俸米を給ふといふ制度を立てた。稽古所すなはち武道方では初級目錄、二級は免許、三級は印可を與へ、賞銀俸米また同様であつた。

當時學校の講堂に掲げられた教則は、次のごときものである。

教 則

學問之儀課程之次第不相立一候ては、我儘學問に相成、疎漏偏僻種々の弊害を生じ、試業之法不相立一候ては、積累進取之目計無之、此二ヶ條は學制之大本、教化之要務、因て其順序左之通。
 大學課程試業之事 學術正からざれば心術自不正、大學は大人之學にして、身を修め國を治る道に志し、白鹿洞書院揭示に順て、篤實に可勤之。大本立ざれば、假令經義に委しく子史に涉り詩文巧なるも皆道に非ず。

初等生課業 大學章句を論語集記を孟子集記を中庸章句を右講究を正業とし、尤も是までの業を復看し、傍に和流の軍法を研究し、國書の奥旨に志し、汎く子史に涉り、作文を學び、文章軌範、古文眞實之類獨觀、志ある時は雅樂を學も妨なし。

中等生課業 詩經集註を書經奏傳を春秋左氏傳を右講究を正業とし、公羊傳、穀梁傳を兼修め、傍詩文集を手廣く獨看、詩文各躰學ぶべし。

上等生課業 易經本義を禮記集註を近思錄、右講究を正業とし、周禮儀禮を兼修め、傍七書之兵法を調べ、其外手廣く猶又四書、五經奥旨を極むべし。

明善堂に鞭を執つた人人

藩學の興隆、藩校の開設は別にも述べたごとくであるが、藩學の創設といふことは、如何にこれに希

望を懸けた藩主があつても、その藩主ただ一代にしてその事業、功績を成し遂げたといふ例は各藩を通じて殆んど一つもないといつてよいやうである。文教の興る必ず淵源あり、學校の置かる必ず由來がある。久留米藩もまたその例を洩るるものではなかつた。

久留米藩も教學の源流は、遠くこれを二世忠頼の時に發してゐる。忠頼は極めて學問を好んだ人で、菊池東句を採用してその侍講たらしめてゐたのみならず、時時家士を會してその講書を聽かしめた。東句は文學のみでなく、多少兵學にも通じてゐた儒者であつたと見えて、その講書の間によく兵書の辭句を引いて證しとしたので、藩主にも家士たちにも非常に喜ばれたものらしい。彼はまた經學の外に詩學にも精しく、古い『陶淵明集』や『圓機活法』の跋はこの人が書いてゐる。それ以來久留米の藩主は次々と儒學に好向をもち、三世頼利の時には眞部仲庵、四世頼元の時には中村信齋、長沼宗敬、入江兵馬がゐた。この長沼宗敬は馬を驅り槍を捻るといふ全く武人型の人であつたらしいから、あるひは長沼流兵學の家に縁故のあつた人かも知れぬ。彼は入江兵馬と前後して久留米藩の士氣を引立てたことは一と通りでない。

かくて第六世則緯の時、京都から伊藤竹里名長準、字平藏、字を以て通名とす、京都の人、寶曆六年歿、年六十五。が聘せられた。竹里は實に堀川學の伊藤仁齋の第四子で、幼にして父仁齋に家學を受けたが、十四歳にして父を喪ひ、次で長兄東涯に従ひ、よく父兄の學業を繼述した人である。彼は長く京都で藩の世子の侍讀を勤めたが、後江戸に

移りて江戸の藩邸で講書侍讀した。彼は氣風よく父兄に似、長者の態度があつたが、和氣霽靄のうちに一脈氣識奪ふべからざるものを藏し、常に「守愚」をもつて一身處世の信條としてゐた。一日君公則緯竹里に問うて曰く、『先生守愚の効能と作用は如何』竹里徐かに答へていふ『心平らかに氣和すれば、溫柔といへども剛毅奪ふべからざるの力がある。公をとり正によれば、迂遠といへども抗すべからざる權がある。臣が愚を守りて、敢て敏らざるはこれがためである』と、則緯これを可しとした。

當時、藩儒に湯川丙次がゐた。彼はやはり京都人で仁齋の門人であるから、竹里とは師門關係があつたが、豪宕卓犖、竹里とはその性格において大なる相違があつた。しかも彼は政經の才があり、尋常訓話の儒人ではなく、しばしば藩政についての意見を出し、その建言もよく用ゐられ、蕉政の更張に多くの功を立てた。かつてその藩にある時、召されて君前で長崎新渡の唐本に點を施してゐたが、時に近臣が來りて、君公侍座の老臣に對し、城下某某の地處争ひが昂じて、つひに訴訟沙汰に及ばんとしてゐることを告げた。すると丙次は俄かに筆をとどめ、訓點句讀のことは、すでに合原餘修がある。俗事紛紜を解き、争ひを收むるがごときは、吾徒の最も得意とするところである。人はまさにその技の長ずるところに向ひて、特殊の本色を發揮すべきである。よりて拙者は直ちにその紛擾に赴いて和解せしむるであらう。願はくは許容を給へといつて、さつさと君前を退つてしまつた。よりて唐本の點は餘修をしてこれを繼がしめたが、翌日丙次は老臣の前に出て頓首し、徐ろに昨日の無禮を詫び、さらに地處争ひの

紛紜は、事なくこれを熟談和解せしめた由を告げ『君前宜しくお取なしを乞ふ』といつた。彼は實にかくのごとき人物で、儒としての變り種であつたが、合田餘修もまた尋常一樣の人物ではなかつたらしく思はれる。時に久留米藩と柳川藩の境地馬場村は河流に瀕ひ、霖雨があると必ず水害をおこすので、その溢るるを禦ぐがために、兩藩はこの河の兩岸において堤防を築き、常にその高さを争うた。しかし果てしがつかないので、國老有馬河内これを憂へ、その策を餘修に問ふ。餘修答へて曰ふ『孟詞の論に、以大事小者樂天也。以小事大者畏天者也とある。篇と一考されたい』と。よりて河内、直ちに配下に令して堤防の築造を止めたが、柳川藩でもまた中止した。因みに記す。久留米藩にはよく家士の地處争ひがあつた。藩は中世この悶着を防ぐがために、家士番頭格以下の資格に準じて、屋敷の地面の坪數を一定した。これによると番頭格では九百坪、平組格は四百坪、徒士中小姓二百五十坪、寛政度までは下士の家客室六疊、次六疊、又は八疊次四疊、卒には玄關を許さず、縁は簀の子張りときめられてあつたが、士の家居といへども、屋根はすべて萱又は藁葺であつたのを、文政以後は火災のためにわづかに瓦葺をゆるした。

七世頼種の時、儒官高山一之は朱子學者で、一藩これが風化を被むること多かつたのと、八世頼貴の時、藩學の教授樺島石梁の後を襲うて教授格に補せられた本莊星川が、藩學の雜駁を朱子學に統一すべく、各藩の制度を研究して『學制私議』を著はし、學風を純正に還らしめようとした學制更改運動は、

かなり目覺しかつたもので、當時人人の注意を引き、いろいろの批議反對などもあつたが、しかしややその目的を達した。これより以後、久留米藩の學風はまづ殆んど朱學に統一され整理された觀があつたやうである。

一之は筑後の人、狀貌魁梧、その家極めて貧なるがために、油を買ふ錢がなく、夜、書を携へて村の鎮守にゆき、その燈籠の灯でこれを読む。村人これと呼んで燈籠先生といつた。彼はある夜、某の許から提灯を借りて歸つたが、道道携ふるところの書を出して、その提灯の灯に照してこれを読むうち、過ちて河に陥つて、嗟や溺れんとしてわづかに助かることをえた。村人これより提灯先生をもつてその名としたといふ。しかし彼は、後藩に召されて儒となつたので、人人その出世に驚いたが、彼は城南の官舎にゐて書を読み、その醇樸の行狀は、里人を化して謙讓の風とならしめたといはれる。

廣澤藍溪もまたその頃の儒官である。何事も「難有し、難有し」と口癖にいふ老人であつた。かつて人のために百金を失つたが、人これを弔すれば「難有し」と答へた。この百金は、彼が著書を刻するがために貯へてゐたものであつたが、失つた後は、恬然として顧みなかつた。また途上たまたま暴風雨に逢ふ。人これを傷めば、また「難有し」と答ふ。「世間の餘事は、多く先生のために難有いであらうが、暴風雨は然らぬであらう」と反問すると、藍溪頭を掉りて曰ふ「然らず。暴風雨といへども矢玉ではない。このていものならば、まことに難有し」と。問ふ人啞然。

藍溪は易に精しく『鬼神論』『魂魄論』などの著があつた。彼は藩に仕ふること實に六十七年といふ。寛政六年に八十六の高齡をもつて終る。極老に及びてなほ君側に出仕してゐたが、藩公その老衰を憐れみ、冬日には城中なほ頭巾を戴くことをゆるし、また鳩杖を賜つたといふことである。

八世頼貴の時の本莊星川は、藩學校の助教授を奉じ、諸儒に重んぜられた人で、實に學校に在ること二十餘年、事績については並びない功業を立ててゐる。元來が古賀精里の門であるだけに、ばりばりの朱學者であることはいふまでもないが、石梁の後を襲つて藩學教學部總支配の權をとつてからの彼の勢力は、また諸儒を壓するに足るものがあり、殊に彼は時務の材幹を有し、曾て石梁をして「學校の經營は、一の星川在れば事足る」と云はしめたほどで、その點一と廉の人物であつたに相違ない。當時學校における彼の好敵手としての相棒は、用人の柘植傳八であつた。柘植は藩の何かの物頭役で、極めて利口才辯に達した男であるから、藩公の覺えもまた格別であり、實際事務に役立つた人物であるので、學校では「口の傳八」と綽名してゐたが、なかなか憚り恐れられた人であつたらしい。故に星川ほどの人物であるが、彼は學校と藩公や有司との聯絡事務は、一切擧げて傳八を煩はす外に手はなかつたといふことである。星川は傳八とは異なり、頗る口數のない人物で、事あればただ眼をもつて人に指圖をしてゐる位で、その眼光だけは鏡どいものがあり、まさに「口の傳八」に對して「眼の星川」とでも云はるべき彼であつた。

石梁なきあとの星川は、學校においてはそれほど權勢家ではあつたが、たつたひとり、彼の爲には煮ても焼いても喰へない男がゐた。それは訓導から後助教になつた梯箕嶺である。箕嶺は筑前の龜井南冥道の門を出た護園派の學者であつたから、その學風においてもすでに星川とは反りの合はないものであつた。學校創立當時の藩の學風は、朱子、徂徠、古學、折衷、混交雜駁を厭はぬ風であつたので、學校内はこの點で時時學者の小ぜり合などがあつたが、箕嶺は恬然拘らぬ風の脱け出たところのある人物であり、一向星川に取り合ふ風はなかつた。また強ひて徂徠學を皇張して、ちよつ掻いを出してくるといふ風も見せなかつただけに、星川はこの箕嶺に對しては常に一目置いてゐて、なるべく寄らず觸らぬ態度をとつてゐた。一日彼は某に對して『自分の朱學は、精里に享けたもので、云はば直門である。箕嶺の徂徠學は、徂徠に享けた周南、周南から出た南冥、そのまた南冥の門から出た彼であれば、その格から論ずるに、實に彼がごときは又者の又者である』と放談したことが後日になつて箕嶺の耳に傳はつたので、箕嶺これを嘲りていふ『星川の杜選も、ここにいたりてまことに驚くべきである。朱學は唐土の朱子より起る。星川初め朱子にこれを享くるならば、則ち許すに直門をもつてするもまた可である。然るに精里のごとき、朱子門よりの傳系、幾曲折の後にこれを享けたるかを、今にいたりて何人も知る者がゐないであらう。今これを採りて、漫りに他に批議すること、不當是より甚しきはなく、全くもつて兒戯に類したものである』と。星川またこれを聞いて快よからず、彼が學校の學風統一運動の端緒な

278883

ども、かういふところに根ざしたのではなかつたかといふ説がある。しかもその統一運動の結果、箕嶺は何うなつたかといふことは分つてゐない。

十世頼永の時にあたりては、藩學は極めて活氣があり、殊に當時は幕府末造の頃にあたり、各藩とも一層人材有用の器を要すること、まことに焦眉の急に迫つてゐただけに、眞木和泉、村上士精、木村赤村ら新進氣鋭の學風は、その藩學に異常な精采を附與し、同時に一番の士氣を振作したこともまた尋常でなかつた。その頃の志士と呼ばれたものは、大てい寸延びのした長刀を腰間に横へて濶歩したものであるが、久留米藩にも往往その長刀が流行した。この前後直ぐ隣國である柳川藩に大石進といふ劍道家がゐるが、彼は五尺有餘といふ天秤棒以上の大竹刀を擔いで全國の道場を廻り歩き、到るところで試合をして、その長大な一物で勝を占めた。これには關西關東での有名な劍客は殆んど惣毆りに毆り倒されて面目を失つたが、しかしさすがの大石も江戸の男谷精一郎にだけは敗をとつたけれども、擊劍には長い竹刀が得であるといつて、一時その風が流行した。さういふ影響もあつて、藩の血氣壯んな士人は好んで長刀を横へたが、眞木だけは『英氣の強弱は、刀の長短にはよらない』といつて、常にこれをあざ笑つてゐたが、これより先佐田竹水名大道、字修平、號竹水、久留米の人、慶應元年歿、年六十七。がゐる。彼は眞木らに比してはずつと年嵩であるが、その癖に長い刀が自慢だつた。彼は極めて好漢でよく藩學の世話をやいた。また至つて旅行好きで、その長い刀を差して全國を旅したのである。曾て越後の親不知の嶮道を過ぎて、久留米に

る老母のことを思出して詩を賦し歌を詠んだ。

慈母天涯久別離。又逢北地互寒時。行人且說前途惡。膽落越州親不知。

霞ふる片山かけを今こゆる親になつてそわたるかりかね

儒の詩を作る、これは尋常のことで不思議はないが、しかも彼の和歌はよく流暢で、素人の臭味を脱してゐる。これは彼が歌人宮崎信敦にこの道を學んで、よくその庭戸に入つてゐたからである。信敦は久留米三島神社の神官で、京都の富士谷御杖および香川景樹の門を出で、歸藩して藩校明善堂の國學講師となつた。樺島石梁、有馬照長、例の柘植傳八、みな彼に歌を習つてそれぞれ相當に詠めたといふことである。竹水もその中の一人なのだ。その後船曳鐵門が主唱して、藩校に皇典科が設けられ、矢野一貞これが教官たり、鐵門はその講師となつた。彼は大坂の中島廣足の高足であつたといふ。

旅人としての竹水の足跡は、實に全國に洽なく亘つてゐる。かつて丹波を過ぎて大江山に酒顛童子の窟なるものを訪ひ、その窟中で忽ち放屁一發した。怪音洞裏に爆裂し、その響きはなはだ大であつた。よりて案内者大いに驚き、あるひは童子の靈の怒りに觸れんことを恐れ、竹水を促して匆匆出でて山を降らんとした。竹水あざ笑つて曰く『童子は鬼畜の類にして人間ではない。畜類は死するに臨んでよく最後屁と稱するものを放つ。されば童子といへども、頼光に退治らるるに當りてや、必ずこれを放發したに相違ない。己れこれ放りて、人のこれを放るを咎むる、彼といへども恐らく爲さぬであらう。斷じ

て氣遣ふことなかれ』と、悠悠其をひねり、且吹してゐたさうである。

またかつて出雲大社に詣り、宮司國造氏に謁を得、その席上で得意の詩經を講じ『唐土の詩は、要するに我國の歌である。すでに我久留米藩には“御繁昌歌”と申すものこれあり、祭禮の山鉦に唄ふものである。今餘興のために、拙者これを唄ひてお聽に達すべし』といつて、經書の講義中、聲高らかに堂も搖げと“御繁昌歌”を唄ひ出した。その唄、間調子外れのところもあつて、音吐破れ鐘を撞くがごとくである。さすが謹嚴の國造氏も、驚き訝かり、笏をもつて簾を掲げ、顔をつき出して大いに笑つたといふ。

眞木和泉は、その學問においては、石梁に亞で竹水を推してゐた。竹水はかつて藩命によりて江戸の昌平校に學び、後つとめて古今の經史を博渉し、つひに筑州第一流の學儒となつた人である。

頼永の侍講であり、また藩校の講師でもあつた野崎習堂は、久留米の士風を語るにつけては、佐田竹水とともに忘れてはならぬ一人である。彼は廣瀬淡窓の咸宜園塾を出た一人であつて、外柔にして内剛といった型の人物であり、しかもかなり皮肉な行跡があつた。當時武藝師範某なるものがあり、世子や一門の人人の擊劍の指導をしてゐたが、いたづらにその太刀筋を譽めそやしては、わざと負けなどをしてゐた。習堂心中これを恠なりとして、一日その武藝師範に試合を申込んだが、云ふまでもなく手もな

く敗れてしまった。習堂笑つて曰ふ『我輩は學徒であつてよく劍の道を辨へてゐない。しかしながらかつて世子とこれを試みて難なく勝つことを得た。しかるに先生、往往にして世子に勝を譲る。晦庵の語にこれあり、臣の諛るは君を傷る也と。先生もつて如何となすか』と。某一語なくして退いた。後日有司これを聞いて明善堂に貼紙を出したが、左のごときものであつた。

稽古所壁書

文武之儀、治國平天下之要道也。殊更以_二武藝_一身ヲ立ル者之根本ナレバ、之ヲ勵ム者忽セ不可_レ有。然處近來武藝試合相手次第ニテハ、勝ヲ讓リ己ヲ屈シテ不恥者有之ノ由、是武道之恥辱也。左様之心得ニテハ、自然士風ヲ卑屈ニ導クモノ、不可_レ然事、向後か様之輩有之バ、佞度仕置可_二申付_一、一同相心得可_レ申事。

これによりて習堂の名、初めて藩の内外に著聞したといふ。

習堂是一片の儒人には相違なかつたけれども、しかも士人としての行業を失はなかつたゆかしい人物でもあつた。書名を逸したが、彼に一篇の『備忘録』といふものがあつて、その中に次のやうなことが記されてあつた。

——有馬玄蕃頭殿、柳營大禮の時登城あり、時至りて東帶召さるるに、帶取の金具損じて、佩くべき様無し。差當りての事故、殿も臣共も當惑し爲處を不知。時に徳庵紀藩の庶流として、登城して

其傍に居給けるが、早速元結取出給て、手づから殿の帶取を繋ぎ給けるほどに、殿には首尾能く事を勤遂給ける。今も久留米之御家にては、太刀の帶取を元結にて結ぶ習有と云。果して去事有や否。習堂は極めて簡素な、士的な生活をした人である。彼は壯年以後、君家儀禮の場處以外には、木綿以外の衣服を身に着けて出なかつた。彼のその木綿の衣裳は、つひに幾年の寒暄風雨に晒されて、鼠とも羊羹とも分別のつかない色合になつてゐた。この木綿の衣裳について、さらにまた彼のために語るべき一話がある。

弘化の初年頃か、藩主頼永大檢令といふものを布き、一般に儉約を勵行し、侯家でも諸費用を切つめ、侯自身も衣類食膳の上にまでも節約を見せることにした。むろん侯の召料の羽織のごときでも、餘ほどの場合でないと着ないことになつたが、その羽織はこれも木綿であつたことは云ふまでもない。然るに習堂は、ある日、得得として生マ新しく見える絹の紋服を着用して登城したので、目付役のものこれを發見して注意したが、習堂はにやにや笑ふだけで相手にならない。そこで役人はこのことを上司に訴へ出たので、その老臣が出て来て『さても不心得千萬、お上でさへも今日木綿のお羽織以上のものは召されないので、お手前は絹の衣裳でのごと登城するとは甚だ以て不届の至りである。早速服裝を改められたい。さもなくば退城を申渡して、佞度處分をする』と以ての外の立腹である。習堂はこれ聞いて、黙つて紋服の袖裏を返してその老臣に示していふには『この衣裳は、御覽のごとく、表は絹であるが裏

は木綿であるから、これでよいではないか』老臣喝して曰く『相成らん。世に表が絹で裏が木綿といふ奇怪な衣裳があらうか。これは畢竟お手前の云抜けといふものである。早早御下城召され』と猛り立つた。彼は習堂に愚弄されたと思つたのである。その時習堂襟を正していふ『愚拙の近所に某某といふものが住んで居る。これは君公の衣服の裁縫をする職役のものであるが、そのものの直話によると、今君公が召してゐられる木綿の御羽織こそは、表はなるほど木綿ではあるが、裏は羽二重の絹であると承はる。すでに四民に對して大檢令といふ掟を御布達なされたる時に、左様の表裏相違のことを遊ばされては、二十餘萬石の君主として、己を欺き臣民を欺くの御振舞と申す外はなく、かくては政令行はれまじく恐察し奉つる。臣がこの紋服を着して登城したのは、いささか君公を諷し奉らんがための寸心に外ならぬ』と直言したので、老臣も驚いたり感じ入つたりして、主君の御羽織の件をよく調べてみると、なるほど習堂の云ふところのごとくであつたから、早速裁縫方に命じて表も裏もともに木綿の物に改めさせた。このことがあつたので、以後習堂は生涯一張羅の木綿着で押通したさうである。

かくして久留米の士風は、徳川末葉において、その儒學の上からいろいろの感化を享け、明治維新前後においても、多くの異彩ある新人物を生んでゐるが、藩學明善堂は明治に入つて洋學部を加へ、更に教育機構を整備すべく努めたが、同三年廢藩に際して廢止解體した。

佐 賀 藩

佐賀藩は幕政末期に當つて、藩主鍋島閑叟を有したことによりて著名であり、また藩中からも相當に有力な人物を出してゐる。封領三十五萬七千石と稱せられ、また九州における大藩である。藩祖は鍋島直茂、豊公、家康時代に馳名を奔せた英傑であることは人の知るところ、後裔閑叟に次いで茂實、明治三年藩籍奉還、次で直大また各所に轉戦して軍功があり、明治十一年全權公使、十七年侯爵を受け、その後傳へて今日にいたつたもの、城地は龍造寺家兼の築くところ、一名水筒江城といふ。

小説巷話に富む藩歴・揖陸佳談中の君臣

—佐賀藩學弘道館—

弘道館建つ

佐賀藩には、藩臣山本常朝名常朝、通稱神石衛門、享保四年歿。の有名な『葉隠れ』といふ書物がある。一名『佐賀落穂集』これである。その中の一句にいふ。

武士は首飛びてのち、一と仕事するものと思へ。

武士道とは、とかく死ぬことと見付たり。

また佐賀の俗謡に、

拙者元來鍋島育ち、剛毅朴訥有の儘。

これらは佐賀藩の士風の諷言であると思つてもよいかも知れぬが、天明元年藩費弘道館が建設開校された時より數十年前の正徳三年に、時の藩主吉茂から家老鍋島主水へ、聖堂學問所の義につき『仰書』と

いふものが示されてゐる。

——近年諸人風俗惡敷、利慾之事而已にて、學問之沙汰も無之、聖堂も大形に罷成候由——とある。これでは「佐賀の士風」も餘り當にはなりかねる節もあるかに思はれるが、それより前の直茂の時代になると、次のやうなものがある。

・江里口左三郎、衣裳立見苦敷候間、爲_三加増米_一百石被下候。丈夫に所務可致候。爲_三心得_一かしこ。

七月十五日

直茂判

衣裳が見苦しいので、加増を遣はすといふ主君、加増されるまで見苦しい衣裳を着けて、平氣でゐたらしい家來、剛毅朴訥は却つてこの方にあるのかも知れぬ。

藩風士氣に關することを調べて見て直ぐ分ることは、時代が下るにつれて、武士氣質もまたこれに比例して下り坂に轉向してゐることである。しかも轉向しつつ追追彼らは利口利發になつてゐることである。これは何もひとり佐賀藩にのみ限りたることではない。またしかもこの士風の頽廢を喰ひとめて、幾分でも元に還さうと努めたのは、その藩藩の教學の持つ意圖、目的でもある。さらにずつと下つて明和八年、藩主治茂通名中務、從四位侍從肥前守から一門の家老多久美作に對して、家士風儀に關する書付——つまり注意書が一再ならず交付されてゐるが、その前後のものの中に次のやうなものがある。

——學問武藝之事、士之一日も忽せ不_三相成_一事申迄も無之候。士一人之懈怠は十人の怠を誘ひ、十

人の懈怠は百人の怠と可成。去去年來再々以_三手書_一相示置候共、猶以出精者不_三思敷_一沙汰也。斯様候而は彌一藩之憂にし而、此上一刻たり共難_三捨置_一候儘、屹度相觸、士たる者前々相諭候通、必文武出精可致様致度、改而相達可_三被_一申者候——

この上は何うにも我慢出來ないといふ藩主の態度である。これより先寶永五年、藩主綱茂の時、大財村に聖堂があり、城内鬼丸には藩士の學問所として天縱殿といふのが設けられてあつた。儒士武富廉齋名威亮、字伯通、通稱市郎右衛門、號應齋又琴翁が聖堂の祭主で、堂上には池田新太郎光政筆『萬古長春』の扁額を懸けてあつた。然るに、有司の誘導が不充分であつたのか、教講師に相當の人がゐなかつたのか、藩士は餘り熱心に書を讀むことをしなかつたらしい。更にそれより下つて安永九年には『御警書』といふものが下つてゐる。

——儒士醫師之輩、叨に拔擢者過半草莽より起候。如此候得共、本藩諸士今迄傑出之者無之、全是士風遊惰の所_三使_一然、此義寡人常々不堪_三慷慨_一義共候——

士人が學問に昵まない結果、世に儒者、醫師と呼ばれるもの、却つて布衣平人より出づるものが多いといふにいたつては、藩主としての慷慨は無理もないことであるし、同時に藩士としても、これは大なる恥辱であるべく、彼らとしては此際是非とも振作奮發して、まさに一大飛躍を試みなくてはならぬ秋であつた。ここにおいて藩主治茂は、つひに意を決して年來の素願たる藩學創建にかかつたのである。尤もこれは治茂が初めてこのことに着眼したのではなく、藩學創造は幾代か先の藩主たちによつて、次

ぎ次ぎと考へられたものであつたが、藩風すでにかくのごとく、士氣しだいに地に墜んとする形勢に迫つたので、殊に學に向ふに矢も楯も堪らぬ治茂は、藩用多端、財政意のごとくならぬ中を押切つて、斷然建學に着手した次第であつた。かくてこの佐賀藩に弘道館の開創を見たのは、前記のごとく天明元年であり、校舎は城下松原小路に建設され、次で片田口堅小路に修業館といふ少年子弟の修業所が開かれたのである。弘道館の館記に曰く、

弘道館記

往昔、有虞氏之帝於天下、命契爲司徒、五教之敎蓋權輿乎斯焉。僉所以明人倫也。夫玉假琢方成器、人族學始知道。苟不知道則牛馬襟裾。故古之達士造士之科、拔雋擢傑、莫不必繇于學矣。——神祖敷撥、奎運回復、憲廟崇儒、東都創學。而後備長肥薩水府米藩諸廟舍後先並起、四方駸々嚮化。若吾藩、在梁廟時、築杏壇於西園寶里二區、而後世重名教、弦誦不廢。雖然距于今多歷年所、頽壞隨之。且以地稍僻——於是寡人相攸于國都中、新創學舍於青葉街、命曰弘道館——

これはその當時の館記の前半である。次で學則に曰く、

弘道館學則

一、弘道館被相建儀、御家中之爲御取立得ば、不限老若、稽古可有之儀。一體學問之儀は、

新たに不及申、專君臣父子夫婦朋友と、其道筋を致吟味力行迄い。其致様之儀は、聖賢之書に相備、其道を實に承け實に行心得得ば、身心内外一言一動、瑣細の事迄委規矩則有之儀にて、唯今新たに於學館法度禁制等、被相立にも不及い。乍去學問仕めても、實に承け實に行心得無之時は、何の益も無之、却て學問にて外向を飾り、懦弱放逸の行に長じ様にも相成儀にて、其通にては學館被相立御趣意にも致違却、非其本意事——

弘道館はその後天保十年鍋島閑叟小字貞丸、名直正、左中將兼大納言、號閑叟、後これを以て通稱とす、明治四年歿、年五十八。の時に迨んで北堀端の地に移り、少年修業場たる修業館またここに合併した。

佐賀の鍋島が、その城下に學校を建てようといふ希望は、これはそもそも藩祖直茂以來の懸案のやうにもなつてゐた。それには一つの理由があつた。直茂は關ヶ原の一戦に、潔よく東軍に味方をしなかつた態度が、いたく家康の不快を招いた。彼は佐賀に謹慎して早速關東に詫を入れたが、家康の挨拶から推して何うも本領安堵が覺束ない。そこで信長老閑室和尚に縋つてその了簡を借ることとした。閑室は肥前の産であり、直茂とは相知る仲らひである。彼は家康に篤い尊信と歸依を有し、また足利學校の卒業主たること實に十六年、學識も深く材幹もあり、なかんづく關ヶ原の合戦には家康の帷幕の裡に參與してゐたが、閑室は珠數の代りに筵木と算木を持つてゐた。彼はその筵木算木を捻り廻して占斷によつていろいろ作戰方略を獻策したが、それが不思議に着着と圖に中つて、戦勝の補けとなつたことが少くない。

かつたから、家康はいよいよ閑室を尊敬もし、また重寶もした。

直茂はこの閑室によつて家康に訛を入れた。閑室は舊知のある直茂のために百方辯疏するところがあつたので、家康もつひに直茂の本領安堵を納得し、ここに初めて佐賀藩三十五萬餘石が搖ぎなき土臺を据ゑ得ることになつたので、直茂は足利學校へ莫大の寄進もしたし、また當時京都の圓光寺にゐた閑室を佐賀に招いて、ここに三岳寺を建て、閑室をもつて開基とし、寺領二百石を附屬して彼の厚誼に酬いた。直茂が佐賀に豊庠を建てようと考へついたのは正にこの時のことである。

ところが、世は假武間もない頃のことであり、世風は文學といふことに疎く、藩士また一人の書を讀んと志すものもゐなかつたので、このことは遂に成らなかつたけれども、それ以來次次の藩主たちはみな大なり小なり藩變のことに思ひを致さないものはなかつた。殊に五代の藩主綱茂は敬學の念に燃えてゐた君公で、一藩上下の士風に多少の感化を與へたやうである。彼は詩を賦し、書畫にも達してゐたので、將軍綱吉特にこれを召してその講書を聴き、また他の學士らと輪講せしめたこともある。綱茂はかくのごとく好學で、多くの幕儒と相知つて往來好問してゐたが、殊に林大學頭から朱子學についての講義を聴くに及んで、佐賀における雜學を清掃し、朱學に歸せしむべき志望を有ち、その點に相當力を致したやうであるが、佐賀における雜學の歴史はかなり古く、その根張りが強かつたためか、つひに艾除し盡すにいたらなかつたらしい。現に七代宗茂、八代宗教以後には、隣國肥前から龜井南冥の徂徠學が

どんどん流れこんで來たし、また南冥の師匠にあたる大潮禪師がこの國に遊んだ時は、宗教大いにこれを歡び迎へ篤く待遇して、白山鳩森稻荷の神門の銘などを書せしめてゐる。この後學士には長尾東郭元名幹、通稱矢次馬、號東郭、文政三年歿、年八十五。、大塚師政、その男松處、堤主齡らがゐたし、聖堂には實松致齋名元琳、小字松千代、享保十一年歿、年八十八。がゐた。東郭はかつて江戸で服部南郭に學んだから紛れもない徂徠派であり、實松の付役である島内幸右衛門、千綿新吾、江頭彦之進のごときは、是また徂徠學を好んでゐた輩であるから、これらの艾除は容易の業でなかつたのは當然であらう。

明和年間に藩に聘せられた江村訥齋名宗流、字若水、號訥齋又節齋、一說に宇和島侯の儒といふ。暫く存疑。は程朱學者であり、この人が後弘道館の教授となり、石井鶴山名有、字仲車、號鶴山、佐賀の人、寛政二年歿、年四十七。と、東郭の男長尾忠三郎が助教を命ぜられた。

その頃學館の助教を勤めてゐた横尾紫洋名道賢、字子繁、通稱文助、天明四年歿、年五十一。は、長州の瀧鶴臺の門を出たものであつたから、是また徂徠學者で、とかくその頃の佐賀の學問は徂徠派がかなり巾を利かしてゐたことは争へない。ところがその佐賀が朱學の先達、異學排除の飛將古賀精里名棟、字諱風、號精里、通稱彌助、佐賀の人、文化十五年歿、年六十八。を生んだのはまことに皮肉なことであつた。精里は初め江戸で藩公に侍して書を読んでゐたが、一時歸國して佐賀の學柄を握るに及んで、紫洋はつひ居たたまらず、不平不満の結果、無斷佐賀を脱出して國外したが、佐賀の國法、かかるものは極刑をもつて處斷することになつてゐたので、間もなく彼は拿捕されて引戻され、一年後死罪に處せられてしまつたのである。まことに憐れむべき彼であつた。彼は初め、

佐賀を脱してから京洛に潜遊し、更に關東に向つて次で日光廟に詣で、大いにその壯麗に驚いたが、これに比して京都皇居の式微や諸陵の頽廢に瀕してゐることを綿想回思して、同志のものと私かに語らふところがあつたので、藩のために捕斬せられたものであると傳へられてゐるが、その真相は如何のものであつたか判じ難い。一方精里は後幕儒に擢んでられ、柴野栗山、尾藤二洲とともに後世寛政三博士の一人と稱せられて、栗山の異學禁壓に參畫するところあり、全國の異學——徂徠學、折衷學、陽明學、閻齋派などの徒に眼の上の瘤のごとく忌憚されたのは周知の事實である。

さればこれより以後、佐賀の藩學には徂徠臭味は絶無とはいかなかつたかも知れぬが、まづは大概に艾除された形ちであつた。建學當時前後の學士の中には、以上の外に石丸龜峰名良幹、通稱禮助、文化九年歿、年七十八。副島崑崙名昭賢、通稱彌兵衛、又嘉、享保中歿、年六十七。古賀穀堂名壽、字博卿、通稱一左衛門、號穀堂、佐賀の人、天保七年歿、年五十九。高橋浦里、村島孤山、原田鶴橋名鶴、字隸芳、號佩川、玉女山人、肥前の人、慶應三年歿、年八十七。の名を次ぎ次ぎと見ることを得るが、この中の原田鶴橋は長尾東郭に縁故があつて徂徠學臭味の一人であつたけれども、彼は横尾紫洋のごとき過激な行動をしなかつたためか、事なきを得たものごとくである。この鶴橋の後に當ると思はれる原田復初文化八年歿、年五十。は、後弘道館の教授となつたが、儒生たちが動もすると經史の辭句に拘泥して、偏執頑固に陥り易いことをひどく憂へてゐたものと見えて、講書の後に必ず次のごとく云つた『かく講じ終つたが、諸君決してこの文義を株守して、他の量度に押當てるがごとき看方をしてはならぬ。要はこれをもつて機に

應じ變に處し、利用厚生の道に資するにあるのみである』服部南郭經を講ずるや『余の今講ずるところは、かつて師に承くるところのものである。故に余はただ師説を諸君に傳ふるにとどまる』と云つたといふが、その南郭に承けた東郭も、やはり師の口吻に爲ねて『余の講義はすべて師説に承けたところであつて、余の見を交へない』といつたさうである。この東郭に學脈を引てゐた復初は、徂徠臭味の疑惑を避くべく『文義を株守するな——』と一條の抜け路をつくることを忘れなかつたらしい。天明以後文化文政にかけて、佐賀の學問は異學といふことに、如何に關心をもつてゐたかがこれで分るであらう。尤もこれは、自藩においては紫洋の無殘の刑死沙汰があつたし、隣藩の福岡では南冥の慘酷な没落などがあつたので、佐賀の學者たちがこの事實に直面して、一概に神經を尖鋭にしたのはまた止むを得ぬ次第でもあつた。しかし復初は至つて幸福な儒者で、國老鍋島安藝のごとき、その學徳と人物とに尊敬の念を傾倒し、始終國事をこれに問ひ、復初またよくこれに參畫して政策の成立に資するところ少なからず、功績はなほ多く、晩年にいたりて一身によく閩藩の人望をあつめた。その點ではこの前後精里、穀堂らの境涯に劣らない福人であつたやうである。

復初は極めてきてふ面な性格なので、學生らは常にこれを畏敬してゐたが、一日、舎前で裸で相撲をとつて喧噪してゐたところを、圖らずも彼に見咎められて一同大いに恐懼したが、復初はその生徒の主だつたものと呼びつけていふには『文ありて武なきは、士として愧づべきである。角力の戯は體を健に

し、神を興すに益がある。而も赤裸裸は是人間生初の容ちであつて、我名をもつてすれば、すなはち復初の義に愜ふものであり、我の最も欣快とするところである。故に角力は大いにこれを行ふべく、行へば嚴寒といへども必ず赤裸に限るであらう』といつて、學校の後庭に土俵を築いて與へた。弘道館の學生相撲、以後大いに振興したといふ。彼が歿した時、その訃音に接した久留米の樺島石梁は、その墓前に一詩を寄せていふ。

關西夫子四傳名。景慕十年徒騁情。良觀中原亭下興。奇緣白石巔頭盟。親同宿食淹三日。醉吐肝腸了二生。昨夜哀鴻驚曉枕。夢醒魂定浪蹤橫。

復初は曾て石梁と邂逅し、三根郡白石村に宿して、三日文學を論じたことがあつた。詩中すなはちこれを云つてゐるのである。

藩の財用は幾分有福

藩學弘道館の創建は、佐賀藩としてはやはり容易の仕事ではなかつた。累代の藩主がその事を念願としてゐながら、十代治茂の時にいたつて漸やくこれを成就し得たことは、他にもいろいろの事情はあつたに相違なからうが、やはりその大きな一つの原因としては、藩の財用の問題であつたにちがひない。殊に九代、十代の時代には、それが漸やく迫塞の涸渴状態にちかい様相に移りつつあつた。しかし治茂

の好學心は、財用難の憂を一拂して、つひにその學校を建設し、それを維持することに成就したのであつた。されば治茂以後にありては、一層藩の經濟が存念通りにいかぬやうになつたのは當然である。しかしながら佐賀藩は他藩に比すると昔からかなり有福な方であり、この點では藩主も藩臣も苦勞が聊か輕かつた。他藩ではこの藩費があるために、或時は家中の祿からいはゆる合力米の賦役があつたり、ある時はまた學校を半休にしたり、學料を削つたりいろいろのことがあつたけれども、佐賀藩としては藩費の隆替は時にあつても、それまでの苦勞を踏んでゐないところに、幾分の頼もしさがあつた譯である。而してそれを事實に徴し得る記事が一つ、松浦靜山の『甲子夜話』に載つてゐる。

鍋島貞丸十二代の藩主 徳川家齊の女盛姫 後の開聖公。へ公主徳川家齊の女盛姫御入與の後、彼末家紀伊守が話せしとて聞しが、彼の亭御守殿

の樓を營作せし時、その出來方を大奥に伺ひしに、指圖に階子を黒塗にすべしとなり。それより成就の上、御通路の事故、羅紗を敷くべしとの事にて、彼の黒塗の階子の上には、總て羅紗を覆ひしとぞ。紀州曰ふには、かく羅紗を敷くならば、下の黒塗には及ぶまじきに、さても大造なることよと語りしとぞ。その餘のことも皆かくの如しと。鍋島氏の入費察すべし。

事は小さいが、とにかく鍋島家の手元の裕やかさはこれでも知られる譯である。況んやこれはすでに幕府の末造にあたり、諸藩みな疲憊して、殿様は争うて綿服を被、家士は食祿に應じて合力米を献上してゐた時代のことであるから、唐津の松浦侯もこんなことをわざわざ取上げて、書物に書入れて置くに

いたつたものであらう。されば鍋島家の福福長者(?)であつた話で、もつと大きな物語を更に一つここに書いて置かうならば、それは恐らくこの佐賀藩の鍋島家と、福岡藩の黒田家とに關する國境背振山についての大紛争事件に如くものはあるまい。

佐賀には昔から名高い烏犀圓といふ熱病の妙薬がある。これは後には全國的に廣まつたもので、現に今でも世上の一部には用ゐられてゐると思ふが、寛永頃、鍋島藩の名医の調劑にかかるのだといつて、他に「金秀丹」といふ妙薬が江戸、京、長崎あたりで賣出された。何病に効く薬であつたか今明らかでないが、その賣子が觸れ歩いたところによると『肥前の國は佐賀の背振山、日本三辨財天御夢想の妙薬金秀丹』といふのであつた。ところがこれは後に分つたことであるといふが、この「金秀丹」は佐賀藩が思ふところあつて、密かに隱密を諸國に出してこの薬を賣り弘めさし、特に「佐賀の背振山」といふ點を人の記憶に入るやうに強調させたのださうである。佐賀藩が何んで斯様なことをしたのかといふと、それには實に下のごとき深刻な仔細があつたと今傳へられてゐる。

仔細といふのは、つまり佐賀藩が、福岡藩の領地である件の背振山全躰を、ぐつすり自分領に引込まうとした事件なのだ記録の上にはある。何故に佐賀藩が左様な大それた企らみを計畫したかといふと、事はもつと溯つて關ヶ原の徳川と石田の合戦當時のことになる。當時鍋島は前記したごとく、その參戰態度は極めて明瞭を缺き、殊に密かに石田に通款してゐたその證據文書が、不幸にも福岡の黒田の手に

落ちてゐた。鍋島は一應本領安堵にはなつたが、左様な密書が黒田の手にあるとしたら、いつ如何なる機會に不祥事として表面に出て來ないとも限らない。萬一左様なことがあつたら當家は興廢の岐れ目に立たなければならぬ。何とかしてその密書なるものを黒田の手から奪ひ還すべき工夫もがなど非常な苦心を拂つたが、かねてそのことを百も承知の黒田は決して油断はしない。そのうち慶長の初年になつて黒田は福岡の城廓の大普請をすることになつたが、同家は當時すでに餘り有福でもなかつたものか、鍋島に對して渡りをつけてきた。それによると、馬に幾幾駄の金子を頂戴したい。その代りこちらではかねて所持してゐるところの、秘密文書を一切お渡しすることである。鍋島は實際渡りに舟、逸すべからざる機會なのだ。で、直様その金子を要意して約束の場處に運び、そこで兩藩の役人が落合つて、首尾よく金子と文書の交換を行つた。

ところが黒田からはその上、若干の人夫を出して城普請に手傳つてくれとの申込みである。鍋島は重ね重ね口惜しいが不承知を云へない。黒田の要求通りに人夫を出して他藩の城普請までも忍んでやつた。以上のことは兎にかく鍋島家が如何に有福であつたかを證據立てるものであるが、いつかこの腹癒せをしないでは措かぬと狙つてゐるうちに、彼の島原一揆の戦争があつた。その陣中での出來事であるが、ある時島原方が黒田の陣へ夜襲をかけた。このどさくさで黒田方では二百名の死者を出した。これは鍋島方が不意に鐵砲を黒田方に打込んだからであるとして、眞偽は知らず一般に取沙汰された。黒田方はこ

れをきいて非常に憤慨し、それ以來事毎について鍋島方の不利になる出方のみをすといふので、ここに双方いよいよ取除き難い遺恨を結ぶことになつてしまつた。で、それから幾年、件の背振山事件が擡頭したのである。が、すでにその前から佐賀藩から金の小粒入りの鹽辛壺が、幕府の要處要處へ手廻つてゐたとか、模造の石碑が山から發掘されたとか、武士が百姓に化けて觸れ廻つたとか、いろいろな小説巷話的な経緯があつて、結局幕府の裁斷でその背振山の六分が福岡領、四分が佐賀領といふことに不祥不祥落着いたのである。この事は一たい全部事實であらうとは考へられないにしても、鍋島家が他藩に比べて内福であつたといふことだけは、稍や想像が付き得るやうである。現に明治維新直後、鍋島家は廢藩置縣に際しても黄金七十餘萬兩を政府に献じ、その上軍艦汽船七艘を納めたといふから大したものであつた。しかし藩の經濟は年所が下るにつれて追追と融通が苦しくなつたことも事實で、鍋島直正——すなはち閑叟は入國以來極度の儉約令を布いてその身みづからそれを實行した。藩費弘道館のごとくにも多くの改革を加へて、まづ第一に學術を純正に還すがために異學は根こそぎ驅逐して朱學を專一にし、子弟への文武獎勵その宜しきを得たので、學校もその頃極めて隆盛に赴いたのである。彼は天保十一年藩費を移轉改築し、六月新學館の開講に臨席して、生徒に對して左のごとく申し聞けた。

——壯年之者は館内を以住所と心得、眞實に文武之修業致し、供國用心懸不及申候——

その頃の學校における授業の方法は、素讀は指南役又は執法の前で一人づつこれを受け、返讀は遍數

を定めて復讀し、會讀は各組の生徒が抽籤して順番を決し、教諭の前へ出て定めぬの章を講じ、互ひにその批評を試みるといふ仕組になつてゐた。この修業は家中の子弟すべて二十五歳を限りとしたのである。この修業年限については、各藩の學校はその藩の都合によつて定めてゐるが、閑叟は『人壽は古來から五十をもつて準目とされてゐる。然るにその半ばを過ぎてもなほ書籍に耽り、その間歲月を空うして、世上有用の器となる能はぬものは、まことに人間の冥利に盡きたるもので、志ある男兒の恥づべきことである。殊に方今世情急迫し、人材を要する焦眉の折柄であるに、座してただ書を読むがごときは尤も然るべからずと思ふ。よつて今後藩中の子弟たるもの、學校の修業を二十五歳をもつて限りとすべし。但し文武とも、この一筋によりて一生を捧げんと願ふものは、別に申出べきである。有司僉議の上、宜しくこれを取計へ』と學校當局に云渡し、即座にこれに一決してしまつたのである。

閑叟公と古賀教堂

その頃の記録によると、藩費弘道館の教學部の機構は、學館頭一又は二、相談役一、教授一、助教一、教諭五、指南役十であり、嘉永四年には通學生六百人を算へてゐる。閑叟の一代中には教授が三度以上も替つてゐるやうであるが、侯はそれらの教授に對して、自分の少年時江戸邸に在つた際、常にその左右にあつて侍讀した古賀教堂の爲人について事に觸れ折に臨んで、常に左右のものに語り聞しては追憶

の情切なるものがあつたと云つて、藩校の小吏河村某がその『窓下茶語』といふものに書留めてある條によると、

少年の時の心はたとへば白紙の墨に染が如に白絲の藍に染が如にある也。故に少年の時よく心に入たるは一生忘去事なし。余幼少之砌、古賀藤馬穀堂のこと侍讀しけるが、その言行は多く今の心に留て一も忘れず。ある時藤馬余に問て、たこの足は何ほどあるや知玉かと言し。余は風の足と心得たれば二本也と答ふ。藤馬いやいや拙者問申せしは、空のたこならで海のたこ也と言し。余はそれを辨へず、不知と言しに、八本に候と言。余押返して、さらばいかの足はと言ば、空にて候か海にて候かと言、海也と言ば、藤馬返答に行詰りたる體にて、それはいかほどや知不申と言て、彼も笑ひ余も笑し。藤馬は父彌助精里のことに恥ぬ儒者也しが、經史のみならず、武道の嗜も深しと見えける。あるとき若侍どもの射場にて、藤馬押肌ぬきて弓射けるが、其體様法に叶へりとして、弓師範の者言るが、十の内七は射當たりけり。藤馬はいづれにて射を修業せしとも聞ざりしが、數十年過て余此とき事、今に眼前にしかと見る如く也。

とあり。公は特に少年の教導には注意を要する旨、常に藩費の儒者たちに云ひ含めてゐたといふことである。

穀堂が文教一面の人物でなかつたことは、彼が江戸邸で閑叟の少年時に侍讀を勤めた當時、そこに明善堂といふ學問所の外に、講武所といふ武藝の練習所があつたが、彼はその双方の總宰を兼てゐたことによつても、彼の凡庸でなかつたことを知るに足りる。しかし、穀堂はかくのごとく君側に重用せられてゐたといふことに對し、家士のうちにはこれを快よしとしないものもあつたし、殊に彼が儒者の身として講武所の總宰をも兼務したといふことについては、頗る不滿な一味があつた。穀堂は父精里ほどではなかつたが、一種篤實質直な氣性を藏してゐた人で、他の放肆自儘な行爲を許さない。ところが江戸詰の家士といふものは、藩の費用に關する上から、出来るだけ切詰めた人數より出府さないために、在藩のものから見るとずつと事務が繁多である。繁多ではあるが、何分江戸といふ土地柄は、その在府勤めの彼らを往往狡猾に立廻らし、うまく抜穴を拵へさして、自然放埒遊惰に導くといふことにもなる。かかることは穀堂の最も憎むところであるから、それが事苟くも自身の管事してゐる學藝講武に關するところ、なかなか承知しない。そこで一味の輩は結束して穀堂に對して抗爭の態度に出で、明善堂及び講武所を一舉に廢止してしまはうといふ運動を起し、某某連名の上の上書騒ぎにまで漕ぎつけてしまつた。しかし君公はもとより毫もそんな考へは持つてゐないから、黙してこれを握り潰し、彼らに對して一向に返答を與へない。そこで上書が三度に及んだがそれでも何の沙汰もないので、一味のものは今度は手を替へて當人の穀堂に書を與へ、速かに辭任退職せよと迫つた。然るに穀堂はこれ一笑に付してその辭任勸告書を火中にし、これを一片の灰にしてしまつたといふ取沙汰が傳つたから、一味の輩は極度に

憤慨し、いよいよ同人排斥を表面化せしむべくさらに次の手を打たうと内議中のところへ、穀堂が火中にしたと噂のあつたその上書を、上司から差戻してきた。改めて見ると、その中の二通はなるほど連名で差出した上書に相違なかつたが、他の一通には上書の外に何か別に一通添へられてあつた。このことあつて以来、その運動がひとに挫折してしまつたといふことである。ではその別に添へられてあつた一通は何んであつたかといふに、それは誰にも分つてゐない。ただその當時人人の想像によると、一味の輩の右の抜穴にでも關する急處を突いたものではなかつたかといふ。あるひはさうであつたかも知れぬが、とにかく穀堂はその後も依然として講武所主宰を兼任してゐたのは確かである。この明善堂及講武所事件については、當時穀堂に對する批議はかなり猛烈を極めたものであるけれども、彼は始終毅然たる態度で押通し、さすが父精里の名を辱かしめぬものであるといつて、識者を感嘆せしめた。彼は天保七年佐賀の自宅で歿したが、その藩校のために心力を盡し、また藩政についても献策するところ多く、眞の意味における二代の藩主の良弼の臣であり、殊に閑叟の賢を助けた功績は、穀堂與かつて力ありといふべきであつた。

閑叟が學を勧め武を勵まし、士風を昂揚して身をもつて勤儉にあたつたことは、一藩の人人をして奮起の念を起さしめた。彼の『内意書取』といふものの中に、次のやうなことがある。

——入國以來仕組等相立候得共、未だ一步之明りも見え不申、其上近年の凶作にて、百姓共甚難儀

之由承及ぶ。古人も民は國の本と云ふ如く、民無ては實に國家一日も立行不申事眼前に候。然者外向も仕置相立候儀には候共、猶又於三側向、仕置相立候衣食より、段々儉約致、軍國天災之備は勿論、窮民を救ひ、鰥寡孤獨之憂無之様專一之事。

前條申候通、我等衣服之儀、去春一通申候へ共、未氣に合不申、漢之孝文は、天下にてさへ、衣を三度洗着せらる。又我朝にても、同席中松平新太郎、上杉鷹山なども如此。まして我等が如き者、幾度洗ても能き事也。故に已來國元にては、木綿ばかり着用可致——飲食の事は、我等幼少より奢美に致候へ共、此節は朝食は汁香の物二品限り、中食は平と香の物二品限り、平無之節は皿魚、夜食は味噌鹽にて宜敷、右之趣は其方共よりは申兼候義に付、我等より申聞候——

閑叟の入國は十八歳の時であるが、ある時俄かに穀堂を召して引見した。驚いて出仕した穀堂は、如何なる急ぎの御用であるかと伺ふと、閑叟は『實は唯今郡奉行のものから聞及んだが、事が百姓に關することなので、片時も捨置けぬので御身に御苦勞をかけた次第である。百姓どもが當藩からの債務について、その返済に苦んで渴命に及んでゐる様子であるが、これは如何なる方策によりて百姓共の難義を救ふべきか。御身の考へをききたい』とのことであつた。穀堂これに答へて、『これは孟子の均田法と申す古法を活用するより外に、手段はないと考へます』といつて、ここに君臣鳩首して均田法を研究し、これを實際に活用することにした。是すなはち佐賀の“御猶豫”と呼ばれた法である。閑叟が農民に對

する思やりの深切さは、概ねかくのごときもので、彼は明日死刑囚があると聞けば、その前夜かならず飯一碗を差ひかへて、法は曲ぐることは能はぬ。仕置も致方ない。然れども賊といへどもまた領民の一入で云はば我子のごときものである。我子は如何に凶悪人であらうとも、これを憐れみ悲まぬ親があらうか。かかる凶悪の者を出すこと、畢竟國政に失あるがため、責は我これを免る能はぬところであるといつた。

穀堂はよくこの閑叟の政事に參與したことは、父精里が先代の藩公に參與して治績があつたのとよく似てゐる。その頃藩公は江戸への參觀に、石井鶴山を伴うて、精里を藩にとどまらしめた。人この故を問ふと、藩公答へて曰く『精里は頼むべきもの、仲車は愛すべきものだからである』と。仲車とはすなはち鶴山がことである。精里はその位重んぜられてゐたのであつた。鶴山は藩費のことについては、相當の功績をのこしてゐるが、後大坂の福岡藩邸で客死した。死に臨んで筆硯を呼び、紙に對して辭世の詩を書す。

玉皇使者自風流。四十七年花月遊。今日朝天餘一恨。君恩海岳未嘗酬。

書き終つて筆を投じてそのまま瞑じたが、最後の“酬”の字は半分より書いてなかつたといふ。佐賀の士人これを聞いて、柔和彼がごとき儒者にして、誠に士魂ある者と驚嘆した。

精里は君公に重く依託せられた儒者だけに、非常に物堅い性質であつた。穀堂なほ壯丁の頃、江戸の

詩佛一派の人人と交遊して、詩酒徵逐を擅まにしたことがある。ある時穀堂が詩佛らと舟を墨水に泛べ、妓を載せ酒を呼び、絃歌湧くがごとき中で互に詩賦の遊を盡したが、このこと忽ち風流瓦版となりて賣出されたので、これを知つた精里は大いに激怒して穀堂を膝下に呼びつけ、一紙上の人物を指もて差し示し『かかる鬼怪輩と同舟遊戯して、恬として恥ざるものが、何ぞ聖教を維持して世を導くにあらうぞ。我爾を見ることを欲しない』といつて、嗟や勘當もしかねない權幕だつたので、穀堂大いに恐惶し、百方謝して事なきを得たといふ。

これより先文化中、藩儒堤主禮の『雨の伽』といふ隨筆を見ると、

この國の代々の公かしこくまして、唐やまとの聖教を守らせたまひ、年にまして文の道あきらけく、ものゝふの業のあまたなるも、ともに盛になりゆき、又世の中のもてあそびにし侍りける事まで、缺くことなくなりもて行侍るも、代々のおほんめくみの陰、つくば山の麓よりしげく、わたつみの千尋よりふかく侍りて、家々の朝け夕けの煙のにぎやかに立るおほん時のしるしなるらん。其こと／＼のいつの頃より、この府にはしまりぬといふこと、老ひとの物がたりしけるを覺しまゝ、あるは犬馬にとしをかさぬるまで、見聞侍りしことども、そのあらましを、愚かなる子どもにしらせ侍らんと、つたなき筆をとるは、文化八のとし末のさつきの半にして、をりしもけふいく日、あやめも分かず降りくらすつれ／＼のすさびにと、以心庵の窓のもとにてかいつけ侍る事になん。

主禮の隨筆には、當家代代の藩公の行蹟その他をしるしてあるが、むろん閑叟の生立以前の筆に成るものであるから、公のことが記されていないのは當然だが、五代綱茂が文學に熱心で風流を解し、鬼丸中小路に西御屋敷といふ別業があり、丸御茶屋、三角御茶屋など、その外いろいろ雅趣を好んだ建物や室があつたとある。しかしこれは閑叟の時になつて、すつかりこの類の物を取毀ちてしまひ、中でも大きな建物はその古材の用ふべきを擇り出し、それを藩費の建替普請に使用してしまつたのである。閑叟が後學校の教授になつた武富圮南に與へたといふ書翰の中に『——不用之物を墨守して、不用之要を不得は、腐儒之學問に於ると同日之談に候べし。人は不用之物を不造不遺肝要也。余藩世々之世君にても、曾祖公など様々の不朽の行狀を遺給り候て今日に明けく、余など其範に服し候也——』といふのがあり、寧ろ物を遺すよりも、行業を遺すに如すと喝破してある。閑叟が今「曾祖公」といふのは、すなはち前代の治茂のことであらうと思ふが、治茂はいろいろの行業を遺した藩君で、歴代に屈指の人である。彼の時代には例の松平定信白河樂翁が幕府の執政であつた。定信は好學の人でもあつたし、分別才識この前後になしと稱せられた人物だけに、當時の經營に自由自在の手腕をふるひ、殆んど一代を風靡した權勢家なので、諸侯大身といへども内心この人に憎伏してゐないものはなかつた有様であつたが、治茂は徒らな敬屈な態度はとらなかつたといはれる。營中で奏者番習禮の時、これに加はつた人人は、起居幾たびとなく執政に敬禮をしたが、治茂はただ一度敬禮しただけで、そのまま引下つてしまつた。同列

してゐた脇坂侯は、これは鍋島侯の失念に違ひないと考へて、急に呼戻して注意をすると、治茂は笑つて『今、敷居際で手をついて禮を行つたから、あれでよい』と云つて、やはりそのまま引退つてしまつた。このことが忽ち殿中で噂に上つたけれども、後日何のこともなかつたのである。治茂はかうした氣象の人であつた。

藩風士氣を昂揚した儒人たち

古賀穀堂が教學一圖の儒者ではなく、一藩士氣の振作についても、相當の功績を致した人であることは前に述べたが、一たい佐賀の儒人にはなかなか武邊者が多かつたやうである。たとへば文化以前に藩費の教授から侍講に轉じた石丸龜峰名良幹、通名禮助、文のごとき、藩儒にして藩政に參與した草場佩川名翼之、通名小四郎、號霞のごとき、儒にして鋭い士魂をもつてゐた永山二水名武、字徳夫、通稱十兵衛、又寬助、號二のごとき、牟田口筠齋名通清、字天鶴、又禹圭、通稱藤右のごとき、龜峰とほとんど時代を同じうした野田無名名常尹、通稱元右衛門、のごとき、みな佐賀藩の教學を隆んならしめた功績の外に、その藩の士氣に資するところが深くして大なるものがあつたと思ふのである。

龜峰は十七八歳にして夙く藩費の都講になつた秀才であつたが、文事の外武事に精しく、殊に姉川流の槍術に達してゐて、その名一藩に高かつた。彼は世儒の迂疎固陋の體がなく、常に學問に拘束される

ことを嫌つた。一日、藩主治茂が學校に臨み、突如、生徒らに問うて『路傍に遺錢あり。拾ふべきか否か』を即答せしめた。生徒らはみな家士の子弟であり、廉潔を尊とみて金錢を賤しみ、また堯舜の世の遺ちたるを拾はずといふ事を書籍の上で教へられてゐるので、異口同音に『拾はず』と應へたが、龜峰はこれを戒飭して『それは非である。これを拾はぬのは徒らに高踏的で實際的でない。拾うて落主に還すのが本意であるが、能はぬ時は他の最善の方法を取るべきである』といったさうであるが、彼は後日、實際牛津で數百金の財布を拾つて、これを苦心經營して落主を捜し出してその難を救うたことがある。しかも彼は武事に長じてゐた故をもつて、藩の歩兵隊長の職に在ること實に三十餘年、一時儒林稀有の長老をもつて傳稱せられた人物であつた。

無名は治茂時代の藩學の教諭であつたが、廢藩後東京に出で舊雨社を結んで諸儒を會した。川田壘江や信夫恕軒は、すでにその當時講文に深い自信を持つてゐて、一つ無名を驚かしてやらうといふ考へからであつたか、各一篇の草稿を無名に提出して正を乞うた。無名筆を執つて、閲しつづ訂しつづ、殆んど完膚ないまでに朱を入れたので、壘江と恕軒は心中頗る不平であつたが、歸來それを一讀してみると、議論も行文も一句一字を動かすことができないまでに立派なものになつてゐたので、ふたりは今更ながらこれに服したといふ逸談がのこつてゐる。彼は極めて武人氣質の人物で、常に藩士の多くが懦弱であると呟やき通し『當世儒者臭い儒者は葬り去るべし』と慨嘆してゐたといふが、かつて藩主治茂に隨つ

て猪獵に赴き、傷ついた猛猪が君公に迫つて、あはや危急の場合となつた時に、彼は君公の槍を手繰りつとつて、咄差にその猪を突殺して異常な手柄を立てた。よつて彼は槍隊長の職を授けられたといふ。儒にして槍隊長となつたのも、また稀らしい事實であつたに相違ない。

原田復初の養孫同姓葭涯は藩校の助教であり、後參政の一人に擧げられた人物であつたが、如何なる譯か極めて貧窶であり、ぼろぼろの敗屋に住み、ぼろぼろの衣裳を被て、いはゆる塵を蒙むり垢を脚んで暮してゐたが、床の刀だけは明晃晃たるもので『儒といへども士である。書は敗るるまで讀むが、刀は常に新鋭を要す』と云つてゐた。廢藩後明治になつてから、參議江藤新平が久久で歸郷して葭涯を訪ひ、暫らく話を交へてから、さて便所を借らうとすると、葭涯甚だ難色あり、手を揮つていふ『厠は壁落ち板朽ちて家人といへども甚だ危い。況んや他人をや。濟まんが何うかその縁からやつて下さい』

江藤は已むなく庭へおりて、石燈籠か何かの陰で用を足した。彼は生涯かうした木強漢で押通した。天保七年三月、鍋島閑叟は長崎警固の命を幕府から受けて江戸を發し、東海道川崎の驛に宿泊し『松平肥前守宿泊』の標札を建てた。ところが、ちやうどその時徳川家の連枝一橋公の一行もここに落合つたが、何を癢に障へたものか、その前驅のものが無法にも前記の鍋島家の標札を押し倒して踏み躪つた。閑叟はこれを聞いて大いに憤激し、儒臣永山二水、牟田口篤齋に旨を含めて一橋家に強硬な談判を提出せしめ、必ずこの恥辱を雪ぐべしと嚴命した。彼らは元儒臣といへども、逞しい士魂を藏するものども

であつたからである。閑叟はこの時ばかりは、よくよく腹が立つたものと見えて、次のやうな詩まで作つて臍を決してゐる。

邸中士氣最剛雄。郷輩奮起競盡忠。請見百年培養力。海東應識我家風。

二水は程朱學であるが、佐藤一齋に親炙して陽明學を究め『當世の儒は多く迂腐の輩である。我徒はよろしく蕃山のごとき氣概を要する』といひ、またいはゆる世の武藝家の武藝なるものを蔑視して『近來の武藝は型のみが研精されて、殆んど實用に遠いものである』といつて、門下の藩士を常に警醒してゐた。彼は右の君命を受くると同時に、筠齋と同伴して江戸に引還し、直ちに水戸に藤田東湖を訪ねて今度の川崎の變を告げ、且つ一詩を示した。

既將一死附鴻毛。乘月吟過金水濤。料理機宜諸老在。腰間笑撫菊池刀。

實際彼は一命を投げ出して談判に向はうと決心してゐたに相違ない。『東湖隨筆』を見ると、この時
のことが書いてある。

佐賀藩永山十兵衛貞武者、我親友也。將扈侯還國、告別而去。經五六日、復訪吾舍。余怪問其故、則具語川崎變、搜於懷中一詩示余。余讀之深感其志。於是相共戮力議其事——

かくて二水と筠齋は一橋家にいたつて嚴重な交渉を開始したが、容易に處置を取らない。そこで二人はこれを幕府當路に訴へたところ、當路は事重大と視て仲裁を試みて穩便に納めようとしたが、二人は

斷じてこれを諾がはず、一橋家が責任者を最重刑に處分するの措置を取らなければ、君辱められて臣死すの辭句どほり、我我は屠腹して君公に謝し、併せて天下の判斷に任すより外ないと頑張つた。何分にも時世は幕府のために危急の場合であり、殊に鍋島のごときは幕府の爲には強大な支へ棒でもあるし、今これに反感を抱かれることは一大事なので、當路はつひに我を折つて、一橋家の當の責任者に腹を切らせ、下手人を打首としてこれを梟首したので、事、全く落着くことを得たのであつた。
この二水の書いたものの中に、次のやうな言句がある。

孜孜汲汲として講讀參究し、徒らに逐末の具となす。是に於て俯仰從容、瞑座體驗、頗る力を得たるを覺ゆ。乃ち謂らく、道に到る此に在りと。是の如きもの累月、神爽氣定、洒脫悅樂の意なきに非ず。然れども智識の益明なるには非ざる也。行儀の厚きを加ふるには非ざる也。畢竟氣象を好むの一匹夫のみ。是に於て暢然警醒して思らく、格物踐履の實によるに非ずして、虛見を尙び、虛氣を養ふに終り、終に益なきに終らんのみ——

彼は陽明學をもつて、學術經濟、みな實踐に資すべきものといふ建前をとつてゐたのである。一たい佐賀藩の末造時代に輩出した儒人には、多くの陽明學者がゐた。すなはち前記の牟田口筠齋、永山二水の外、三好十洲名紀始、一の名教、字士龍、通稱左馬之進、安政元年歿、年五十一。のごとき、千住西亭名健任、字士行、通稱代之助、號西亭、又西翁、明治十一年歿、年六十四。のごとき、また島樂齋名義勇、字國華、通稱國右衛門、明治七年歿、年四十。のごときみな陽明學である。この中の樂齋はすなはち明治七年

佐賀の亂に捕はれて斬に處せられた島義勇その人で、この人のごときは陽明學の良致を極端に發揮運用し、勇決果斷の性行がつひに往往事を敗り他を強ひるにいたり、世事人情と合致しない點があつた。要するにこの人一代の行動は、佐賀の士風の善い點と悪い點を併せ持つてゐたものごとくである。十洲は佐賀儒者の通有のごとき感じのある武道の研精家で、鐵砲、柔術に秀でて居り、専門家にちかい技術を備へてゐたといふ。

佐賀士風の現はれ

文政頃の藩校の國學助教に、枝吉南濠がゐた。この人の長男がすなはち後の神陽であり、次男が後の副島種臣である。この兄弟はむろんその少年時代を藩校で學んだが、神陽はまた藩校で教導の職に就き、その薫陶下に多くの英才を出した。後の大木喬任、江藤新平らであるが、大隈重信もまた彼の教鞭の下から生れた一俊髦である。しかし、大木、江藤、大隈は神陽の教訓を受けたけれども、却つてその出世の緒口は副島の幹旋配慮によつて得たものといはれる。神陽は佐賀における皇道大義の首唱者で、直接間接に維新における皇基恢宏を扶翼し奉つりし力は甚だ大きい。副島もまたこの前後において、王政復古といふ大きな目標のために、身命を賭して眞剣な活躍を續けたが、彼が生涯において一とう佐賀男兒としての剛毅な膽の据り方と、その木強な中に閃めきを藏した才氣を見せたのは、慶應四年長崎におけ

る外人の取締を自發的に斷行した時と、明治六年臺灣事件に關し、特命全權公使として北京に赴き、謁帝問題を解決して外交的手腕を示した時とであらう。彼は是より先、元治元年に佐賀藩から長崎に派遣されて、藩の留學生を監督してゐたが、この間英語を熱心に學習し、慶應三年にまた長崎に出張した。ところが翌四年に鳥羽伏見の戦争があり、幕軍の敗衄が傳へられたので、長崎奉行の河津伊豆守といふのが、これを聞くと同時に膽をつぶして何處かへ逐電してしまつたから、長崎は忽ち無警察状態になつてしまひ、收拾がつかぬことに陥つたのである。殊に憂慮されるのは、當時長崎には外人が相當居留してゐたので、これらがいづ何ういふことを仕出かすか分らない。この機會を利用して、何かを端緒に我國に對し外交上の難問題を持ちかけぬとも限らぬ。さうなると時が時であるから、こちらの不利益になるに極つてゐる。しかし奉行役人がゐないのと、後難を氣遣つて誰ひとり進んでこれに對應すべき處置を執らうとするものがなかつた。この時に身を挺してこれに當つたのは副島であつた。彼は直ちに同志を糾合して自衛團をつくり、外人の監視、市中の取締など行届くだけの手を盡して、行政機關の油を切らさないだけの方法はうまくやり遂げたのは手柄であつた。彼のこの臨機處置についての初試録は、彼が後日官吏としての實際的活動に對して、大きな自信を持たず端緒となつたに相違なかつた。

明治六年、臺灣の征討直前、副島は特命全權公使として清國北京に赴き、臺灣が果して清國の領地であつて、その政治下に置かれてあるものか否やを確めようとしたが、これを一層明確にしておくために

は、是非とも皇帝に謁見しなくてはならぬ必要があつた。しかし清廷の掟として、皇帝は外邦人の誰人にも決して謁見を許さない。このことについては外人使臣もみな不満を表し、件の掟を取消さすべく從來とも力を盡してきたが、清國政府は堅く舊規を固守してこれに應じなかつた。ところが副島は向ふの欽差大臣に對して『皇帝自らの承引でなくては信用致しかねる。何うしても謁見罷りならぬなら、ならぬでもよろしい。それならば立歸つて、その臺灣は我政府で思ふ存分に處置するだけである』と云つて座を起つたので、そんなことをされては大變と、清廷はつひに我を折つて、ここに初めて宮廷の禁を解き、副島公使に最初の謁見を許したので、外國の使臣らも副島の膽略に舌を卷いたといふことである。

副島といふ苗字は、他姓を冒してからのことで、本姓は枝吉である。枝吉は代代武をもつて鳴つた家で、副島のこの度胸をつくり上げたのは兄の神陽である。副島が維新前王事に活躍せんとした時でも、彼は最初兄神陽の指圖を受けたものであつたといふ。神陽は『男兒大義に赴くのだ、膽でやれ。大祖父の槍、祖父の劍のことを忘れるな』といつたさうだ。この兄弟の大祖父は長門之助、祖父は太郎大夫、ともに槍劍でその名を知られてゐたが、またともに「膽」をもつて鳴つてゐた。長門之助の槍は「膽の槍」といはれたが、太郎大夫は劍については『この道は業ではない』といつてゐた。要するに心術なのであらう。副島はたしかにその「心術」において、佐賀の生んだ一種の傑人であつたやうである。

佐賀の藩公たちは、世世文教を重んじたが、武道を重んじることにおいても、決して他藩の君公たちに劣つてゐなかつた。故に家士にして失あるもの、文においてすれば、大概相當の處分を免れなかつたやうであるが、治茂の代、横尾繁洋のごとき國外に脱したといふだけで、死罪に行はれた。武においてすれば、往往目こぼしの沙汰をもつて罪を緩らされた例が少くない。筑後田中某の家臣某、佐賀領の境川で領民を殺した時、佐賀藩の古川八右衛門、即座に下手人某を討果す。藩主その果斷を賞して酒盃を賜はつたが、田中某これを幕府に訴訟して八右衛門が切腹した。藩公はこれを金龜で葬むつて、子孫の祿を増す。臣下の金龜葬は、今の市葬以上にあたる譯である。

四世光茂、八幡社參拜の途、家臣石井兵庫之助屋敷前を通過したが、屋敷の中では弓の稽古中で、怪我矢が一本、君公の先立の前へ落ちた。この不念なし方は、罪切腹にもあたるべきもので、前立の士は驚いて、すぐその矢を取つて無言のまま堀の内へ投げ返した。ところが堀の内では君公の通行とも辨へず、大聲で『何奴か』と怒鳴りつけたので、つひに事が表沙汰に進展し、兵庫之助は一旦浪人したが、光茂は後年特に兵庫之助が先祖の命日を菩提所に詣で、墓前に香花を供へ、その日兵庫之助に參詣をゆるして和尚を詫人に立て、それが仲介で歸參をゆるした。彼は五百十五石の家祿であつたが、歸參の時は五百石であつた。

鍋島大膳、主君勝茂が有馬一揆の騒動に江戸を發して歸國の時、強ひて軍に従ふべく推して望むのを宥めて、右の指で左の手をさし『有馬はこの小指、江戸は手の掌』といつて、たつて江戸に留まらしめ

だが、大膳は『武士は戰場に死ぬべく生れたものだ。戦さありと知りて、壘の上に在る武士は、世に生きて甲斐なし』といつて、強ひて勝茂の跡を慕ひ、殊に有馬では軍法を破つて戦つたので、主命・斬捨よとあつたのを、宥めて流罪となつて配所で死んだ。藩公これを憐んで、三年その子を捜し求めたがつひに獲ず命日には珠數を爪繰つて香を焚いたといふ。

藩士加賀平内なるもの、平人と争つて却つて打擲せられた。同士森半七『士としてあるまじきことである』といつて、平内の顔を打ち、髻をとつて引倒し、その兩刀を奪ひとつて、その刀で彼が相手の平人を斬殺し、なほ助勢に出た二人に傷を負せたので切腹ときまつたが、死一等を減じて浪人となした。藩主は後年その半七を三十石加増して歸參せしめたといふ。半七は元百二十石であつたから、百五十石に出世したわけである。

こんな瑣談はかなりあるが、要するに佐賀の士風は、かくて藩の學風と相研磨して明治に及んだ、學館は天保度に和學の外蘭學を加へ、弘化中洋砲術をも教導して明治に及びて廢絶したものである。

福 岡 藩

居然たる西陲の雄藩、版祿實に五十二萬石、大大名の侯地である。藩祖は黒田長政、如水の男、二代忠之松平の姓を徳川秀忠より受けた。その子孫相繼ぎ、幕末長知の時、三條實美ら七卿落のこともあり、そのうち五卿九州に入つたのを擁護し、具さに尊王盡忠の素志を表した。また藩士にして王事に盡せるもの少なからず、朝廷その功を勅し給ひ、維新後藩主を華族に列し侯爵と授けられる。福岡城は慶長五年、長政これを築いたものである。

長政に『家訓』あり、益軒に『家道訓』あり

—福岡藩學條猷館—

家祖長政の遺訓

福岡藩黒田家家祖長政は、いはゆる赳赳たる武人であつて、その生涯を兵馬倥傯の間に消磨し去つた猛者に過ぎないやうに思はれるが、彼が子孫のために書き遺したといはれる『家訓』なるものを讀んでみると、さすがに少壯の頃から長い年月の下、千軍萬馬の間、劍戟矢石によつて研ぎあげられた魂の底光りが、文字の間に森沈として燿やいてゐるのが見てとられる。その文に曰く、

國を保つ主將は、思慮なくしては難叶。凡人と同様に不可心得——文武は車の兩輪の如くなれば片々缺けては保ち難し。勿論治世には武を用ひ、亂世には文を捨てざるが尤肝要なるべし。世治りて國主たる人武を忘るる時は、軍法難立、武將の家に生れては、暫時も武を不可忘。又亂世に文を捨てば制法定まらずして、政治に私曲多く、家人を治め國民を愛する實なき故、人の恨みも多き

もの也——

これによつて見ると、彼は武邊一偏の豪傑肌の大將ではなくして、すでに彬彬たる素質をも兼ね備へてゐた思想家でさへもあつたことに思ひあたるであらう。しかも『家訓』はこの點、肥後の領主加藤清正の『申渡七箇條』の“學問之事可入精。兵書を讀、忠孝之心掛、可專用——武士之家に生れてよりは、太刀かたなを取て死する道本意也——”とあるのに比して、この位ゐるの鋭い明確さはないが、清正の家士を對照にして云はれてゐるのであるし、長政のは子孫を目安にして云つてゐるのであるから、その意義においてははずつと奥深いものを有つ。果せるかな、かうしたものを子孫に遺して死んだ長政は、生前、かなりの讀書家であつたらしくも思はれる。黒田家に今も“赤本”と呼ばれる書物が秘藏されてゐるときが、むしろこれは江戸時代に市井で板行された戯れ本の類ではない。本體は四書七書である。極めて古いもので、赤紙を貼つてあるから、黒田家ではこれを“赤本”と呼ぶ。これは實に家祖長政の手澤するところの稀觀書であるのだ。長政晚年林羅山を引いてしばしば講書せしめたが、その座講の筆記『卮言抄』二卷、同じく黒田家の藏書としてまた今に傳ふといふことである。長政、年十三にして初陣に敵首を獲、以後攻城野戰のことに従ふこと數十百回、その都度手づから刀を揮つて必ず敵を屠つた。彼は劍を正田陰流の正田景兼に、銃を稻留祐直に修めてともに印可を受けたといふ。

福岡藩學の源泉は、この意味においてその涓滴を長政に發したといへるであらう。後、長政から七代の

藩主治之、頗る學を好み儒を敬し、侍臣とともによく書を讀んだが、當時龜井南冥名譽、字道誠、號南冥又信天翁又狂念居士、筑前の人、文化十一年歿、年七十二。また藩儒として擢用された。南冥は元來醫にして儒を兼ねてゐたもので、純然たる儒家ではなかつたが、かつて儒僧大潮に就て學び、また大坂の永富獨嘯庵に従ひ、更に長藩の山縣周南の門に入つて、勵精吃苦、専心徂徠學を攻研した。周南は物徂徠門下において安藤東野とともに護國の麟鳳をもつて稱せられた異材であり、南冥のごときはよく周南を知るに及んで、徂徠門第一等の人傑と推賞してゐる。しかもこの周南に承けた南冥もまた超凡群を抜いた俊髦で、經史に博涉し、文詩に秀で、加ふるに氣識卓越高邁、九州の俠儒と呼ばれた。かくて彼は徂徠學をひろく九州の地に布き、その門から多くの學人を出したが、廣瀬淡窓のごときまたその中の一人である。この淡窓は南冥に承けたけれども、必ずしも徂徠學を祖述したのではない。彼は彼として一家の學見を立てて、別に子弟教育の道を打開したのであるが、一生海嶽の師恩を忘れず、その子旭窓をして南冥の子昭陽名昱、字元鳳、號昭陽、天保七年歿、年七十四。に就かしめてゐる。淡窓のこの行爲は、たしかに淡窓その人の篤實敬恭な性格の現はれにも由るであらうが、また師としての南冥の爲人に服してゐたにも因るものである。

福岡における藩學東學併載西學甘棠の學問所創建については、南冥その人の名とその功績を忘れることはできないが、しかもその記録された南冥の名とその功績は、後年に及び却つて南冥その人の學問と行動によつて削り去られる結果になつたことは、まことに偶然とはいひながら、彼のために深く悲し

むべきことであつたといふの外はない。初め藩費開設のことについては、藩主治之すでに熱心にこれを念願してゐたのであるし、儒臣竹田定良、龜井南冥また君意を翼賛して重臣に勸説するところあり、やうやく藩中の總意を纏めていよいよ計畫を進めようとしたが、治之間もなく歿して治高世家を襲いだ。ところがこれまた一年にして歿し、齋隆襲いで九世の藩主となる。齋隆また學を好んで文教を興さんとするの志深く切なるものがあり、宰臣黒田美作またよくその君意を扶け、つひに時いたりて天明三年起工、翌四年正月東西兩館ともに落成するにいたつたものである。場處は城廓内の正門外、東はこれを脩猷館と稱して東學と唱へ、西は唐人街に在りて甘棠館と名け西學と呼ばれた。東學は竹田定良これが教授であり、西學はすなはち龜井南冥である。東學は程朱學、西學は徂徠學で、生徒は隨意にその欲する學館に入ること許された。當時學校の人事機構は總裁一、監學一、監學は大監察に準ずるにいたれば、教授一、又は二教授は後、哲學と改稱、世祿の外、米八石を給せられた。訓導六、儒者と呼ばれる。これも世祿の外八石を給す。特に功勞あるもの十、句讀師十、その他教導職役を合して總計四十人であつた。

かくて西學は二月一日、東學は二月六日開館、東學は論語の『弟子入孝之章』西學は『文行忠信章』を初めてこれを講じその式を畢つたが、當日は藩主、執政を始めとし、學館諸職、家中諸有司これに臨み、敬肅莊重に舉式した。東館教授竹田定良の撰文になる『東館學規』は次のごとくである。

東館學規

維天明癸卯年夏六月、公命有司建學館。臣良承乏於儒曹、教授東館。謹與同僚共議學規。伏惟藩祖道卜公有大勳勞於天下、享封于茲大邦。干戈始戢、經理頻繁、乃汲々焉。迎羅山林學士藩邸、執經問道、日晨弗倦。其崇尙聖學如此。然時屬草創、未遑及庠序之事。迨至宗直公、遭海內人安、國宇闡暇、政刑既明、聖教方興之時。以篤實之資兼純正之學。上洙泗下窮濂洛、閱覽博物、獨步關西。庠序之設未及舉行、歷數十年之久、將與輒廢者數矣。而後乃令親茲盛典、何其幸也。但時益儒風不振、而良等蹇劣、能薄材謏、曾不能負荷世業、以繼先生之志。何以能矜式國中。師表多士、育才造德、以稱公上之盛意哉。雖然幸有先生遺訓在、其立教導士之德、以可觀焉。この學規の文字と句章とに誤謬がかなり多い。よつて著者は、その甚しい點だに誤謬を敢てしてゐたのであらう。著者はこれを活字本から轉記したのであるが、恐らくその活字本すで更にこの學規に附記して、

凡在學諸生、當以孝悌忠信禮義廉恥爲本。必先親師樂群、養成忠孝之心、以爲他日之用。等等十八條を掲げた。西學すなはち南冥教授の甘棠館にありては、開館の當日彼が君公有司列席の前において、滿堂の諸生に對してなした最初の講義論語の『文行忠信章』の大意は、實に次のごときものであつたが、これは後日周防徳山の役藍泉鳥田氏、修驗道、南冥に學ぶ。に書信として書きおくられてゐるもので、その大概が今に分

つてゐる。藍泉は修驗道で徂徠學を修め、文詩に達し、殊にその詩においては、南冥が『西に役藍泉あり、東に南山古梁あり。古來修驗道して詩を作る者、實に藍泉をもつて始となす也』といつてゐるもので、藍泉には『藍泉集』前後六卷があり、その各體の詩を輯めてゐる。南冥と彼とは極めて親密な心交があり、特に南冥はその退藩後も、彼とは雁魚絶えざる音信の取交しをなしてゐた模様である。今ここに記す甘棠館開講第一聲にかかる書信のごときでも、その長さ實に二十尺に餘る長翰であつて、まことに稀有のものであり、これあるがために纒かにその日の模様をも想像できる次第である。ここにその書信の内容を記しておく。

——今般甘棠館開講の日は、諸太夫多くは見へ申、不佞平日懇意に無之太夫なども見へ申候に付、其日之講説は第一に政事と學問とへたゞにならぬ様被相心得、政治即學問、學問即政事と成行候様有之度、孝を勸候も忠を進候も、皆々政治之根元、當代は東照宮御制度を守り、諸國治り候へば、此制度に外れ候了簡は皆政治に害あり、政治に害ある事は孔子傳來の學問ならず候。烈聖孔子之道は世を治め百姓を安治する外は無之候。然るを儒者は儒道を主張し、佛者は佛道を主張し、神者は神道を主張して、各他道を非問する、三道をあつかふ人は皆々了簡違なり。東照宮聖人治國之主意を得と御吞込にて、佛者に君徳父子之道をおしへ、儒者も死れば僧より葬祭致し、何居士何信女などになし、皆佛になる様に被成、さて儒家佛家も、天照大神之御被は請候様に、能能治安之道を御

取計被成置候に付、人情各おちつきい申候故二百年之安樂を致候。されば此處能々御吞込候而政治即學問と御心得有之度候。さて儒道は治國之道なれば、太夫已下已上政治に預る人之道に而、主水南冥などが抱きかゝへてゐる物と被思召間敷候。卑々たる主水が儒道をかゝへて居て何の用に立申候哉。兎角政治を取扱人之仕事なれば其世其人々よく治りて、一人の怨惡する人無之候様に御治め候へば、即古聖人孔子之道にて御座候に付、當世は制度の一段を吞込被申候處、第一要傳なり——不佞十四五年以前いろは歌をよみたるに、へたゞにならぬが大事、御制度のもとひをしめし儒佛神道と申せしなり。此道理返す／＼申聞せ、太宰彌右衛門など儒道を張候ため、人の怨惡する事を餘分に申され候。さても穩かならざる氣象と被存候。孟子も穩かならず候。韓退之程子も同斷なり。皆々孟子を信じて揚朱墨子を詎ぐ事を、よき事とおもはれたる故なり。孟子朱程韓退之太宰も、儒者之道抱へてゐると了簡する故也。儒者之道は世界を治る道に而政治にかゝらぬ人のかゝへらるゝ者にては無之候。右に付孔子之御辭には、一言も左様穩かならざる事は無之候。墨子は孔子同時、揚子は先輩なれど、一言も是等に及ばれぬは、天命もありて天下國家を治めば、是等之徳によき役人にとり立て、治國之加勢させんと被思召たるなるべし。徂徠先生の政談を能々御讀被成度候。甚面白奉存候は、其處分之模様誠に經綸之才に而、人情を失はぬ場所相見申候。天下大才、中々不佞等勿論所及にては無之候。乍然今日日本之政柄を御取候は、どふで儒道最良可被成と被存候。

夫に而は日本は治り不申候。世治り不申候而は聖人孔子の道に而は無之候。是所は一大關係、細節小義に而は無之候間又々申述候。兎角儒者之道は世界を治る道にて、政治にかゝらぬ人のかゝへらるゝ者にては無之候。——兎角宋儒に僻しても明儒に僻しても、徂徠に僻しても僻すると申處少も御座候而は、皆問前之迷に御座候。唯孔子のみは如何程僻し而も害は無之候。孔子に僻して害を生じ候は、孔子の見様に間違有之候故に御座候。此物語はトフゾ懸御目申度存申候へ共、出來申間敷事故、冗長なる事ながら不覺及_レ于此申候——

記録によると、藩校建學當時の學生の數は六百餘人で、後年更に他方からの來學者二百餘人に及び、在寮のもの四十名を算へたとある。

禁

- 一、登校の刻限に遅るゝ者
- 一、終業の後監視の眼を偷み、越門出入を爲す者。
- 一、許可を受けずして勝手に遊散を爲す者。
- 一、學校の内外を問はず、身分を辨へず、濫りに飲酒を爲し、又は醉狂の振舞を爲す者。
- 一、館生同志、密かに金子の貸借を爲す者。

これはその後、學校内に貼り出された禁則であるが、もし禁を犯し、再應訓戒を加へてなほ服せざる

ものは、學校當事者が會議の上退校處分に附することがあり、甚だ惡質のものは即座にこれを處分に附することとした。

なほここに附記しなければならぬのは武藝稽古場のことであるが、これは別に建物を新設したのではない。東西兩學の開設に遅るること十數年、寛政十年にやうやく西學問所の焼跡に開設したのであつた。

儒臣武を忘れず

東學脩猷館の初代教授である竹田定良のことについては、その事蹟は詳らかに分つてはゐないが、これより先竹田春庵あり、その後黒田家の儒臣となつて世襲したものであらうか。更に嘉永前後に竹田榛齋があり、あるひは定良の後であらうかと思はれる。定良の曾考かと思ふ春庵と親交のあつた加藤重賢は、同じく藩の儒臣であつたが、事に座して藩の有司と争ひ、つひに上書して退身し、聖福寺塔中節信院に獨居して、寢具を用ずに床上に起臥してゐたので、有司はこれを狂人となして悉く扶持を收めてしまつたといはれる。

藩校の開設前後に、福岡藩の江戸邸にも學問所があり、黒岩慈庵がその講説にあたつてゐた。その慈庵の後に村山新兵衛がゐた。この村山はその頃としては一派の讀書人であつたが、彼はつねに凜凜たる氣風を藏してゐて、その講説がひどく武張つてゐたので、時の若い家士輩や、壯氣なほ消磨してゐない

元和慶長生残りの遺老たちにいたく敬ばれた。この村山の遠い肉親にあたる村山角左衛門と云つた藩士は、初平松金十郎と呼ばれた勇猛な武人で、長政の客人の前へよく呼出されて手柄話をさせられたものだといふ。長政は角左の物語が終ると直ぐ續けてかう云つた『——と申す様な次第だが、この男にむざと斯様な武功咄をさせぬ侍士が、手前のところにまだ三十人は居申す』といつて、えへんと一つ咳拂ひをしたものださうである。

黒田の家中には、不思議に武邊臭い儒者や讀書人があつた。この點隣國の鍋島によく似てゐる。長政に寵せられた尊秀法印は儒學に精しく、忠之の素讀や習字の役を勤めてゐたが、彼は四十河天神社の傍の僧堂に住んでゐて、時々鐵杖を突いて出てゆく姿を見ると、腰に銅作りの脇差を横へてゐたといふし、鐵杖を突かぬ時には、檜の棒の先に袋槍の穂を箆めたものを携へ、それに鹿皮の袋を掛けてゐたさうである。彼は忠之に素讀を授け、また文字を習書させる時に、生田津笑齋がまだ少年で侍座してゐるのを愛し、これにも一しよに授けたので、その少年は後に儒學に通ずるやうになり、後には君側に書を講じまた人にも授けるやうになつた。この津笑齋は是また一と廉の勇士でもあつて、有馬一揆の戦ひに手柄を立てたが、右の手に銃剣を負つて以來筆を執れなくなつたので、以後左の手で自由自在に書いた。ところがその文字生動奇趣ありて世上これを賞美したといふが、彼は更に右笑齋とも稱した。人これを訝かりて、先生左手を活用して文字を作るに、右笑齋とは如何と問ふと、別の仔細はない。右の没用を笑

ふのであると云つたさうである。

この津笑齋の男重貞また學を好み、能文に兼ねて軍學にも通じ、藩公にも知遇せられ、また家士にも重んぜられてゐた。彼は貞享元年、箱崎八幡の石鳥居の頽廢を再建したが、その工事中に神殿御柱の下にあつた醍醐の帝宸筆敵國降伏紺紙金泥の御符札が、何時の頃よりか紛失してゐることを知り、熱心百方搜索の手を盡して、三十七葉を發見し得、これを寶前に獻じたといふ言傳へがある。

戸田流劍法の達人として聞えた林田左文は、黒田家の足輕隊長である。彼はその名の左文とあるに恥ぢず四國の林良庵について谷時中系の學問をした。彼の書いた『秘記』といふ兵術書は、半ば漢文で書いたものであるが、章句極めて嚴明簡潔で一種の名文であるといふが、著者は未見である。ある時その隊付の足輕六人が左文に不満があつて、牒し合して人を害し、一團となつて藩を脱し、境を踰えて他國へ奔らうとした。事が直ちに判明したので、左文はこれを有司に訴へ、速やかに馬に騎してその跡を追ひ、漸やくこれに逐ひついた。彼は六人に向つて旨を諭して事なく連れ歸らうとしたが、彼らは承服しないのみならず、左文がただ一人であることを見て取つてこれを討果さうとしたが、左文は一喝の下にその四人を斬つて捨て、一人に重傷を負はしめた。かくて左文はその附近で別に馬を借り、死屍を鞍に括りつけて歸途についたが、逃れ去つたと見せて身を潜めてゐた他の一人がすかさず左文の跡を跟けてこれを斬らうとしたのを、一瞬、撃ちてまたこれを殪した。これより彼の勇名は、忽ちにして九州全土

に轟いたといふ。

立川久右衛門某は、文學に篤い藩臣であり、また弓術の精妙に達してゐたものであるが、尊圓流の書に巧みで、家には多くの經書を蓄へてゐた。その上茶道の嗜みもある上に篤實な人柄であつたところ、國老黒田一庸彼が射に精妙であることを聞いて、一日久右衛門を召してその技を見た。久右衛門すなはち射場に入つてその術を行つたが、進退行止規矩法度があり、姿勢調息はことに美事であつた。しかし矢の的中するもの十中わづかに一二を出でないので、一庸心中はなほだ満たぬものがあり、名の實に伴はぬことを洩らすと、久右衛門笑つていふ『太夫は型を見るのではなくして、射を見ようと思はるるのであるか。然らばまた易易たるものである』と。再び起つて矢を射たが、十射して十中し、百射して殆んど百中す。一庸すなはち舌を振つて驚き嘆じた。

天保中藩校の助教に魚住三郎八がゐた。事に當りて極めて敢爲の氣概があり、また酒脱事に拘束せられなかつた。一日友人と某處に會して酒を酌み、事果てて門を出ると忽ち一醉漢あり、白刃を閃めかして三郎八を斬んとす。間髪を容れず三郎八その臂をもつて彼の臂を受けとどめ、一喝して傍らの河中に投げこみ、手して左右の袖の塵を拂つて曰く『ああ恐はしい、桑原桑原、これで一命を助かり得た。さあ行かう』と。同僚彼の太膽にして心動ぜざるに感嘆したといふ。三郎八後藩世子の侍讀となつたが、ある時武場に一新人があり、刀法の試合をなして手もなく三人に勝つたので、一人來りて三郎八に計る。

三郎八そこで面小手を着け『勝はかうして制するものである』と、二三合して敵の胴とその面を打ちて勝を取つた。蓋し彼には敵の短所を見るの明があつたのである。

梶原柯山は十八歳で東學問所の指南役に擧げられた秀才であるが、十三歳の頃から武藝にも熱心したけれども、極めて無器用で大ていの者には負けてばかりゐた。ある時部屋で書物を読んでゐながら思はず座睡してゐると、何かばかりと物の落る音がしたので、驚き覺めて見ると、鴨居から落ちた鼠が縁の方へ逃げ出してゆく。彼は咄嗟、傍にあつた文鎮を取つて投げつけたが、一撃にしてこれを打殺した。彼はこれに興味を發して、後には石ころでそれを試みると、動いてゐないものはだめであるが、飛んでゐるもの、走つてゐるものなら大てい打當てることが出来た。それから以來彼はいつも用意のために鐵丸か石ころを懐ろか袂の中に入れて持つてゐたので、人は彼を「つぶての時次郎」と呼んだ。時次郎は彼の通名である。またある時、君公の野狩に供をしたが、一旦落ちた山鳥が草藪の中から飛出したのを、例の懐ろのつぶてで打落して「つぶての時次郎」の名を一層轟かすにいたつた。君公は彼の精妙な技倆に感じて『手腕ここにいたれば、礮打ちといへども武藝の一つである』と稱譽したさうである。柯山は後重用せられて藩政にも參與する身分に陞進したが、六十九歳になつてから『奉願口上』といふものを三度も差出して隠退を乞ひ、やつと許しを得て隠居したが、『我等死後披見可致書傳』といふ一通を遺して、七十三歳で家に歿した。よつて家人は遺命のごとくその一通を披いて見ると、

古へ周代の制に、大夫士に上中下の差當あり。御當國の御制を以て是に比せば、上大夫は御家老、中大夫は中老、御用勤、下大夫は御納戸頭、裏判御城代頭、上士は大組、中士は馬廻組、下士は無足御城代組に當るべし。然ば今余が列する處は下大夫の班に當んか。又古への別に、太夫たり子士たれば、葬るに太夫を以てし、祭るに士を以てすと見えたり、惣じて禮は其等を踰過て奢んよりは、むしろ内場にして儉なるこそよろしけれ——

とあつた。よつて家人はその遺教によつて葬祭のことを執り行つたさうである。

南冥の學問と爲人を信じて、大いにこれに倚頼してゐた藩の重臣に久野一親がゐた。祿四千石を受けてゐたといふから家老格の人物であつたらう。彼は特に文學あるものではなかつたが、よく教學の要を知り、またよく徂徠學の旨趣を解して、徃徃南冥について藩事を問うてゐる。一親の身分は、家老格としては、かかる大藩では最高のもではなかつたらうけれど、その鯁骨にして權貴に屈しない性格はよく南冥と相似てゐた。かつて藩主治之が家督を相續した時に、その御禮として時の將軍に謁した際、彼はこれに扈從してともに登城して將軍の御前にあつたが、奏者役のものが彼の姓である久野を「くのと披露すると、彼たちまちだみ聲高く、」ひさの四兵衛「と名乗り返した。よりに近臣みな色を失つたが、彼は平然としてゐた。但し四兵衛は、當時彼の通名である。後外記と稱した。

治之嗣なくして歿したが、これより先、丸龜の京極家から養子の議があり、表沙汰にはなつてゐなかつたが内定してゐた。然るに當時幕府には内秘の取定めとして、機會ある毎に豊臣縁故の大名家取潰しの方針が立つてゐるといふ取沙汰があつたので、黒田家の家老重役らは、この厄から藩國を救ふには、將軍家あるひはその縁家と婚姻を結ぶのが何よりも必要だといふ見地から、此際京極家の方はその儘にして置き、改めて一橋家から養子を貰はうといふ議が提頭し、家老重臣はみなこの一儀に賛意を表したが、唯一人、當時家老末座であつた一親だけが苦りきつた顔をして黙してゐた。折柄この大切な評定に、領地に隱退してゐた黒田一誠が推して出座してゐたが、一親の様子を見て「そなたは何う思ふ」といふと、一親色をなして「某は不服である。君公存命中、すでに京極家に對して内定した儀を、今更こなたの都合によつて豹變せらるることは、大國の信を失ふものであり、士道の許さぬところである。よりに某は不服に存ずる」と例の高聲で呼はつたので、一誠非常に感動し「この儀尤至極、皆皆右に定めらるべし」といつてさつさと下城した。よつて養嗣子は京極家から迎ふるに決定した。すなはち次代の治高公これである。

一親は實にかうした人物であつたので、その性格の上からよく南冥を用ゐたやうである。しかし藩政についての意見必ずしも一致せず、しばしば激論駁撃して、つひに互ひに不快の色を残したまま物別れとなることも少くなかつた。しかし後にいたつて一親徃南冥の所見却つて正しきことを悟ることがあ

り、明日登城して廳に出で『昨日はかくかくの事をかくかくに取計ふやう命じておいたが、龜井の意見はかくかくであつて、その方がよろしいと思ふから、かくかくに改めて置くがよい』と屬吏に命じ直すことがあつたといふ。これによつて思ふに、南冥は單に福岡藩儒であり、藩學甘棠館の教授であつたといふにとどまらず、また藩政についても多少の貢獻をなしてゐたことを窺ひ知るに足る次第である。

遊藝と武藝と茶道

南冥の徂徠學がなほ隆盛であつた頃、彼は夏になるとよく肥前唐津虹の松原で經筵を開いて誰にでも聽講せしめた。炎暑の折から、南冥は裸に下帶一本で見臺に向ひ、堂堂と書を講ずる光景はなかなか奇觀を極めたさうである。門弟子らもまた袴を着けたるがあり着けぬがあり、上下無檢束千萬な有様であつたけれども、その間、しみじみとした師弟敬愛の貫通が仄見えて、人をして一種推服の念を發せしめたさうである。後年咸宜園の廣瀬淡窓はよくその講筵のことを語つて回想の情を漏し、彼の情景を追想すれば、そぞろ師の爲人とその學徳の偉であつたことを仰がる。余もまたその行蹟の十分の一を倣はんことを思はぬでもないが、もし今余において左様の行蹟があつたならば、忽ちにして師徳を襲うて徒らに諸生の心を敗るに終らんのみであらう。是いはゆる鶴をまねぶ鳥のごときもので、余の徳の到底師の徳に如かざるゆゑである、といつたさうである。

南冥の徂徠學は、初め大に行はれ、その學派に屬する門流は、迅速に九州全土に亘つて流布したが、筑前筑後の地には夙に貝原益軒が盛んに行はれてゐたので、南冥の徂徠學も容易にその壘壘を侵すことは難かつたであらう。益軒は一門一族、殆んど擧げて藩の儒臣であり、東學の竹田定良といへどもまた益軒の門に在つたものである。益軒の學問は程朱であり、彼は一時これを疑うて『大疑録』を著したが、單にこれを疑つたばかりでこれを破するに及ばず、深く程朱の學を堅持してゐた。益軒には著書極めて多いが、殆んど國文假名交りをもつてこれを記述し、人倫、禽獸、國土、草木、食藥、農工に亘つて述べざるなく、盡さざるなき有様で、一に利用厚生の途に資せんとするのが彼の念願であつた。故に他儒の著書するところとは大いに趣旨を異にし、一見甚だ輕卑に似たものがあるけれども、學殖ふかくして含蓄多く、兒女走卒の輩といへど悦んでこれを讀み得るものであつた。豊後の三浦梅園かつて人の問に答へて『今儒の書にして百代に貽るものは、筑前の益軒であらう。他は知らず』といつたさうである。

益軒ある時、同藩士が所藏してゐる藩祖長政の手書なるものを見たことがある。その中にいふ『武士の心得、まづ來年の秋までの糧米を要意肝腎なり。次に鹽醬炭薪なり。矢弓鐵砲刀槍のるゐ、常々構へて油斷不可有、みな手近に備ふべし』とあつた。彼はそのことを自著の『家道訓』にとりいれて武士の心得としたといふ。すなはち『家道訓』にいふ『第一に來年の秋までの糧米を備へ、次に鹽醬をたくはへ、脯びしほをつくり、薪、炭、油をかねてよりあつむべし——武士は槍、長刀、弓矢、鐵砲、杖棒

等を常に使ひよき處におくべし』これは手もなく長政の口吻をそのままに傳へたものに過ぎないが、彼は手段はいづれにせよ、何にてもあれ見るもの聞くものを取入れて、これを自家の常識化によつて厚生に資せんとしたに外ならぬ。福岡の士氣はよくこの益軒の調子に諧和吻合するものがあつて、極めて思慮分別に富み、徒らに偏固であつたり激猛であつたりはしない。この點藩祖長政が武邊一偏の軍將でなくてよく文簡書典の趣味をも解した人であつたことにも何か根ざしを持つやうにも考へられる。隣藩の佐賀藩には『葉隠れ』があつて「武士道とは死ぬことと見つけたり」と教へ、熊本には清正の遺訓としての「武士の家に生れてよりは、太刀かたなを取りて死するが本意也」といふのがやはり後世肥後侍士の士氣に大きな響きをのこしてゐたことは間違ない。かくて鹿兒島には「兵兒組精神」が武人の意氣を強く支持してゐるのを見るが、筑前福岡にはそれらに類した何物もないし、また特種な何物もない。福岡に東學西學の學問所の建設された頃のことであるが、藩臣花房平助なるものが、藩用によつて鹿兒島の島津家に使者として赴いた。薩人が平助に問うて「貴藩には今、何が流行してゐるか」と訊いた。平助の答へに『されば、小唄三みせん淨るりなど』といつた。次に平助薩人に問ふ「貴藩は如何」薩人いふ「かつては弓と馬であつたが、今は劍槍」と。平助愕然としていふ「流行とは、時に盛衰のあるものを指して申すのではないか。貴藩では武士の常技でも、時に盛衰があるとは意外千萬」、そこで薩人は大いに愧る色があつたといふことである。しかし薩藩の武技についての流行は何うであつたか知らぬが、

福岡の小唄三みせん淨瑠璃などの流行は、博多の津といはれた、いはゆる三ヶ津の一としての土地柄として、事實であつたには相違ない。福岡にはこれを別にして、なほ他に茶道も流行したであらうし、唐物も流行したであらう。博多は昔から魂ひのすはつた多くの茶人を生み、武士にさへもその茶道精神の感化を受けたものが少なからずゐた。寛文七年に、博多の唐物の密貿易商人三十餘人が、磔の極刑に處せられたが、彼らはみな尋常に覺悟して、靜かに男らしく死に就いたといふ。その態度の見事さは武士も及ばぬ屑よさであつたと記録にある。

かかる國柄であつて見れば、福岡藩は特に武において疎そかであつたとは思へぬが、他藩に見るごとく——少くとも九州における他藩のごとく、その點を特に取立てて強調してゐたとは云へぬやうである。現に他藩ではその藩校の建設に際しては、大てい大なり小なり武藝の稽古所を同時に建設するのが普通であつたが、福岡藩では東西學問所を設けた時に、その武藝稽古所は新設しなかつた。後、寛政十年、偶然にも西學問所が火災によつて焼失した時、初めてその跡へ武技の練習所を置いたに過ぎない有様であつた。

茶道精神が武士に感化を與へた例としては、藩士立花重根のことが擧げられる。彼は藩臣としての身分はかなり格の高い側用人であり、祿二千五百石を食んでゐたが、夙に和易閑寂を旨とした茶道の感化に薰染し、茶道における雅名を實山と呼ぶ。彼は外柔にして内剛であつた博多の多くの先輩茶人の魂ひ

の洗禮を承け、悟心徹底ゆるぎない意志の持主になつてゐた。彼は茶人としての眞風雅を明らかにしてゐた。外に、詩歌の文藝にすら深い好尚をもつてゐたものである。

この夕へまたこのゆふへおもふかなくちしのきはの月にはあれと

この一首の歌は、後水尾天皇の叡聞に達し、後畏こくも御染筆の榮譽を得、勅點の御許しを賜はつたものであるといふ。

洗滌_ニ乾坤_一大夢醒。開門露地逕苔青。龍團白轉既妙了。一陣松風和月零。

これは彼が茶道の經典でもあり秘書でもある『南坊錄補遺』を完成した時に、その卷末に附記した七絶である。

彼はこれほど修養のある人物であつたが、その末路は極めて悲惨で、配所の窮廬に上意打の刃に燻れて死んだ。この悲劇の経緯はすべて黒田家の世子廢立のお家騒動に絡まるものである。すなはち藩主光之の世子綱之は、性狂暴であるために、つひに廢嫡されて屋形原栗林の座敷牢に幽閉され、光之の第四子長寛名を綱政と改めて家督を繼いだ。然るに重根の實山は、當然五十二萬石の藩主となるべくして、一朝幽囚の身の上となつた綱之に同情し、彼がためにあれこれと心を盡した事が、却つて謀反人の名を得るの素因をつくり、寶永五年に筑前鯨田に配流されたが、同十一月そこで上意打の名によつて、家中の壯士四名に襲はれて敢なく斬殺された。この壯士どもは上意を受けて向ひ來つた者ほどあつて、いづ

れも手の内すぐれた劍士であつたらうが、重根はまた茶道に遊ぶものといへども、是また武道に怠りないものであつて、寝こみを襲はれてすでに一と太刀浴びせられながら、心得たりと刎ね起きて枕頭の脇差をとつて應戦し、壯士二人に深手を負はしてその座に斬殺された。しかも實山に傷を負はされた二人の壯士は、そこを引揚げて福岡に向ふ途中つひに落命したといふ。重根の強剛思ふべきである。

徂徠學衰亡の顛末

益軒の學派によつてその全幅を占められてゐた觀のある福岡藩において、他の學派が容易に根をおろし得ようとは思はれない。そこへ根をおろしたのが南冥の徂徠學である。しかし今、東西學問所を開設して見て後に分つた事實であるが、その生徒の實數は、徂徠學の西學問所甘棠館は一時東學を凌駕してゐたが、暫らくして常に程朱學の東學問所脩猷館に壓せられたのは、如何ともし難い狀勢であつた。そこに寛政度に入つて、幕府の異學禁止令がやつてきたのである。それがため甘棠館はつひに悲運に際會し、また同時に南冥は退落の已むをえぬ身となつてしまつたのである。

幕府が新たに學制を改革し、異學禁止を決定して、朱子學の外の雜學排除を企圖したのは右の寛政元年であり、これが實施に取かかつたのは翌二年である。このことについての顛末を、今假りに著者の『近世儒林編年志』から引用しておく。

——この歳幕府は學制を改革し、朱子學を根據としてこれを正學と稱し、他の異類の儒學をすべて禁壓する方針を樹てた。まづ柴野栗山、岡田寒泉をもつて聖堂取締役とし、表面は大學頭林信敬と俱に三人協力すべき旨を命じたが、實は信敬の實力を奪ふことになつたのは當然で、同時に信敬に對しては『被仰渡御書付』なる申渡書を交付した。これによると『其方門人にも正學ならぬ者あり。是正學衰へたるため也』との文言があり、協力云云とはいへ、實は譴責の申渡であつたことは明らかである。

また同書の寛政四年の項に次のごとく記してある。

——これより先福岡藩の督學となつた南冥は、この歳その職を罷められた。理由は太宰府都府樓に建てた碑面の文に不穩な文字があつたといふのであるが、實は幕府の政策である異學壓迫の犠牲となつたものである。南冥は福岡藩に初めて徂徠學を植ゑつけたのであるが、それが江戸幕府の忌憚に觸れたがために外ならぬ。彼の詩の一つに、

山郭連_三都府。城池控_三海洋。偉哉新建_レ國。依_レ舊鎮_三西羌。

といふのがある。『新建_レ國』の三字が、恐らく附會されて禍難の因となつたのかも知れない。これがため南冥は、その生涯を憂悶懊惱の中に過した憐れむべき儒者であつた。彼は剛直果敢な性情の持主で、權貴といへども避けざる傑士であつただけに、またそれだけ俗流に憎しみを買うてゐたや

うでもある。

また同書文化十一年の項に、南冥の死について記述してある。

九州の南冥が逝いた、年七十二。彼はこれより先心疾を發したといはれる。佯狂ともいひ、自から焚死したのだともいはれる。

南冥の死は、當時心ある儒者たちにはいたく氣の毒がられたに相違ない。その中でも最もこれを悲しんだに違ひないのは淡窓であらう。南冥が曩に幕府の異學退治の鋒先にかかりて福岡藩を罷められて以來は、學界のどん底に沈淪してつひに浮ぶ瀬がなく、憂心忡忡の裡に死んでしまつたが、中途その門下に投じて一時彼に贊をとつた淡窓は、今や文名西陲を壓するばかりに持囃され——

南冥はかくのごとくしてつひに退落沈淪したのであるが、しかし彼の植ゑつけた徂徠學は、よりて直ちに根絶えしてしまつたのではなく、甘棠館はなほ暫らくは持續された。すなはち南冥去つて後、館の教授に補せられたのは彼の門人筆頭であつた江上蒼洲であり、その下に隸屬した訓導が三人あつて、山口白賁、後藤富春、龜井昭陽これである。昭陽はすなはち南冥の息、白賁は昭陽の妹婿であつて、蒼洲に亞ぐ龜井門下の才人とされた。

幕府の異學禁止は、かなり嚴重なものではあつたが、しかし儒を坑し書を焚くといつたやうな苛烈な

ものではなかつたので、發令以後といへども、必ずしも他派の學問が全然絶滅したのではない。ただ南冥の場合は、彼は九州における徂徠學の急先鋒であり巨魁であつただけに、彼をしてこのまま依然たらしめることは、彼の學派をして更に傳播蔓延せしむる虞れがあるために、まづもつてその巨頭を齏りて、禍の根元を艾除したものであり、これをもつて他の「見せしめ」に供したに外ならぬものであつたらう。故に幕府のこの政策の手は極めて峻嚴に動いたのではあつたけれども、これを急激にしてその効に迅ることは、却つて人情を壞り民心を惑亂せしめる恐れのあることを、爲政者はよく吞こんでゐた。要はまづ根を斷つておいて、その枝の自然に枯るるを待つといふ手段に出たのである。南冥はまづその最初の犠牲として教壇から逐ひ墜された一人なのであつた。ところが久しからずしてさしも福岡における徂徠學も、つひに離散敗亡の已むなき時期に到達するにいたつた。それは甘棠館の焼失と江上蒼洲對南冥の師弟乖反である。

南冥が藩校を罷められた後、その高足江上蒼洲が教授に補せられたことは前に書いた。然るにその甘棠館は寛政十年火災にかかつて焼失してしまつたので、藩ではその生徒をすべて東館の脩猷館に移してこれに合併を行つた。すでにこの頃は甘棠館の通學生は數において非常に減少してゐたし、藩の方針としても、これを機會に徂徠學のものを朱學に轉向せしめることになつて居り、すべてその手心で處置されたが、中にその轉向を肯んぜぬものは登校を中止したのもあるけれども、この藩の方針に背いて押

して徂徠學を遵奉せば、將來藩への登用についても考慮を加へねばならぬといふ色を仄めかしたので、それによつて節を屈しておめおめと東學問所通ひに甘んじるものも多かつた様子である。

江上蒼洲は龜門傑出の異材であつたが、後、師の南冥と情誼に悖るところがあつて、殆んど絶交のごとくになつてゐたが、文政三年蒼洲の歿後、南冥はこれより先文、化十一年に歿す。門生は四散してしまつたさうであるから、これから以後、福岡における徂徠學は、寥寥晨星のごとき淋しさになり終つたであらうことはいふを須るまい。

南冥の子昭陽もまた傑物であり、南冥自身もその子の器質を常に賞揚して止まなかつた。南冥歿後の昭陽は、藩臣としてはわづかに烽火臺係か何かの小吏に過ぎなかつたけれども、儒人としての文名は藉甚たるもので、つひに蒼洲の名さへも歴するにいたつた。淡窓にそれらの消息を傳へた記述がある。

初予六七歳、始て句讀を授りし時より、南冥先生の名耳に轟きたり。既にして江上蒼洲山口白の二子、龜門の冠たることを聞き、其後に隨んことを願へり。其後藤左仲に逢ひ、委くかの中の事をきゝ得たり。其時は昭陽先生の名まさに起り、原震平の詩名又噪けり。南冥先生毎に二子を並べ稱せられたり。嘗て、詩有「震平」文有「昱」昭陽通名、昱太郎。の句あり。江上山口の二子は已に之が爲に光を奪られたり。予筑に遊びし後は、大壯南冥の二男、昭陽の弟、僧。大年南冥の三男、大壯の弟。が名隆々として起る。南冥先生の詩にいはるることあり。屈指文章士、關西僅有「徒」、我家三才子、古處一狂夫、と。時に四子の名方に盛な

り。予輩後進の者に至りては、昭陽を見ること猶夫の及べからざるが如し。只他の三子を尙慕して、之が亞流たらんことを願へり。後に至り南冥先生予を稱して、三兒及原古處に次で起るものは、是の子ならんとの玉へり。其時に當りては過分の寵榮とせしことなり。

南冥の門にこれらの俊才はあつたが、要するに前述の事情で、これより以後九州における徂徠學は衰微の一途を辿るより外はなかつたであらう。藩學脩猷館はいふまでもなく、つひに程朱學の一本立に歸してしまつたのである。今假りにこの時から以後、學館の教職に任じた人人について、その數名を拾つて見れば左のごとくである。

安井金龍 藩儒、藩學脩猷館訓導、天明六年秋月藩に聘せられて文學となり、寛政中江戸藩邸にあり藩主の侍講となつた。同九年歿す、年五十。

許斐運齋 藩學助教、經學に深く、資性沈厚溫和、文詩の浮華を好まなかつた。子息新五郎、また脩猷館の加勢役を勤務す。弘化二年歿す、年六十四。

中島檜林 竹田梧亭に學ぶ。藩學訓導、天保中世子の侍讀に進む。剛果純樸、毎に藩學大會讀の判者に推された。生徒を教ふる深切懇到をもつて聞ゆ。天保十年福岡に歿す。

石次宜春 幼時龜井南冥に學ぶ。文詩に善くまた書に巧みであつた。後博多に帷を下して子弟に教ふ。かつて藩の士列に入りたるが、時務の才ありて盾吏と稱せられた。天保九年歿す、年七十二。

佐藤飽齋 藩學訓導、文政七年擢んでられて侍讀となる。飽齋吏として功績があり、七十にして老を告げ、致仕を乞ふこと數回聽かれず。藩主優遇到らざるなかつたが、文久二年病みて家に歿す、年八十二。爲人簡素沈厚、家居明窓淨几、默默として書を讀む。在職五十餘年、恪勤措かず、出でて祇役に就く、前後實に二十數次といふ。

魚住樂處 藩學見習、後郡代となつた。慶應元年、王事に盡さんとして禁錮せらる。後釋されて、藩學教授に拔擢せらる。次で黒田家に入りて家令となり、明治四年福岡藩大參事、八年歿す、年六十五。學に篤く音樂に通じ、また醫術をよくしたが殊に武藝に精妙であつた。

中島平泉 藩學訓導、よく生徒を教導して人望があつた。詩文に長じて敍說諷詠極めて多い。安政五年歿す、年五十四。養嗣子中島古道は秋月藩士萩谷良齋の男、藩校の教師であつた。後江戸にゆき林門及安積良齋に學び、慶應歸藩して藩學訓導、明治三年同教官、十五年福岡師範一等助教諭、二十四年七月歿す、年六十三。

永田松窓 藩學教員、江戸に出でて林門に學ぶ。明治元年執政所副議事にして侍講を兼ねた。次で參政所副議事となり、藩學訓導たり、又次で故ありて職を罷められ姫島に引退し、後歸りて家塾を開く。明治七年歿、年四十二。

渡邊詠歸 藩校教官、安政二年侍講、次で藩校訓導、在職四十年に垂んたり。經史に通じ博學を以

て聞えた。資性敦厚人と争はず、居常苟くも愷容なし。明治四年歿す、年六十七。

原田北溟 藩校教官、安政三年侍講、明治初年私塾に教授し、また芦屋中學の教員となつた。爲人謹直、よく生員の信望をあつむ。明治十五年歿、年六十五。同十八年に門生碑を建て、舊主黒田侯『恭且勤』の三大字を贈つてこれが篆額とした。

辛島並樹 藩校教師補、明治元年副訓導、明年訓導となつた。七年箱崎神宮の祠官、十一年辭して旭櫻學舎を建てて生徒に教ふ。資性恭謙にして至孝、舊主黒田侯これを賞して物を贈る數次といふ。明治十年歿、年七十四。

宗道遙 藩校助役、特に左傳に通じ、人綽名して宗左傳と呼んだ。その他經史を博涉し詩文に達し聲譽はなほ高かつた。明治に入りて有終舎を設け生徒を教導す。爲人格謹にして儉素、藏書數千卷に及んだ。明治三十七年歿、年八十一。

正木木雞 明治三年藩校助役、四年副督學、藩校に在ること前後五十年であつた。後不狹學舎を起す。生徒四方より廣集し、門生簿に登るもの四千といふ。三十一年藍綬章を受け、大日本教育會また功績章を贈る。同三十五年、明治大帝九州行幸の際特に賜謁の恩命に浴した。同年歿、年七十八。
海妻甘藏 藩儒井上周磐の男、藩學の書物奉行、明治元年文武館和學總裁となつた。各地に開塾して生徒に教ふ。博學強記、夙に皇風の宣揚をもつて任としてゐた。皇室關係の著書尤も多しと云は

れる。明治四十二年歿す、年八十六。

中島夕佳 藩校師員。文久元年江戸にゆき林門に入りて學び、次で聖堂に移つた。三年書生寮副社長、同年歸藩又藩校師員となつた。明治二十二年歿、年六十一。

藤井葎園 かつて江戸林家の塾に學ぶ。明治三年藩校授讀、七年寮長、十三年藤雲館勤務、藤雲館記を作る。二十四年五高教授囑託。四十二年歿、年七十二。

宮本竹墩 江戸安積良齋塾に學びその學監となる。次で江戸藩邸世子の侍讀、元治慶應の際公用をもつて諸藩に使ひし、功勞多きをもつて藩主から時服を贈らる。明治に入りて教育界に貢獻するところ多く、文部省より一等賞典を受け、大日本教育會また功績章を贈る。また舊主黒田侯の囑によりて脩猷館中學の倫理科教師となる。二十七年歿、年七十四。

藩學と幕末の世情

藩校脩猷館は、文久年間にいたつて館舎が甚しく腐朽し、使用に堪へない個處さへも生じてきたが、藩は財政の窮乏に追はれてゐる折柄なので、これを如何にすべきかが問題になつてきた。ところが濱貞彝なる人が資を投じてこれが改築に着手することになり、文久三年工を起し、元治元年にいたつて竣工した。ここにおいてか、藩の教育事業はわづかに纒を斷たずして幸ひに緒を繋ぐことを得たのである。

時に世はまさに幕府の最末期であり、封建政治二百八十年の傳燈は、新世界黎明の曙光の前に、將に最後の光炎を揺がしてゐる。時代的な烈しい嵐が、大地を割つて噴き上らうとする猛激な殺氣と、きのふまでの太平の夢を、今一度刹那の娛しみにして貪らうといふ。かういふ矛盾した二つの思想が絡み合つて、ある人人は髪の毛を逆立てて血眼で走り廻つてゐるが、ある人人は脂粉の香を嗅ぎ求めて駒下駄を引鳴しながら、薄暮の細露路を彷徨ひあるいてゐた、といふ異様な時代相であつた。

かかる世潮の中に生きてゐる人人には、果然次の世界に焦燥り立つものと、過去の世界に獅噛みついて離れまいとするものとの闘争がある。かかる水火の戦ひの雄たけびの餘響が、藩學校の中だけに傳はらないといふ譯にはゆきかねる。されば時代が文化文政から嘉永安政、さらに文久元治と追追慶應明治を區切る大維新の黎明期に近づくに従つて、その藩校の内部の模様もまた變つてゐた。すなはち、その教職にあるものの幾人、生徒の中の青壯年者中の幾人は、朝から晩までの四書五經だけの句讀や講義のみでは、もはや物足りない感じ——不安な氣持に驅られることの如何にともすることが出来ない羽目に陥つてゐるものを生じた。さういふ輩は、みな學つて蘭書を読まうといふ慾望に燃えてゐたのである。殊に福岡、佐賀兩藩の子弟には、さうした考へをもつものが少くなかつたやうである。それは當時我邦としては、外國に通ずる唯だ一つの呼吸口である長崎の衛戍の役目は、主として福岡、佐賀兩藩が受持つてゐた關係から、従つて長崎の消息がよくこの兩藩の耳目に新しい便りを運んでくる機會が多かつた

によるものであつた。長崎の衛戍は、鹿兒島その他の藩でも受持つたこともあるが、福岡、佐賀が主としてこれに當つてゐたやうである。安政頃、勝安芳の記録するところによると、その長崎の海軍傳習所にゐた福岡藩の派遣生は河野禎造、金子才吉、平賀磯三郎、白井謙次郎以下二十餘人であり、藩學の講師であつた竹田榛齋の門下安部龍平は、藩の保護を得て蘭語を研究してゐた。その子忠吉また蘭學に熱心で、後藩主の保護下に米國に遊學して外語を學び、明治三年歸朝して藩學で蘭語の教師をした。しかし藩校内にもこの蘭學への挑戦者があり、蘭學の皇國に害があり、つひに皇道を侵さんとするものであるから、これは速やかに排除しなければならぬと絶叫して、頻りに反鼓を鳴したのも二三人ではない。その急先鋒に中村無二がゐた。彼は安政三年に學館の師員を勤めてゐたが、いはゆる尊王攘夷黨の一人で、四方の志士と交通し、つひに脱藩して諸國に流浪してゐたが、捕はれて歸藩して後博多の放光寺で斬られたが、最も猛烈極端な蘭學排斥者であつた。須原秀助また藩學を出たものであるが、是また洋學反對の一人で、前に記した長崎在學の金子才吉を狙つて藩に幽閉せられたことがある。その金子才吉もまた後長崎で外人を斬害して處刑されたといふことであつた。

この時分の藩主長博は、前代齊昭の後を享けた人で、才識があつて事を處するに明敏であつたし、藩としてもかなり時代に適應した事業を立てたが、遺憾なことには藩臣にこの人を補佐してその手腕を十分に揮はせるほどの者は極めて乏しかつたらしい。殊にその後藩の重要な地位に座した吉田某といふ家老などは、頻りに君公の才器を押へてこれを孤立化せしめ、自己の地位を安固にして權勢を張ることだけに

腐心してゐたといふ取沙汰をのこしてゐる。是より先長溥は藩内の兵制改革舊制を改めて佛蘭西式にするに就てについて宇和島藩主伊達宗誠に『西洋訓練之儀段段引立致出精候處、一旦は餘程多人數にも相成哉之處、近來又々十分に無之、甚以小子一人心配之至に御座候——右訓練は何ぞ小子物好に而致候儀にも無之——實に彼之長を取用候事可然事に候得共、重役初め平日心懸薄く、先以來之軍法にて十分と存、異人は何も不辨者之様に存居候者不少なり。表向は小子前に而は相應に申居候得共、内心如何と二の足を踏み居る者不少候——是非共追々宜敷可仕候得共、一人に付甚以心配仕候間、打明奉申上候——何分五大洲之事情不存人々には困入申候。色々申談候而も不三相分一候。乍然ビストンの事は、火繩よりは宜敷と申事家中半分位は、近來相分候哉と存候——』といふ音信をしてゐるものについて見ても、長溥の眼識だけが圖ぬけてゐて、當時の藩臣は大てい時勢の才に乏しく、進取の氣象に缺けてゐたことが分るやうである。

長溥は島津重豪の第九子であり、入りて黒田家を襲いだのであるが、父重豪の氣識を享けて極めて賢明超邁な君公であり、壯年にしてよく世情にも通じてゐたし、處世の上についてもしんみな試験を経てきてゐる人であつただけに、徒らに大藩の「お殿さま」のやうな伸つ放しなのほんんな人でなかつた。しかも何分にも時代に適應した自分の理想を實現するには従つて多額の費用を要することでもあるし、藩の財用行詰りの折柄、何うにも繰廻しがつかないには一とう困りぬいてゐた。しかも彼は才器があり、聰明な人物ではあつたけれども、一面やはり一般的な時代の思想感情には抗することの出来ない一

人であり、その江戸での在邸中には随分いろいろな人情の弱點さへも、殿さま生活の陰に描き出してゐた。すなはち彼は一面においては立派な時代の識者であつたが、他の一面においてはまた凡夫的な遊治郎でもあつたことである。しかしこれは決して藩主大名としての彼ひとりのことではない。たとへば島津齊彬にもすでにそれがあつた。少し前の松江の松平治郷、すなはち不昧にもそれがなかつた譯ではない。また當時の柳澤美濃守、すなはち米翁にもそれがあつた。彼らはすべて時代の轉換期前後における糜爛した世情の中に江戸生活をするうちに、時勢の波にさらはれて攀花折柳の遊びをやつてゐたものである。米翁侯に『宴遊日記』といふ著書があるがこれは回数實に百三十回にのぼる中村、市村、森田三座の觀劇評である。不昧侯のごときでも、芳原の太夫に深い馴染があつた。これはその時代の時代性が彼らを驅つてここにいたらしめたものであつて、その失を必ずしもこの人達の不明不徳のためにのみ歸せしむるわけにいかぬ。

福岡藩の江戸詰に吉田權右衛門といふのがゐたが、彼は芳原の遊女に狎れて勤向に少しばかり手落があつた。それを目付役が発見して、嚴罰に處することに決したのを長溥が知つて、私かに金を權右衛門に遣つて女を落籍させ、そのまま逐電さしてしまつた。その使ひをしたのは神屋宅之丞といふものである。ところがこの二人は實は長溥のお伴をして度々芳原へ遊びにいつてゐたものらしいといふ。しかし、かうした事實があるからといつて、長溥その人は決して柔惰爲すなき君公であつたといふのではない。

却つて大名諸太夫たちのみに限らず、幕末維新前後の士人には、士風とか士氣とかいふものについて極めて壯盛な魄力をもつてゐた輩が少くない。従つてその言行には往々後人を感奮興起させ、懦夫をして起たしむるに足るものが多かつた譯でもある。いづれにしても時代の風潮の人心を支配する力といふものは、非常に強大なものであることを思はぬ譯にはゆかぬ。

藩の脩猷館も、さういふ氣の立つてゐる時代の影響によつて、その頃頼に通學生の數が増加して、校舍が狹隘を告ぐるにいたり、長溥は城内の居館の半ばを割いて、これを文教部と武教部に充てて文武館と呼んだ。當時脩猷館は従來通りのものとしてあつたが、生徒の員數だけは極めて多かつた。すなはち一時は國學二百人、漢學七百五十人、洋學百八十人、算學百五人、醫學百二十人、合計千三百五十五人といふ記録をのこして居り、實に藩學設立以來の最高度の隆盛さを示した。當時その教官の數は國學十人、漢學三十六人、洋學四人、算術方四人、醫學四人であり、年額の經費豫算高四百二十七兩と計上された。醫學部を加へず。また當時郡部に學問所の出張所が四ヶ所あり、私塾は福岡城下と郡部を通じて百三十餘ヶ所に及んでゐたといはれる。

長 州 藩

長州山口の毛利氏は、元就の時代、山陰山陽において十ヶ國を領したが、關ヶ原役後徳川氏に隸屬して、防長二國三十六萬九千石を保ち、長門の萩に移つた。幕末、藩主敬親の時になつて尊王の大義を唱へ、勅書によりて京都に派兵し、禁裏を守護したが、幕府の沮むところとなつて蛤御門の變を起し、三條以下七卿の長州藩となり、更に赤間關における外國聯合艦隊との衝突、幕府の長州征伐、是より先萩より山口への移封等があり、藩事多難の中に幾多の志士英傑を出して、明治維新の大勳功を立てた。

ノへ百五十年の研精・文教と士魂の交流

——長州藩學明倫館——

松陰の七則と周南の功令

萩にあつた長州藩の藩費明倫館は、元治元年藩地を山口に移轉した際、同時にその地へ移されたものであるが、その前後藩の領内に存在した學塾——私塾は、ある記録によるとあらまし次のごときものであつた。この當時、山口に明倫堂といふ學塾があつた。これは學舎としての性質からいふと同じく一の學塾であるけれども、この以前から藩の特別な保護支配を受けてゐて、萩の明倫館が山口に移された後は、前記の明倫堂に對して、これを鴻城明倫館と改稱し、次で明倫館となつたものであるから、ここに掲ぐる他の學塾の中には、その名を加へないことにした。なほ明倫堂については後段において詳述する。

- | | | |
|--------------|--------------|--------------|
| 越氏塾 (三田尻) | 時觀館 (佐波郡石田村) | 敬樂館 (長府) |
| 集童場 (長府) | 鳴鳳館 (徳山) | 養老館 (玖珂郡横山村) |
| 育英館 (豊浦郡清末村) | 朝陽館 (厚狭郡厚狭) | 憲章館 (吉敷郡吉敷村) |
| 育英館 (阿武郡須佐村) | 徳修館 (熊毛郡安田村) | 克己堂 (熊毛郡阿月村) |

長州藩